

越谷市郷土研究会会報第十一号

古志加具谷

平成十三年六月刊

卷頭言

越谷市郷土研究会

会長 谷岡 隆夫

二年ごとに刊行している会報「古志賀谷」を、予定どおりお届けすることができた。越谷市郷土研究会は、二八〇人を擁する大所帯となった。

月例の史跡めぐりや講演会が実施できるのは、日頃の会員のご協力と役員ボランティアのたまものと感謝している。

史跡めぐりでは、当会のオリジナル・コースを取りいれている。個人ではできない見聞をし、楽しんでいただいている。

二十一世紀にはいり、私たちは気を新にして、郷土研究会に会員が何をともめ、活動したいかをさぐりながらあゆみたい。

入会してよかったと、皆さまの満足の声が聞こえるような活動をねがっている。

今年、徳川家康が、日光街道などの五街道の宿駅制度を設置してから四〇〇年にあたる。宿場町越ヶ谷の歴史を読みとり、あたらしい意識で、街と住民のかかわりや今後の地域の発展をさぐるよい機会である。

郷土研究会へ皆さまの積極的参加により、ますますみがきを深めることを願ってやまない。

目次

巻頭言

谷岡 隆夫

旧日光街道きき書き

郷土研究会 1

越谷の天下サマ「しほや吉兵衛」

高橋 正輝 8

わが人生の輝ける日

平野 きよ 13

越谷のお正月と「とうかんやのわらでっぼう」

金岡由紀子 21

増林地区の石仏

加藤 幸一 26

「藁細工・祝い亀」のこと

宇田川正治・一色 英子 55

二十世紀余聞

高橋 清 58

増林地区の江戸時代の寺社

山本 泰秀 60

旧「越巻」地名考

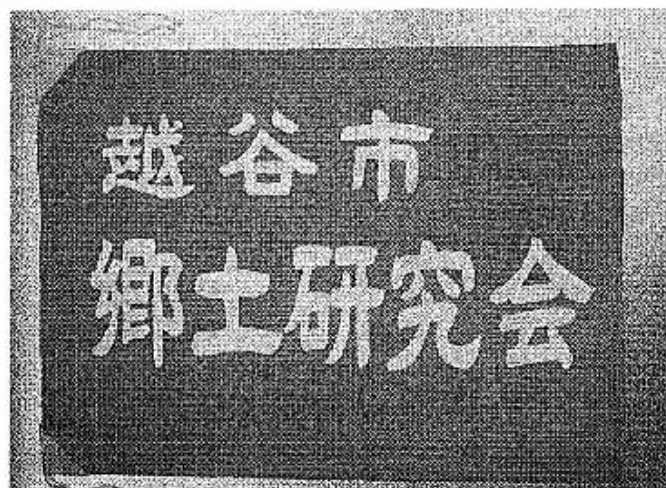
酒井 達男 64

「古志賀谷」十号狛犬・追加と訂正

泉 雅彦 66

謎の石碑

泉 雅彦 68



越谷市郷土研究会旗

博物館のない越谷

菅波 昌夫

69

越谷市・資料館都市構想

宮川 進

71

史跡めぐりの記録

郷土研究会

75

★会員アンケート

94

★役員紹介

100

★史跡めぐり・研究発表会

105

★文化祭展示一覧

106

★会員名簿

107

★会 則

108

★役員名簿

110

★あとがき・編集委員

111

表紙 金子 泰岑

旧日光街道きき書き

越谷市郷土研究会

「日光街道」、江戸五街道の一つである。

越ヶ谷宿は、日本橋から三番目の宿場町として繁盛した。

往来する人々はおおかった。

將軍の日光社参に供奉する大名・参勤交代の大名(四十一家)・日光門主(年三回)・日光例幣使(江戸参府のみ)・各地の代官・幕府公用者・商人・講中・湯治客・佐渡送りの囚人などである。人々が落とす金、必要物資の調達、近郷近在の人々の出入りなどで、地方のセンターとしての役割を担ってきた。

越谷町は商業が盛んで、穀物商・肥料商など各種の商店が町の繁盛を支えてきた。

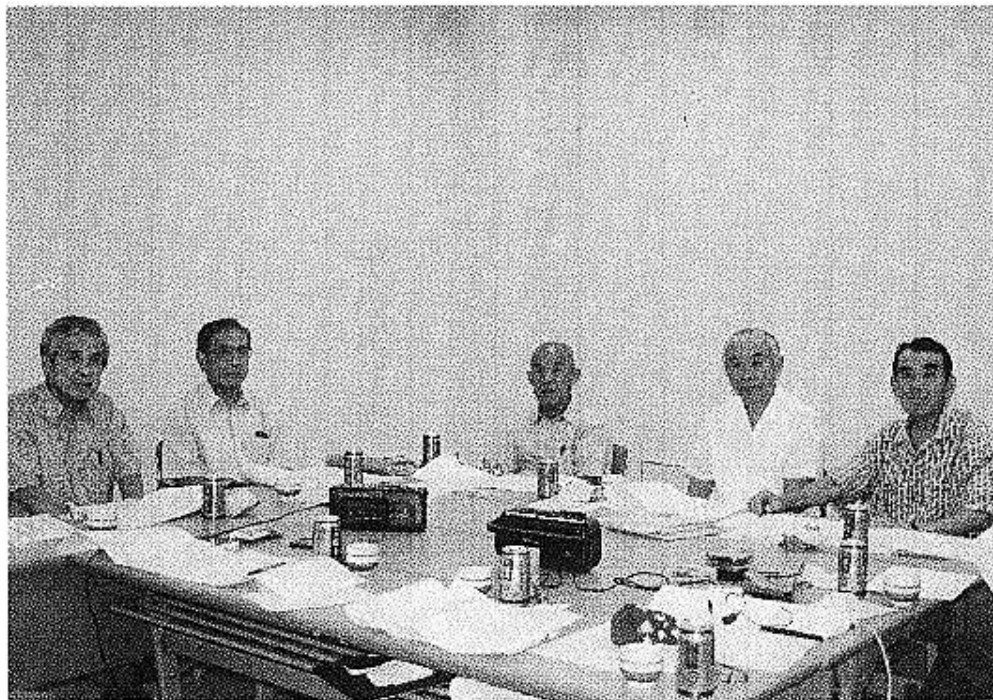
大沢町は旅宿が多く、往還の旅人に休息の場を提供してきた。

第二次大戦後は、経済構造の変化・交通の発達により、昔ほどではなくなった。

昭和四十年代にはいると、旧日光街道の賑わいは次第に失われた。二七の市は姿をかけた。

現在は、量販店の進出で商店経営は思わしくない。加えて、後継者の確保が難しくなっている。

商店会では、昔日の賑わいを取り戻すよう、いろいろの手だてを模索している。



旧日光街道座談会

平成十二年十一月に実施したフリーマーケットは、復興への一つの手がかりである。

旧日光街道の皆さんが語る

以前から越谷在住の方々に、むかし話をしていただいた。

内藤 録次氏(越ヶ谷二丁目)

石塚 陳正氏(越ヶ谷二丁目)

箕輪余三郎氏(中町)

岡野 俊夫氏(中町)

名倉 幸氏(赤山一丁目)

▼ 名倉です。赤山一丁目で町会長を四年ばかり、民生委員を二年ほどやっております。

▼ 私は箕輪と申します。中町で親の代から洋服屋をやっております。

▼ 鳩ヶ谷街道から北へ三軒目、陶器商・岡野俊夫と申します。先祖は桑名から行田へうつり、明治二一年新になって越谷へきました。

▼ 私は越ヶ谷二丁目の内藤録次です。父は内藤滝五郎です。本町三丁目の内藤嘉兵衛は親戚にあたります。

▼ 越谷二丁目でお茶屋をやっております石塚と申します。内藤さんと同じで、生まれも育ちも越谷です。

瓦曾根溜井

|| むかしの瓦曾根溜井はどうでしたか？

▼ むかしはよく遊んだ所です。流れは一本でした。堰枠は四つか五つあったんですよ。

▼ 枠の近くに小魚やうなぎもいたんですよ。それをとって行商している人もいた。

▼ 瓦曾根溜井は広がった。子どもころ泳いで遊んだ。

▼ 水門を閉めれば、貯水池になっていた。

▼ われわれ悪戯鬼のいい遊び場になっていたんですよ。

▼ 四ヶ村用水・八条用水・葛西用水・谷古田用水などがあった。

▼ あそこで締め切って、葛飾・都内へ供給していたんですよ。

|| 用水はすべていきていますか？

▼ 四ヶ村用水だけが暗渠でね、水路はありますけど、流れていない。

|| 藤田病院の前あたりに土橋がありました。

▼ ほんと2mくらい。手摺りもない。

脳には草が生えて、リヤカーを引いて渡ったことがあります。

▼ 増林は寺橋を渡らなければ行けなかった。

増林の人々が、早くいい橋をと運動した。

▼ 溜井に洗濯場がありましたね。各町内は五・六段の石の階段をつくりました。当時の主婦はたいへんで、敷布なども広げてゆすいだもんです。

▼ 私の近所の階段は、平和橋の近くと、元の郵便局の付近の二ヶ所あったんですよ。

▼ 泳ぐとき、遊ぶときも石段を使うんですよ。

▼ 寺橋では、青年団が水泳場を経営してましたからね。あそこは広かったですから。

浅草の仕事師の頭が水府流の先生で、毎年きましたよ。

青年団がよしず張小屋で危険防止の見張りをしているんです。

▼ 川の真ん中あたりに櫓を組んで、飛び込み台をつくったりしてね。越谷高校の女生徒が通ると、いいところ見せようと、青年団が橋の欄干からとび込んだりする。

▼ 越谷の子どもたちは、みんな水練場ですね。

▼ 私は小川先生の向井流を習ったんですよ。

▼ 大沢橋から水門まで遠泳をしてね。

▼ 戦中、近くに防空監視哨があった。

▼ 青年団が交代で見張りをした。

終戦でなくなりましたよ。

町のよつす

|| 越谷駅ができたのは、大正九年だそうですが？

▼ 東武鉄道と交渉して越谷駅が開設された。

▼ 越谷駅は、はじめは大沢にあった。今の越谷駅ができて、

武州大沢駅といった(現北越谷駅)。

▼ 越谷を中心にしてバス路線ができた。



松竹歌劇団・越ヶ谷青年団 水泳場資金募集記念 (東武劇場) 昭和22. 5. 8

のち、東武に統合・買収された。

▼ 大沢町の元荒川沿いに、花街があつた。この街道筋には、花街は千住と大沢にしかなかった。

大沢に東武劇場があつた。廻り舞台で立派だったですよ。

下がたたみ敷きで、棧敷がありましたね。

▼ 水泳場の資金かせぎで松竹歌劇団を毎年よぶんですよ。

小月冴子も出演しましたね。

▼ 劇場が終わつてから越谷へきた。皆よく来たもんですよ。

▼ 大沢橋で花火大会があつたし、仕掛けもあつた。

▼ 大沢橋の花火は、戦後はなくなつた。

▼ 子ども同士では、川を境にして石投げをしたり、子ども

だけでは安心して橋を渡れなかつた。

▼ むかしの越谷の町は、穀物商・肥料商があつて、近郷の

物資の集散地だった。繁盛した町だったと思ひますね。

▼ 藁工品・荒物屋などもおおかつたね。

▼ 町の発展は順につくられたものではないんですよ。

自然発生的に町ができたと思ひますよ。

▼ 統制経済の時代には、コメと肥料を交換した事もあつた。

▼ 越谷駅前に大きな倉庫がありました。

▼ おおきい商人がいましたけどね。

▼ 子どものころ、二七の市がある時は市へ行くんだ。植木

とか、年末には正月用品など並べていてね。風情がありました。

▼ 将棋・五目ならべとか、万年筆の安売りなどで、まきあげられたもんだ。

▼ 鳩ヶ谷街道と書いてあるんですけど。

▼ いまは鳩ヶ谷街道とはいわないね。赤山街道という。

▼ 残念なのは、有瀧さんの脇の赤山街道ぞいに、きれいな水が流れていた。全部、暗渠にしてみました。

|| 新国道の着工は、昭和になつてからですか？

▼ 昭和になつてからです。戦前・戦中にかけて、あそこで

中止になつたんですね。

▼ 工事は人力だよりだった。トロッコなど人力だけだった。

▼ 新国道のために、おおくの家が土地を提供したもんだ。

むかしの生活

|| むかしは、越谷では燃料は薪だったんですか？

▼ 薪ですよ。

▼ 東北から貨物で来たもんですよ。東武の駅前に倉庫があつたんですよ。

▼ 子どものころの記憶では、薪がふつうでしたね。

燃えるものはなんでも。草から細い枝までもやしたからね。

▼ 薪炭商というのは、もうかつたんだよね。

▼ 川原のまこもでも、燃料にしていた人もいましたね。

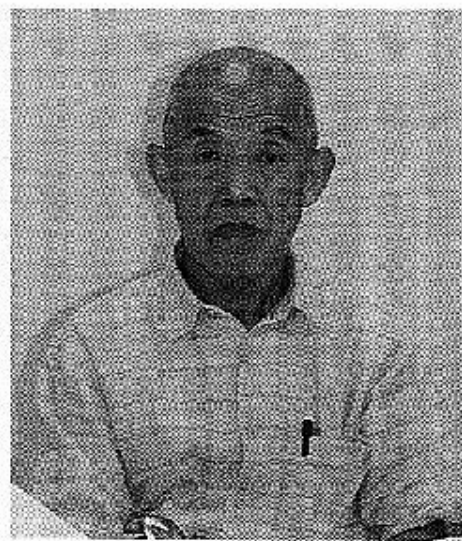
▼ 私たちは藁も燃やしたんですよ。

▼ 桜土手の木も、全部伐つて燃やしちやつたですよ。

▼ 今の北越谷の桜並木、あれどころじやないね。



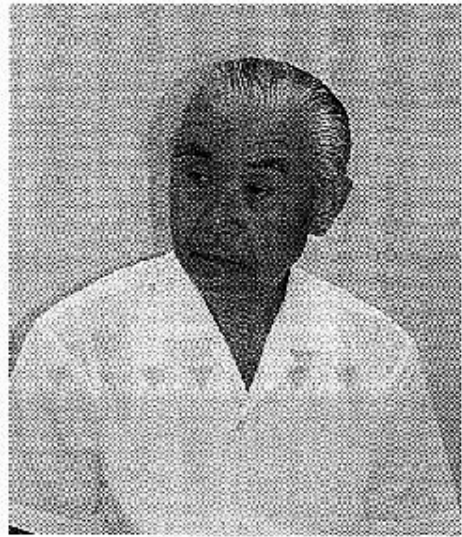
内藤 録次氏



岡野 俊夫氏



石塚 陳正氏



箕輪桑三郎氏



名倉 幸氏

生活のスタイルは着物ですか、洋服ですか？

▼ 小学校へ入るときは、1/3は着物でした。

▼ 私は洋服屋だから、洋服を着ましたけどね。

▼ 増林小学校では、洋服は私一人でした。

あとは着物でした。むかしは、川を一つ越えると、一〇年は違々と聞いていましたけどね。

▼ むかしでいうと、小学校は村に一つだったからね。

いまは二十四か二十五あるでしょう。

▼ この辺では、大沢小学校と越ヶ谷小学校と増林小学校だけだったからね。

▼ 東小林・東越谷四・五丁目は、全部、増林小学校へ行ってたんですから、大変だったんですよ。

久伊豆神社のまわりはべつなんですけど。

▼ ほんとに田園の中ですよ。むかしは越谷西口から大門まで、全て田園ですから。

寺社とまつり

▼ 新町は東武線の駅ができて、二分されて、最近ふるわないんですが、むかしは大相模の不動尊への参拝客が通るんで、賑やかだった。

▼ あの道は横丁から不動様へのお客が多かったんでしょう。

▼ お薬師様のお祭りは？

▼ いまは、おばあさんたちの念仏講をやっているようです。

▼ 新町の八幡さまはきれいになりましたね。

▼ お世話持講です。所有は久伊豆神社らしいですね。

▼ あの屋根に、お寺のまんじ(卍)がついていますね。

▼ 神仏混淆なんですか。

▼ 久伊豆神社の御神輿は、豊田さんの所へ入るのは、狭くて大変なんです。

▼ 少し休んでから行ったんだよね。

▼ 袋町は天神様をやりませよ。秋まつりはやらないんですか。

▼ 秋祭りは久伊豆神社のおまつりと思つて、できないんだ。

▼ 久伊豆神社の御祭神の御本体は、御神輿の扉をあけさせてもらつて中を見ました。

恵比寿さまと大黒さまだつたと思うんですけどね。

よく見なかつたけど。久伊豆神社の御神体とは違ふんですよ。

▼ 元荒川の西は久伊豆神社で、川の東側は香取神社だよ。

▼ むかし、国が違つていたんじゃない。元荒川が国境であつたという。

旧日光街道の公共施設

▼ 旧道は大きく変わっていますね。以前は警察署・裁判所・郵便局・個人病院や役場もありました。商工会議所もあつた。

▼ 警察署では、剣道・柔道をやっているから子どもたちによく教えてくれてね。私は毎日いったんですよ。

▼ あそこに官舎があつたんですよ。
私の同級生が住んでいてね、剣道の上手なのが。

▼ 明治三十五年ごろは警察はなかつたんだね。

▼ 警察分署が市神様のところにあつた。川つぶちですね。

▼ 本署は岩槻にあつて、越谷は分署だという。

▼ 南埼玉郡の郡役所も岩槻にあつたんですね。

将来の展望

|| 旧道のこれからの見通しはいかがでしようか？

▼ 平成十二年十一月には、旧道でフリーマーケットをする予定です。これが起爆剤になる様にと話がもちあがっています。

▼ 期待はなかなか難しいですよ。お客はどここの店も選べますからね。むかしは、農村部の人たちは、代々、うちはあそこで買う、帰りはこの店で買うと決つていました。

今はそういうことはないんで、広告をみて、気に入ればそこで買う。そういう意味で我々の選択肢はすくなくなっているんじゃないですか。

▼ クルマ社会なんで、旧道を歩いて、おちおち買物もできないしね。

▼ 客と店との交流ができる、親しみやすい店がほしいというのが、商店への要求ですね。

商店街が寂しくなつては、つまらない町になりますね。
たんに安いから、便利だからだけではないんじゃないか。

生活を楽しむとか、店で自由に話ができる、あの店へ行くとおもしろいものがあるなど、話題ができるような店を求めているんじゃないでしょうか。

▼ フリーマーケットは時期が遅かつたと思いますよ。
五・六年前にやっていたればなんとか間に合つたんですね。

私はあそこに住んでいて、不便な所だと思えますよ。おかずを買うにしても不便ですしね、スーパーまでいかなくちやいけない。

|| 後継者はどうでしようか？

▼ 今まで、商売は自分のやりかたですと、跡継ぎは難しいでしようね。親から継いでいる職業ですから。

できるだけ子供にうけついでももらいたい希望はあるんですけど、ちよつと無理かなあ。

私の代で、今の商売はおわるかなあと思つています。

▼ 後継者に魅力のない町なんかなあ。

▼ 困つちゃうんだよね。みんな後継者には。

▼ うちの店にいらつしやるお客様に、お茶をお出しするんですよ。お茶をこちそうになれるんですかとおどろかれますよ。スーパーでは何年たつても、お茶一杯こちそうになれるわけはないでしよう。

こういう商店街があつたんですかというお客さんもいらつしやるしね。だいいち、ここに商店街があることも知らない。

|| 今日はお忙しいところを、丁度じかんとになりました。
充実した中身の濃いお話を聞かせていただきまして、有り難うございました、これをもちまして終了させていただきます。

越ヶ谷の天下サマ「しほや」

吉兵衛について

高橋正輝

一 まえがき

過日、古文書クラブで、「内藤家記録」の講義を受けた。

この古文書は、越ヶ谷本町の三鷹や嘉兵衛こと内藤勘兵衛、七代・八代父子が、文政九年（一八二六）より明治初年（一八六八）までの家事記録である。

とくに三番記録は安政三年（一八五六）から十二年間の激動する社会情勢を、庶民の眼でとらえて書かれている唯一の貴重な古文書である。

この時代は、東北をはじめ全国的に凶作が続き、さらに関東の大地震、コレラの大流行、黒船や尊皇攘夷への幕政の失敗によつて社会不安がおこった。

物価高となった一般庶民の生活苦の怒りは、幸手領・羽生領のうちこわし騒動となり、全国にひろまった。

幸い、越ヶ谷宿では、いち早く、名主・問屋の有力者による困窮者救済活動が再三にわたつて施行されたため、宿内は安定が保たれていた。この救済施行のたびに、「しほや」吉兵衛が人一倍に多額の拠出をしていることが記されている。

吉兵衛なる人はどんな人物・家であろうか。

二 越谷市史（一）

第五章 町と村のくらし

宿場の生活として、「遊曆雜記」という紀行文を引用し、越ヶ谷宿の繁栄ぶりを紹介している。

文化十四年（一八一七）、釈大浄という人が、越谷の桃の花を見物にきた。

池田吉兵衛家に宿泊し、あまりにも豪勢なもてなしぶりに驚いて、「越ヶ谷の駅、塩屋吉兵衛の供応」と題した長文の一節である。

それによると、池田家は油と諸国の塩を引き受け、貯え持つ大問屋で「しほや吉兵衛」と称せられた。

居宅は二、三千石級の邸構えで、屋敷の広さは往還道に沿つて間口五十余間（約百m）、奥行き三町余（約三百二十m）、屋敷の両側には、油・塩を貯えた土蔵が各十八棟も建ち並んでいる。五十数人もの使用人が忙しく働いている。

客用の縮緬夜着、布団、緞子夜着、夜具が百人分備えられている。本陣が支障あるときは、大名の宿泊所となるほどで、往還道でも名の知られた分限者である。

道中で働く馬士・駕籠かきたちは、「越ヶ谷の天下サマ」と称している、とその豪商ぶりを記している。

三 「越ヶ谷の瓜の蔓」 市史（四）

越ヶ谷瓜の蔓は、越ヶ谷地誌として唯一の文書で、本陣主・福井猷貞（一七六九〜一八二二）の著したものである。

猷貞は本陣大松屋主人として、十七歳で家業を継ぎ、五十二歳で亡くなるまで本陣名主として数多くの記録・古文書を遺した。

文中「五郎兵衛屋敷、吉兵衛屋敷、〇〇屋敷、藤蔵屋敷、四ヶ所共、塩屋吉兵衛、中古より追々所持致、塩屋吉兵衛儀八本家池田と申、塩屋治右衛門、弟治左衛門、享保中分地今大家二相成申候」とわずかに三行のみ記されている。

これによると中古より云々とある。

中古とは近世史では「元禄期前後」と解されている。

吉兵衛家の先祖は、このころに越谷に移り開業したものと思われる(塩が家業なので、西国系の人か?)。

弟に分地した享保は八代吉宗の時代である。

五代綱吉(一六八〇)以降の社会は、自給自足の農本経済から、商業流通へ移行した時代である。

越谷でも開拓地主の大半は、変革の流れにのれず没落し、他地区に退転した。

かわりに新産業を目指して、各地からおおぜいが移り住み、宿場間屋町が形成されたのではないか(因みに内藤勘兵衛家も、元禄期に水戸から移ってきたと家伝にある)。

残念なことに、わずかな行間で当時の状況をうかがい知ることが難しい。

しかし、幸いなことに、本書編纂のとき、文化九年(一八一二)の越ヶ谷町割図を加えてくれたことで、当時のようすを思い浮かべることができる。

地図によると、越ヶ谷宿は元荒川に架けられた境板橋を境界に、大沢町と越ヶ谷町に二分される。

越ヶ谷町は、本町(二町四六間、約三百m)、中町(一町)、新町(五町三四間)の三地区で形成されていた。

吉兵衛家は本町北側、市神社(旧社殿)から、御殿表門見通しまで所持していたことがわかる。

間数五十余間とすると、北側沿い三分の一を占める。

奥行きは御殿跡地の大半を屋敷地・耕地として所有する大地主である。

当時、宿場区割りは往還道に沿って、間口六間単位に区分され、六間以上の所有者は伝馬役として町政に参加できる身分であった。

六間以下は歩行役、往還道に面していない人々は、広い土地を所有していても、地借・店借・裏百姓として町政に参加できず、一段と低い身分とされていた。

本町の本百姓(伝馬役)は五五軒と定められていた。

十数軒分の権利を持つ吉兵衛家は宿場行政を左右することができる立場にあった。

「越ヶ谷の天下サマ」と称せられていたことも納得できる。

四 「遊曆雜記」(埼玉県史 十)

「遊曆雜記」の著者は、津田大浄。名は大浄、字は敬順または宗知。先祖は織田信長の兄の子、津田隼人正。

江戸小日向(現文京区)廓然寺(一向宗)の住職である。

遊歴雜記
卷之十四

遊兵 大△	同 田中
遊兵 大△	同 田中
遊兵 大△	同 田中
遊兵 大△	同 田中
遊兵 大△	同 田中
遊兵 大△	同 田中
遊兵 大△	同 田中
遊兵 大△	同 田中
遊兵 大△	同 田中
遊兵 大△	同 田中
遊兵 大△	同 田中
遊兵 大△	同 田中

市神社除地

土手式之内	伊右衛門持
十四間式尺五寸	金子
ウ七間卷尺	伊右衛門
三十四間	○ 伊右衛門
中古	シホ吉兵衛
九郎兵衛屋敷	シホ吉兵衛
田中	富田屋
弥次右衛門	九兵衛
往還悪水落	シホ吉兵衛
	同 吉兵衛
	池田中本家
	同 吉兵衛
	同 吉兵衛
御殿下道	同 吉兵衛
御殿番相勤申候	同
浜野殿屋敷	吉兵衛
御殿地表通り御門見通し	吉兵衛
理右衛門屋敷	吉兵衛



遊歴雜記 表紙 目次 (廓然寺蔵印)

文化八年（一八一二）、五十一歳で隠居後、十八年間、江戸近郊の名所、旧跡、風俗、伝説、風景などを、五編十五冊、一千篇に及ぶ文を執筆した。

現在、自筆本は内閣文庫に所蔵されている。

文化十四年（一八一七）三月、桃の花と野島地蔵尊のご開帳に越谷へ来ている。二度目は文政八年（一八二五）六月、螢見物に訪れている。ともに吉兵衛家に宿泊している。もてなしがよほど気に入ったらしい。

「越ヶ谷の駅、塩屋吉兵衛の供応」（二篇下五五）

「武州埼玉郡越ヶ谷の駅、池田吉兵衛八本町北側に家居して通名は「しほや吉兵衛」と呼り、当駅に名だたる豪家にして、田畑五百余石、灯しあぶらを又はよろずの塩の間屋たり。

居やしき尤、広く間口五拾余間、奥行三町余、裏の中路に至りて一円を見渡す耕地、悉くみな吉兵衛が田畑とかや、土蔵、両側に建ならびし事三拾余庫、みなおのおの幅三間奥行五間より小さきはなし。

なお又文庫ぐらと覚しき八住居につづきて四ツ五ツ見ゆ、家居元より広く見およぶ座敷、凡拾二、三、家内のくらし五拾余人、豪家の一人といふ由、（略）されば千住より越ヶ谷まで行程四里半、その路すがら桜梅、桃李の花をなぐさみ又は菜園の真盛に目覚る心地し、是より竹輿にゆられながら塩吉が軒場に乗りつけたり。

是より清談に時を移す間に黄昏におよべば、間毎毎に燈を照し、やや折曲りて幾間や越ヶ谷離ざしきへ案内し、酒宴におよびける。

しかるに調味数を尽し、道具組の器物、おのおの善を尽し、美尽し、殊には海江の鮮魚、山陸の珍物残る方なく、八百善、きんは楼も、ものかへ、包丁の切目正しく、引替取替種の好味の品を双べしほどに、さしもの広き席上も食物ならずといふ事なし。

跡にて聞かば両度まで早馬を仕立、日本橋小舟町まで六里の路を往返とも走らせて、もろもろの鮮魚を買上しとなん。

その外利子川の鯉を始め、鮎、鰻の類までも切形を異にし、煮様を巧にせしまま風味等閑の事にあらず（略）。

斯くして明れば三月二十一日野島の御開帳へ参詣して金剛院へも立寄らばやと一決。

朝飯の振舞、膳碗みな根来塗にして二汁七菜の品一つ一つ塩梅賞するに堪えたり（略）。

舟ととのひ乗り給へと案内につれて中庭より北へさして居屋敷の中をゆく事三町にして耕地の中路にいたる。

是より西の方の敷拾に堤あり堤の下に江河あり水清く川幅三拾余間、兩岸の川添の風景、天然にして眺望又いふべからず。

ここに舟三艘繋り一艘に天幕を張り毛氈を敷詰たるハわれ等が馳走の舟也以下舟中の酒宴の様子が延々と続く。

最後の条で、感想として「惜しい哉。吉兵衛豪家の老人なれど風流を好まず、剣術を好み、弓を能して雅ならざるハ玉に瑕といふべし」と結んでいる。

五 おわりに

「越谷の天下サマ」塩屋吉兵衛の一生は判然としない。

万延二年（一八六一）の施行米抛出を最後に文書記録から名前が消えている。

文化十四年から四四年間、同一人物なのかは判らない。

文化十四年に文より武を好んだとすると二六く七歳として、七

〇歳余まで生きていたのかも知れない。

広大な吉兵衛屋敷は、明治三十五年の商工地図では、現在のよう

に數十戸に細分化され、池田家の名前は見あたらぬ。

本間先生のお話では、ご子孫の方は、富山県の方にお住まい

が判った。

市史編纂の際、古文書の有無を問い合わせたところ、現在では

一切が散逸して何も残っていない、とのご返事で残念であったとの

こと。

年月も移り、宿場の守り神、市神社も移転し、天下サマも遠

い夢の中になった。

わ

が家の家例は、とうもろこしを作つてはならない」となつていた。その理由は判らない。この家例を敢えて破つたのは祖母である。

戦争も末期の昭和二十年の春、祖母は、私ともに食入させたい一心で、とうもろこし作りを決定したのである。

そして、この年、叔父戦死の報が届いた。

その時、家例のことが、私の脳裏をかすめたが、このことについて、口外する者は、いなかった。（高橋正澄記）

越

谷に引越して十三年になります。川と田園の多い所と思ひました。川の多い所で、米と野菜、花などがさかんに栽培され、多くみられます。

道路の幅がせまく、車や自転車などで走る場合、苦勞します。

交通などで都心に出るには便利のため人口ははなへて都市化が進みました。

私たちがいる所は、地元の人が多く、考え方は古く、私たちが中に入れないのが悩みの一つです。すこしずつ変わりつつあるのが現在です。良い方向に向いていくと確信しています。

夏祭り、地区のスポーツなどで「ミニニヶー」がとれています。

若い世代に変わり、少しずつ変わつているので良くなると思ひます。

（森田氏記）

我が人生の輝ける日

推薦文

高山はつ

最近、五十年以前のむかしを振りかえることが多くなりました。忘れかけている悲惨な過去を無念に思い、苛立たしくなっています。平和な日々の上に、胡座を組んで生活している自分が情けなく感じることが常でした。

そこへ、平野さんの「わが人生の輝ける日」を読む機会を得ました。越谷市に二十余年間住んで、戦後処理の美談があったことを、初めて知り涙しました。

十年以前に発表されたようですが、私のように未知の方々も、ぜひ、知っていただきたいと、本書を借りて推薦する次第です。平野さんは、現在もボランティア活動をなさって、お元気に活躍していらっしゃいます。

我が人生の輝ける日

平野きよ

私の今までの人生の中で、深く心にやきつき、今なお脳裏を離れない仕事の一端を綴り、昭和四十六年十二月十日から昭和四十七年三月十九日までの日々を我が人生の輝ける日と題した。

輝ける日にご協力くださった方々に紙面をお借りし、厚く御礼申し上げます。

一通の書面

昭和四十六年十一月中旬のことであった。越谷市長宛に一通

の書面が届いた。書面は福井市長発信で、大吉に埋没している飛行兵の発掘請願書である。福祉事務所長が呼ばれた。所長は手紙を私に示し、「たのむよ」と言われた。

「わかりました」と私は簡単な気持ちで引き受けた。十二月初旬、高橋清氏、少飛会の代表の方が見え、発掘請願書が提出された。その日から私の輝ける日が始まった。

飛行兵のお母様からの嘆願書（巻紙に毛筆で認められたもの）を手にした私は、すぐに返事を書いた。私も戦災者の一人としてなにが何でもこの仕事はやりとげたいと心に誓った。

「お母様。息子様を必ずお返し致しますよ」。当時、社会係のスタッフはみんな喜んで（いや私が無理に動か

嘆願書

北陸軍曹長平尾康雄(昭和三十七年四月七日薨)と、谷上空にて
と交戦中戦死)は火の十三年
一月六日四時四十分有する我が家
の長男として福井市羽町に生ま
れ、小なり。

戦死後、系原百三三教隊と
合同葬、いよいよ見守り遺族の
上司川村春雄機隊隊長殿
から越谷の田に墜落戦死致し
ましたと聞かされた。

(中略)

それ、天を組織と念じた小松全
九期会、越谷市在住の高橋
清輝、突然お便りいただき
ました。その高橋様始め
崎玉県小松会、九期会の方々の
親身及びお慰めにより息子
は越谷市大木地元の田に墜落
突として事、判明致しました。

(中略)

発掘も、たまたま、お便り申し
あげ、次第で、いよいよ、
一日も早く、遺骨と幼い日本書生
木の奥より、運来し、送るに故郷の
山に、ついに戻り、葬とせよ、存
の、

弟を、母親、誠、身勝ると
お慰め、いよいよ、(国保地域の
後、お協力、お援助、お慰め、お
の、実現、お慰め、お慰め、お慰め、

昭和四十七年

福井市羽町

母 平尾すず子

越谷市長殿

したかな)協力してくれました。
だからあの大きな仕事が無事に
やりとげられたのだと、心から
感謝をしている。

戦没者の遺体収容と、飛行機
に残っている銃弾の発掘の二本
立の書類作成からはじまった。
師団長宛、県宛というように、
私の机の上は書類の山ができて
しまった。

あまりの膨大さに依頼したほう
もびっくりしていた。

昭和四十六年十二月下旬、す
べての書類を揃えて、県福祉課へ
提出する。いろいろ手直しをし
たり、尋ねられたりしたが、そ
れがいやだという気にならな
かったのが今でも不思議であ
る。

昭和四十七年一月六日、県に
て協議を重ねる。十八日午前、
自衛隊埼玉地方連絡部へいく。

発掘時の現地における宿舎、給
排水、日常生活必需品、不足機
器、排水ポンプなど、市で用意

する物のあまりの多さに、自分に「しっかりしろ、大和撫子の
はしくれなんだぞ」と強くいい聞かせた。

同日午後、第一師団長より発掘命令が下る。

「さあ本番だ」

幕はあがったのだ。

発掘の準備

昭和四十七年一月二十六日、越谷市会議室で埼玉県福祉課
長、越谷市長、自衛隊関係者、少飛会など、代表者会議を開
き、現地調査を行う。真冬の大吉の田んぼはカラカラに乾いて
いて、これは良好と思った。

「ついでにぞ」そんな気がした。

「落下地点」という田の隅に花と線香を供え、無事に終了する
ことを私は祈った。

見渡すかぎりの田んぼのところどころに電柱がある。

大型クレーン車の障害になるといふ連隊長の言葉。

片づけるのには費用がない。ひとまず東京電力に協力依頼書を
提出した。「何らかのお手伝いができれば幸いです」と無償で
撤去をいただいだいた。私は二度、東京電力に力を借りたこと

になる(前回は公害係長のととき、牛蛙捕獲の際、ボートを借
り、テレビで全国に放映され、越谷市が有名になった)。

二月十四日、発掘開始と決まる。二月六日、東越谷記念会館
で、越谷市と自衛隊との協定書を取りかわす。

二月八日、現地に器材の搬入を開始する。大型クレーン車の
重量をささえる大きな板が必要となる。

丁度、三ノ宮橋の橋桁があり、土木課、越谷市建設業協会の手添えにより試掘が始まる。機体の破片と風防ガラスが出土され、関係者一同をほっとさせる。

発掘の日までに私の担当する仕事は少しも進んでいない。宿舎や給水、隊員たちの入浴など。徳蔵寺（故伊東演恵住職）の厚意で、本堂や庫裡を提供していただいた。水道企業団も給水車の配置や、特別に配管してくれた。

連日の作業でどろまみれになる隊員たちのお風呂は、福祉会館の老人娯楽室用を、男女用とも開放することになった。その時の藤浪用務員の力づよい協力を何といっても忘れることにはできない。

自分の勤務時間はとうに終わってしまったのに、毎日、待っていてくれて、隊員たちにも感謝された。この藤浪さんを知っている人は「ええっ」と驚かれることと思う。宿舎、給水、器材など、準備が整ってきた。

そして今度は福井からおいでになる遺族の方々の宿舎である。それは小泉旅館さんが快よく引き受けてくれた。

次は費用のことである。自衛隊は別としても、いろいろな雑費がかかるであろうし、遺族の方々にも不自由はかけたくない。市役所の中を共同募金用の箱をかかえて、協力を求めて回ったり、民生委員さんの篤志もあつたりして、何とか間に合うことができた。

二月十三日、いよいよ明日発掘の日になる。現場に行き、同意をしてくださった地主さんの家を回る。

危険を伴うため、関係者以外の立入禁止の札やテープを張りしてあるうちに、雪が降ってきた。

一月二十六日の現場調査の時はからからに乾いており、これは神の助けと感謝したのにと、うらめしく空を見上げて帰宅した。夕方から空が大異変をおこした。雪どころではなかった。大きな雷と、車軸を流したような大雨、いったいどうなっているのだろう。神様お助けください。

晴天にしてくださいと願って床にいたが、もちろんねむれるものではない。まんじりともしないうちに朝を迎える。

昨夜の雨がうそのような青空、北風がびゅうびゅう、有難うと神に感謝したのはいうまでもない。

発掘がはじまる

防寒服にズボン・長靴に身を固め、職員とともに現場に向かう。

初めてお逢いする遺族の方々、福井少飛会会長、全国少飛会会長など、あいさつもそこそこに、地主加藤源蔵様夫妻のご厚意による祭壇に、花と線香の用具を供える。

故伊東住職のおごそかな読経のあと、越谷市助役の挨拶。全国少飛会会長の挨拶があり、自衛隊三十一連隊長の挨拶・訓示と、発掘開始の号令が下る。

大雪と大雨の現場は、足をとられないように歩くのさえやつのありさまである。作業を開始するにも、自衛隊員が動くのにも、水、水、水である。

隊長は市役所の排水ポンプを全部借りると私にいう。



大吉・徳蔵寺 伊東住職

者に頼んだ。私を女にしてほしいと。

一時間もたっただろうか。何台もの排水ポンプが次々に集まる。土木課も応援にくる。泥水なので思うように水をはくことはできない。じりじりと心ばかりがあせる。

若い隊員は、この北風の中で俺たちはいつまでこうしていきやならないのだとばかりに、私をにらむ。少し水が引く。

落下地点と思われるところの、クレーン車のバケットが土砂を掘り出している。何も出てこない。夕方になる。



発掘前の祈り

ところが昨夕の雨でそれは全部出払ってしまった。建設業協会に頼んでみた。みんな仕事に使っているという。それでは発掘ができない。涙声で業

今日は駄目かと思ひ、遺族を宿舎にかえす。

落胆のあまり、私はあぜ道にそのままへたり込んでしまった。疲労が激(ど)のようにたまっていた。

突然大声でどなる声があった。

「出たぞ。出たぞ」

「それ遺族を迎えにいけ」

遺骨もあった。座席、その他がぞくぞくと出る。

用意した白木の箱に菊の花を飾り、少飛会の方々が洗ってくれた遺骨をおさめ、自衛隊のテントの仮祭壇に安置する。

「お母さん、私、約束をはたしましたよ」と手をつなぎ泣く。

その日のできごとは夜になって、各テレビ局で放映された。

翌二日目、八時すぎに現場に着いたとたん「巴御前、何をたるんどる」と隊長の声。

三十一連隊の旗が空っ風に風林火山の旗のように見えた。

二十七年ぶりに開いた落下傘。

四角の隅だけが泥色になっていた。

真白の絹の肌ざわり、大空に開かず大吉の路上で開くことになったのであった。

大勢の市民も応援やほげましにきてくださり、テントの中の祭壇に「私の夫はシベリアで」、また「私の兄もスマトラで」と言いつつ手をあわせてくださった。

大きなテントではあったが、線香の煙で目が痛いのと、供物の贈り物にただ感無量であった。でも、私は不安だった。

平馬康雄との名前のものがまだ一個も発見されない。

三日目、機体の大部分と待ちに待った名入りのお母様の編ん

だ毛糸の腹巻、軍隊手帳、ペンシルなどが出土し、安心する。これ以上は危険と隊長の言葉。遺族に説明する。

古河大隊の吉岡三曹の決死的発掘（本人がバケットの中に入り、手さぐりで探す）の結果プロペラが出てきた。

丁度お昼だった。職員と涙で食べた昼飯のうまさは今も忘れない。

午後一時、鎮魂式。花東投下、ラッパ吹奏楽など、あの泥水はどこへいったかと思う程の現場で、おごそかに行われ、隊員へのねぎらいの隊長の言葉と、遺族のお礼の言葉で関係者一同頭を下げるのであった。

徳蔵寺で行われた通夜のとき、「係長さん、康雄の頭に逢いたいよ」とお母様に泣かれてしまった。

肩から下は足の爪まで出たのに、頭は出ないのかと、私も残念でならなかった。

翌十七日、火葬場に向う時、私は残る職員と隊長にお願いした。埋土する時、ショベルカーで押さないで遺骨の出たところは万能でもう一度探しながら埋土してほしいと。

谷塚火葬場の方々も、二十七年ぶりに発掘された兵士の遺骨と知って、本当に親切にしてくださいました。



発掘された飛行機部品

点火後、控室で待っている時、頭骨発見の電話が入った。すぐ抱いてきて頼む。火葬場の方のはからいで火をとめて待つ。この目で確かめるまではお母様には言えないと思い、私は外に出る。やっと届いた頭骨の半片。泣いてみな喜ぶ。

普通は途中で開閉しない扉が再び開かれ、茶毘に付す。壺に収めた遺骨を抱いて福祉会館会議室に安置する。

国に代って県福祉課長よりお母様の胸にと伝達された。誰も声なくただ涙、涙、涙の何分間であった。遺族の方々や少飛会代表、県の職員にお礼の言葉を申し上げようと私は口を開いたが何故か声にならず、その場で号泣してしまった。

夜、テレビのニュースで放映された時、私はあれでよかったのだ。あれこれ説明をくり返すより、あの涙で仕事の終了したことのお礼になったと思っている。

二月十九日、あの大きな穴も埋まり自衛隊は帰隊する。

風林火山の旗の下でもう二度とはないであろう。またあってたまるかと心にきざみ、花を供える。

二月二十七日、埼玉少飛会、九期会の方々の主催による慰霊祭が開催される。また雨降りの肌寒い日、火の気のない体育館で早朝より準備にかかる。越谷市での最後の行事と思い、私たち職員もお手伝いをさせていたたく。

遺族の方とは十日ぶりの対面だったが、まるで姉弟のような気持ちで再会を喜びあった。

読経、焼香、弔辞と式は進み、発掘に協力した関係者一同に感謝状の贈呈があった。

閉式の挨拶が終り、全員起立した時、全国少飛会会長が私を中

央にまねいた。

いかぶる私を前に押しやり、「皆様ここにもう一人感謝状をあげたい人がいるんだ。だけど仕事だから止めたんだ。みんな心で感謝してくれよ」と涙声でいう。しーんと静まった会場から拍手と「有難う」の声があがった。

この時、私はただ下を向いていた。協力してくれた方々へのお礼も終り、百日間にわたった私の発掘の仕事はひとまず終了した。

福井市の慰霊祭

三月初旬、「十九日に当地にて慰霊祭を行うので出席願いたい」と福井市より連絡がある。市長代理で出席させていただく。

十八日朝、新幹線で初めて北陸の地を訪ねた。北陸線の車中、自由席特急券なので隅に立っていたところ、四人席に三人座っていた五十路の紳士が、「ここへ掛けなさい」という。どこへと尋ねる。

「一人旅なので興味があつたのかな？」かくかくしかじかと今日までのことを話す。

俺も生き残りなんだと周りの人は口々にいう。

「ご苦労様だったね」。一行は芦原温泉での戦友たちとの集まりにいく途中とのこと。福井駅で別れるとき、おたがいにがんばろうと誓う。

福井駅に出迎えの人々。まさか私のためにとは夢にも思わす、ただ感激のみ。

県庁、市役所と挨拶をし、平馬家へと伺う。親戚の方々と供養の宴。

少飛会代表ともども思い出話や、苦労話に夜の更けるのも知らず、全員、平馬家の御厄介になってしまった。

翌十九日、春まだ浅い北陸。快晴。小春日和。

会場の農協会館へ到着する。自衛隊音楽隊の式前吹奏の中、県知事、市長、議員などが所定の席に着く。

私はどこかなと席を探している、「こちらです」と案内された席は何と県知事の隣の一番上席ではないか。辞退する間もなく、司会者の開会の辞、ついで黙祷を捧げる。

「平野きよ様」着席したとたん、呼ばれ、急いで起立する。ついで埼玉少飛会高橋清氏、土屋昭二氏、落下地点地主加藤源蔵様と声があり起立（みな心の中では不安な思いの何分間かだった）。

遺族や親戚、福井少飛会、全国少飛会代表、地元の方々など三百余人の前で今日に到るまでの労を発表され、厚い感謝とあたたかい拍手でねぎらわれた。



慰霊祭（福井市）

福井での盛大な式典の前に、私たちの今までの仕事が披露されるとは夢にも思わなかった（苦勞なんか飛んでいってしまった）。

各関係者諸先輩の心のこもる弔辞のあと、私は「平馬曹長に捧げることば」を読ませていただいた。

水を打ったように静まりかえった会場の中のおちこちですすり泣きの声。

私は唯々感謝の気持で胸がいっぱいだった。

翌日、墓参りをすませ帰郷した。

弔 辞

故平馬康雄曹長のみたまにささぐることは

越谷市役所 平野 ぎよ

日本の国の太平洋岸埼玉県越谷市、大東京都のベッドタウン市、日本海沿岸北陸の景勝地福井県福井市、私とあなたとは昭和四十六年十一月十日まで全然知らない同胞でした。

でも今日現在私はあなたのみたまの前で百日間の想い出をお話し、あすから自分の生きるかてといたします。

あなたは昭和十四年十月、その当時のあこがれの陸軍航空学校へと進まれ昭和二十年四月（この月は私にとっても忘れることのできない月でございます。四月十三日の夜、あなたが敵機と戦って尊いおくにの柱となって初七日の夜私の家も親族も空襲で灰となってしまった月だからです）当越谷の大吉の水田深く、たった二十二歳の若い命を散らしてしまわれました。その折りはいろいろな国の事情もありそのままの状態で今日を

迎えました。

しかしあなたの戦友はみすごしてはおきませんでした。

いろいろなご苦心をされて、私の勤務いたします越谷市長に十二月十日発掘の請願書が提出されました。

私も昔の教育をうけた大和なでしこならぬ大和はぎぐらいの女性として、息子であるあなたを一日も早く、年老いたお母様の胸にだかせてあげる、あなたが幼い時木登りしたふるさとの山々、魚とりした小川のまつ福井市へとお返ししたい。

それを願って国・県・自衛隊といろいろお願いいたしました。

そのかいあって皆様の深いご協力、そして力づよいご援助のあげく、昭和四十七年二月十七日午後四時、あなたのお母様の胸に二十七年ぶりで、何も語らないつめたい息子でしたが、だかせることができました。

その間つめたい雪の日もありました。関東特有のカラッ風の強く吹く日もありました。そして春雷もありました。でもみんなよくがんばりました。

自衛隊の方々も少飛会の方々もそして私達市や県の職員も、あなたのお母様やご遺族にお礼のことばと仕事のすんだことを申し上げました。

そして私は泣きました。私も息子が二人あります。

私がおあなたのお母様だったらこういうだろうと。「康雄よ、もう一度お母さんと呼んでほしい」今日この福井市の農協ホールで、福井少飛会の皆様の温かいご努力により、盛大な慰霊祭がとり行われ、私までもおまねきいただき、皆様と共にあなたのみたまの前でこのお言葉を申し上げることのできますことは

身にあまる光栄と存じます。

どうぞ康雄さん、福井の空でお母さんが健康であなたの分まで長生きされるようみまもって下さい。

私も遠くはなれた越谷の空よりあなたのご家族のご多幸を祈ります。

終りに、今日までお力をおかし下された埼玉少飛会の方々、そして地主の加藤さん、また福井少飛会、そして福井県福井市のみなさんに厚くお礼をのべ私のことばといたします。

昭和四十七年三月十九日



越谷の桜堤通りについて

大

沢橋近くの東武鉄道と元荒川との交差点から上流の文教大学前方までのC字形に大きくカーブする堤防上の遊歩道(こ)を桜堤通りというのを散策した方は大勢いらっしゃるでしょう。

元荒川の越谷市中央市民会館からの景色と共に、この桜堤通りは、年間を通して市内でも最高の自然景観として賞賛に値する地域と
思います。

この遊歩道は昭和三一年(一九五六年当時、北越谷と近隣地区の有志により二二〇〇本植樹したのが始まりだそうです。

現在も「桜保存会」の尽力が、景観の維持増進に大きく貢献しております。「苦労」感謝申し上げます。
(堤竹記)

現

在、当地(神明町三丁目)に古く一本の松の老木があります。

平地としては幹の大きさは、他に見られない大木です。

この老木は樹齢何百年も経っており、その昔、弓矢の的場に使われていた調れがあります。

地名は「松葉」といわれています。この由来を知っている人はいなくなりました。

ただ、大木の松が老木として物語っています。
何とか手がかりを探して、昔の由来をたどりたいと思います。

(宇田川記)

越谷のお正月と

「とうかんやのわらでっぼう」

金岡由紀子

はじめに

全国津々浦々テレビが普及し、北海道から沖縄までコンピニのSEVE……やハンバーガーのMA……の電飾が見られる現代は、地方色・地域色・方言が消えつつあるといっても過言ではないだろう。

その中で先祖以来の形がかるうじて残るものは冠婚葬祭、中でも葬・祭の二つと、お正月の雑煮くらいか、と思っている。

私は四国・香川の生まれで、丸もち・白みそ仕立ての雑煮だった。

「越谷本来の雑煮はいかなるものかしら？」と思っていた。平成十二年十一月の文化祭発表会で、ある女性にお会いし、語る話の面白さに惹かれたものの、その場はお別れした。後日、「今この時に聞いておかなければいけない話もあるなア」と思い、改めて聞き書きを申し込んだ。

語り手は、昭和十一年（一九三六）生まれの越谷在住の女

性である。話の舞台になるご実家は越谷・平方（ひらかた）で、女性が六・七歳くらいの頃の話である。

戦前の豪農のお正月風景と「とうかんやのわらでっぼう」を聞き書きした。

「とうかんや」を関東の行事ととらえ、四国愛媛県出身の昭和三四年（一九五九）生まれで、越谷在住の女性からの聞き書きによる「お亥の子」行事をあわせて紹介する。

一 正月

① 曆はいまと同じものだが、行事に関しては、「ひと月遅れ」で行われていた（正月は二月一日になる）。

② 屋敷内には、語り手の祖父母、父母などの家族のほか、数人の住み込みの男女がいる。

（一）正月を迎えるまでの行事

【大そうじ】

住み込み男性は、切った竹ですす払い。住み込み女性は、ぞうきがけ、正月の食器洗いなど。

【柳の箸】

柳の枝を箸の長さに切り、皮をむき、屋敷内の人數分の箸をつくる。家族の男性（特に年男・としおとこ。あとで別記）の箸は「これで食べられるのかしら」というくらい太いものをつくる。

【しめ飾り】

『一夜飾り』はいけない。なわをなうのは通常と違い、左なわに仕上げる。

しめ飾りの場所

・大神宮様（伊勢神宮か？筆者注）

・こうじん様「かまどの神」（荒神か？）

・恵比須その他の神様

・米蔵、麦蔵、その他の蔵

蔵の前などは植物のヨシで作った膳を置き、その上に四角の切り餅、上に丸餅を重ねる。しめ飾りは蔵に掛けた錠に巻く。

【みそかのおおばん】（ふるまいか？）

夕方、小作の人たちが来る。酒・ご飯・けんちん汁を用意。

（のちにはあじの塩焼きなどを加える）

けんちん汁の具

八つ頭・大根・人参・ごぼう・こんにやく・九時ごろ帰る。

（2）正月

① 正月の行事で中心となるのは年男（としおとこ）である。

語り手の父が『若だんな』として、語り手が知る限り年男をつとめたという。

② 【若水を汲む】

年男は朝、いちばん初めに井戸から水を汲み上げる。

雑煮や料理をつくるのに使う。

【料理】

◎ 雑煮

・餅は四角の切り餅

・餅はほうろくで焼いて、湯で表面についた米の粉をとる。

・かつおぶしとごぶでだしをとる。

・醤油あじ

具は八つ頭（ふかして一口大に切る）

大根（いちよう切り）

小松菜

◎ 他の料理

・八つ頭の甘い煮

・ふなの甘露煮（ふなは川魚屋から配達される。焼いた

のち煮る）

・にしんのこぶ巻

・くわい（くちなしで黄色に染める）

・よで豆（大豆の類。大豆より大きい。甘く煮て醤油で

かくし味）

・大根なます（三杯酢。人参なしで白いできあがり）

・きんぴら（ごぼうと人参を細くせん切り）

・のちには、数の子、まぐろの刺身なども加える）

① 正月当日の料理（おもに雑煮）は年男が中心になつて行ない、女性は手を出さない。

② 里芋より八つ頭を重んじている。

③ 農作物はもとより、ヨシ、萱、竹などの地面から生

じるものはすべて自給、という点が興味深い。

二「とうかんやのわらでつぼう」と「お亥の子」

(一) 越谷

『こうじんさん』が出雲から帰る頃、『とうかんやのわらでつぼう』がある。『ぼたもち』をつくり庭の地面を打つ行事だと語り手が言った。

私は瀬戸内海に面した港町の生まれで、聞いたことのない行事だった。

『こうじんさん』が出雲から帰る、というのだから神無月十月すぎでの行事と思い、調べてみた。

とおかんや(十日夜)十月十日の夜。東日本でこの日、刈り入れが終わって田の神が山に帰るといって祭る。

西日本の亥子(いのこ)とともに重要な農村行事。

(岩波書店『広辞苑』昭和五一年版、一五八三頁)

越谷の『とうかんや』は漢字で『十日夜』であろうと判断して話を進める。

【わらでつぼう】(図1)

わらの芯を使い束ねる。

【ぼたもち】

茶碗にもち米を炊いたものを入れ、粒の残るあんこを上からかける。

①【わらでつぼう】で庭の地面をたたくのは、男の子、ときかれている。とくに厳しい制限は、語り手の家はなかつたようで、子供の楽しい行事と思いい出される様子だった。『とうかんや』が現在でも越谷で行なわれているのか、私は不明です。ご存知ならばお教えてください。

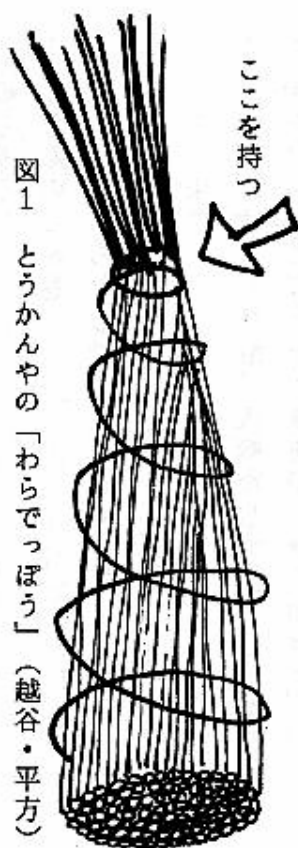


図1 とうかんやの「わらでつぼう」(越谷・平方)

(2) 愛媛県北宇和郡三間町(宇和島市北東)

東日本に『十日夜』があるなら、西日本の『亥の子』はどんなものかと思いい、香川県の農家出身の友人、姑などに尋ねてみた。「知らない」という返事ばかりであった。

運よく、越谷で友人になった女性(昭和三四年生)が経験しており、話を聞いた。

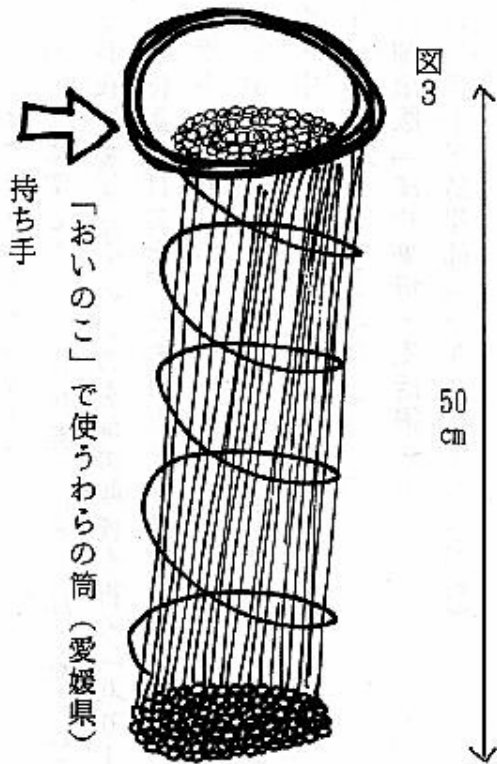
【おいのこ】

この行事は男の子の行事だが、弟が二人いるので『おいのこ』さんの宿(やど)となった記憶がある。

【宿】

【おいのこさん】は行事そのものと、神さまの石も意味する。中学二年生までの男子のいる家が、数年おきに神の石の宿と

図2 亥の子（十月）「絵本御伽品鏡」



1730年（享保15）刊 長谷川光信

なる。石は床の間に大切に置かれる。

この地域では、今でも『おいのこ』が行なわれている。

十一月の亥の日（平成十二年は十一月中に三回、亥の日があった）。

宿の床の間の石にわらを巻き、三、四本の持ち手をつける。地域の家々の庭へでかけ、地面を打ちつける。

訪問された家は、菓子・または金包み（千円くらい）を渡す。

① 語り手の神の石は図2より丸く、円盤のような形のとこ
とである。

② 近辺の村では石ではなく、わらを筒にしたものを使うという。五十㎝くらいのわらの筒に取っ手をつけるそうである（図3）。

【おいのこの教え唄】

おいのこのよには

一（いち）んたるふんまいて（俵を強く巻く？）

二（に）でこっこり笑て

三（さん）で酒つくつて

四（よつ）つ世の中よいように

五（いつ）ついつもぎようとく（行徳？）に

六（むつ）つむりよう（無病？）息災に

七（なな）つなにごともないように

八（やつ）つ屋敷を広めたて

九（ここの）つ子供が喜んで

十(とお)でとっておさめた

『亥の子』に関しては、「広辞苑」にも記述が見られる。

『十日夜』『亥の子』の両方を稲の収穫を祝う『刈り上げ』の行事と位置づけると、その日どりは次のようになる。

東北地方 九月の九のつく日か、十月一日。

関東・中部 十月十日。

近畿・中国 十月亥の日。

九州 十一月丑の日。

雄山閣出版「江戸事情・生活編」

NHKデータ情報部(一九九一年・八七頁)

おわりに

今回の二人の女性の協力を得て、『聞き書き』をすることができた。

お二人ともに共通していたことは、話が進むに従って、時間をもどっていかれるのか、表情が幼女のようになごんでいったことである。

幼い頃、父母ら家族に大切にいつくしみ育てられた様子が、私にも受けとれた。

幸せな記憶を書きとめるのも「いい仕事だなあ」と思った次第である。

浅学の上に、不勉強なので、本稿に関してご注意・ご指導いただければ幸いです。

市内石神井神社の珍品の奉納品

越 谷市の西に広がる田畑の中に、石神井神社がある。社殿の片隅にあつた砲弾の奉納品が眼にとまった。

砲弾の表に「奉納 当所三ツ木光(みつ)之助」裏に「大正十二年十一月除隊記念」と彫つてある。

薬きょうの抜いた本物の重砲の実弾である。

高さ三五cmですつしりと重い。どのような人が奉納されたのが、気になった。調査に約一年を要した。

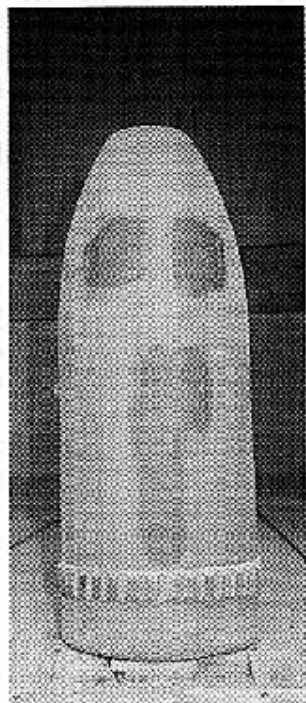
当の三ツ木光之助氏は、市内西新井二四八番地に在住の三ツ木忠司氏の血縁にあたる方で、昭和三三年一月に五八歳で亡くなられていた。墓は照蓮院にあつた。

長生きされておられれば、お会いできたの残念だ。野戦で自分が撃つた弾を奉納したとの言い伝えた。

どのような手段で、この砲弾を越谷まで持ち帰ったのか知るすべもない。三ツ木光之助氏は、除隊後、結婚された。

子孫の方が健在で、現在、瓦管根に住んでおられる。

靖国神社資料室では、彫りのある砲弾の奉納品は珍品です」といつている。(谷岡記)



増林地区の石仏

加藤 幸一

増林地区にある江戸時代の旧村、増林村・増森村・中島村・花田村・小林村の石仏について調査した。以下はその調査結果をまとめた概要である。

1. 旧増林村

(1) 増林前波の水神宮

図1の左側に刻まれた道標には、「東、子安観音堂」となっている。林泉寺には、現在でも観音堂（大慈殿）に子安観音を安置している。かつては「子安観音」の寺院として大変有名であったことがわかる。

(2) 定使野橋そばの水神宮

図5の百八十八箇所巡礼塔は、越後（現在の新潟県）の市川惣右衛門という人が秩父三十四箇所、坂東三十三箇所、西国三十三箇所、四国八十八箇所の巡礼地のすべてを徒歩で巡り終わった記念と天下泰平・国家安全を祈願して造立した石塔である。

(3) 定使野共同墓地

図7は、不動道（大相模の不動尊に参詣する道）、越ヶ谷道、猿島道、野田・宝珠花道を指し示す道しるべを兼ねた三界万霊塔である。

(4) 平野家（増林一二七〇一）そば十字路

図11・図12はともに庚申塔である。図11は文字で「庚申塔」と刻まれ、図12は腕が六本もある青面金剛を描いている。地元では現在も庚申講が続けられている。

(5) 清涼院陀草基地

図14は、上から、宝珠と剣を持っている虚空蔵菩薩、智拳印を結んでいる大日如来、阿閼如来、阿弥陀説法印を結ぶ阿弥陀如来、薬壺を持つ施無畏・与願印の薬師如来、蓮の花を持つ観音菩薩、合掌する勢至菩薩、両手の手のひらに宝塔を載せた弥勒菩薩、宝珠と錫杖を持つ地藏菩薩、蓮の花を持つ普賢菩薩、絹索と剣を持つ不動明王、施無畏・与願印の釈迦如来、経典を上に乗せた蓮の花を持つ文殊菩薩、以上の合計十三の仏の像容が見られる。

図15は、十九夜の月の出を待つ行事を行った記念の石塔である。十九夜月は月の出を寝て待つ頃の月なので、「寝待月」とも呼ばれる。この石塔の上部には、十九夜の主尊の如意輪観音菩薩が描かれている。

(6) 平野家（増林三五〇〇）邸内

図18の石塔は、もとは古利根堰公園そばの野田道（猿島道）の西側路傍にあった。

平野家がかつては代々「源左衛門」を名乗り、地元では「源左衛門様」がなまって「ゲンゼム様」と呼ばれ、寿橋の凡そ五十メートル下流の古利根川右岸にあった増林河岸（源左衛門河岸、ゲンゼム河岸）を差配していた。

(7) 平野家 (増林三五〇〇) 個人墓地

図19は、僧侶円心が法華經(大乘妙典)をわが国の六十
六か国すべてに納めようと徒歩で巡り終わった記念に造立
した六十六部回国塔である。

(8) 藤掛家 (増林三五五五) 路傍

図21から図23は、すべて庚申塔。地元笹原組住民によつ
て庚申講が今も行われている。

(9) 鈴鈴木家 (増林三七六三) 路傍

図24は庚申塔である。地元では庚申講が平成八年頃まで
行われていた。

(10) 古利根川八幡河岸跡地

図25は板碑の形をした初期の墓塔である。ここはかつて
は八幡河岸があった所である。

(11) △7井家 (増林三七一一) 路傍

図26は庚申塔で、今も地元では庚申講が行われている。

(12) 護郷神社 (旧「浅間神社」)

この神社はかつては浅間神社と呼ばれていた。ここには
板碑型をした初期の庚申塔(図28)がみられる。

(13) 福寿院跡墓地

図30は、俗に観音経と呼ばれる普門品を誦誦した記念に
造立された。上部の梵字「サ」は観音菩薩を意味する。

(14) 須賀家 (増林三七八一) 前

図34の中央に刻まれた梵字は「アーンク」「キャ・カ・
ラ・バ・ア」と読む。アーンクは大日如来を指す。その下

の五つの梵字は仏教で説く「五大」を表し、万物を作り出
す元素と考えらるる「空・風・火・水・地」を指す。

(15) 林泉寺

図35の名号塔の正面に刻まれた名号「南無阿弥陀仏」は、
文字の先端が剣のように尖っている「利剣名号」である。
この名号塔が造立された天明年間は、浅間山の噴火などの
天変地異があいついで起こった「天明の大飢饉」の頃であ
る。天変地異や疫病・災害によって道端に倒れて亡くなっ
た人々など、非業の死を遂げた多くの人々の供養も兼ねて、
このような天変地異や疫病・災害を利剣名号の威力で防ご
うとしたものである。

図41は、六阿弥陀参りのために寺院に建てた標識石塔。

図42の石塔の裏側には「御殿境内」の文字が刻まれてい
る。越谷市御殿町には、家康が鷹狩で休む御殿があったと
ころである。現在の御殿町に御殿ができる前は、この林泉
寺の地に家康の御殿があったのではないかと考えられてい
る。裏面の「御殿」の文字はそれに関連づけて刻まれたも
のであろう。

図43は、念仏僧の徳本行者の徳を慕って広範囲の地域の
人々によって造立された名号塔で、徳本行者本人の独特の
書体による名号「南無阿弥陀仏」と花押(サイン)が刻ま
れている。

図45は、増林の関根氏の始祖となった人の五輪塔である。
戒名が刻まれている。なおその向かって左隣には妻の五輪

塔もある。関根氏の始祖について記載された古文書「分記
関根氏一族過去譜序」が林泉寺に保管されている。

(16) △7 井丹家 (増林三八九四) 改路傍

図47は増林村中妻組の住民が造立した庚申塔である。地
元の人たちによって庚申講(地元では「かのえ講」とも呼
ぶ)が行われていたが、平成十一年の初め頃に廃止された。

(17) 須賀賀家 (増林二四三一) 邸内

図49は増林村中組の住民によって造立されたものである。
三猿が正面と両側面に分かれて刻まれているのが珍しい。

(18) 須賀家 (増林三八六四) 管理の稲荷荷社

図51は須賀家管理の稲荷社の祠の近くにある石塔である。
成田山新勝寺(成田不動)や地元の真大山大聖寺(大相模
不動)への不動信仰が幕末に盛んであったことがわかる。

(19) 林泉寺裏の土手

図52の地藏石仏が建っているあたりは、かつては溺死者・
疫病死者の火葬場跡といわれている。台石には地元の女性
の念仏講と思われる「女講中」と刻まれている。

(20) 勝林寺の北西の「透関山」

図53の石塔のあたりには、かつて地元では「とうかん山」
と呼ばれた杉の木々が生えていた小山があり、その上にこ
の石塔が立っていた。勝林寺の檀家である青山祖養が造立
したものである。落ち武者がここで自害した墳墓との伝説
が残っている。

勝林寺の近くにある天神宮に、和歌と人物像が刻まれた

文久元年(一八六一)正月の記念碑がある。そこには、次
のように刻まれている。

舎楽翁

あかるミを

(短冊が置かれた机の前で

くらく過ぬる

くやしさを

袖に涙する舎楽翁の

雪にほたるの

学なくして

しゃがんだ姿)

(21) 勝林寺

図59は、勝林寺が、越谷市・松伏町・吉川市にまたがる
広範囲な地域からの信仰を受けていたことがわかる。この
石塔を造立した住職は第十九世の叡山で、今回の調査で彼
の直筆の古文書(正法眼蔵の写し)が当寺に保管されてい
ることがわかった。

図61は、勝林寺の第二十一世住職の太道寛山大和尚が、
幕末に造立した庚申塔である。表面の文字は、かつて勝林
寺の第十一世を勤め、後に永平寺第四十六世となり、朝廷
より高德の禅僧に与えられる「真空妙有」の禅師号を賜っ
た弥山良須大和尚によると伝えられてきた。しかしこの文
字は、今回の調査では、曹洞宗の開祖道元禅師の六百回忌
を執り行った臥雲童龍大和尚の書体とわかった。彼は永平
寺第六十世を継ぎ、朝廷より「大晃明覚」の禅師号を賜っ
た高僧である。

図62は、西国三十三箇所、秩父三十四箇所、坂東三十三

箇所の巡礼や富士山・湯殿山・立山の登山完了の記念に造立された石塔である。

図66は、渡し場道（古利根川の「ばば渡し場」に通じる道）と不動道の道しるべが刻まれた貴重な庚申塔である。

渡し場は林泉寺と勝林寺の中程の古利根川土手にあり、対岸の上赤岩に渡る大正年間の頃の往復の渡し賃は、大人が三銭、子供が一銭であったという。

(22) 岡安家（増林二七〇七）路傍
図71は岡安家の死馬を供養した石塔である。

(23) 岡安家（増林二一三六九）そば路傍
図72は、越ヶ谷道と不動道の道しるべを兼ねた馬頭観音の石塔である。

(24) 宮川家（増林三一七四）路傍
図73は、死馬を供養した石塔である。

(25) 増林下組地藏堂
図74は、73と同様の馬頭観音文字塔である。

(26) 増林下組香取神社
図76は、幕末に香取神社に敷石を奉納した時に造立された石塔である。

(27) 下組集会所
ここはかつては「宝蔵院」と呼ばれる寺院があったところである。ここには図77、78、79の三基の庚申塔がある。

(28) 夕倉倉家（増林三一二六九）邸内
図83は増林村下組の住民によって造立された石塔である。

(29) 千代田橋そば土手下

図85の石塔には、ばば渡し道、不動道、松伏道を示す道しるべが刻まれている。

(30) 城ノ上稲荷神社
図87の石塔には、越ヶ谷、不動道の道しるべが見られる。

(31) 百木家（増林五六四三）敷地内
図89は、吉川や、古利根川に架かる「ばば渡し」と野田へ行くための道しるべを兼ねた貴重な庚申塔である。

2. 旧増森村

(1) 観立百堂墓墓地

最近までこの地に観音堂が建っていたが、平成十年に宝正院に移転・新築され、墓地を残すのみとなった。この地にある図1の石塔には、和歌が刻まれている。

(2) 河原崎の内田稲荷
内田稲荷は、増森一四七五の須賀家西側にひっそりとある。そこに板碑型をした古い庚申塔が見られる（図2）。

庚申塔は庚申信仰の記念として建てられたものである。

(3) 宝正院

江戸時代は、東正寺と呼ばれていた寺院。明治四十四年に増林の宝蔵院（現、下組集会所）を合わせ、「宝」と「正」として現在名に改められたのである。

宝正院のかつての参道入口に今でも背が高い「高地蔵」（図3）が祭られ、安産の仏様として信仰されている。

(4) 中村家 (増森一六五四) 路傍

図6は「大日様」と呼ばれ、痰をきってくれる仏様として信仰された石仏である。

(5) 小島酒店 (増森一七二三) 路傍

店の前の路傍に、「猿田彦大神」と刻まれた神道系の小さな庚申塔がある (図7)。

(6) 葉師堂

ここは、かつてあった慈光庵の跡地で、現在ここに県の文化財の二十一仏板碑がある。その他、様々な石仏石塔がある。その一つ図9は、市内で二番目に古いと思われる初期の貴重な庚申塔である。図10は、西は越谷、北は増林、東は榎戸、南は吉川と道しるべが刻まれた庚申塔である。

図12は、正面の下部に、右は越谷道、左は野田の山崎道と道しるべが刻まれた庚申塔である。ここ増森と千葉県野田市山崎とは江戸時代の昔から交流がさかんであったことがわかる。図13も道しるべが刻まれた庚申塔で、「赤岩渡し」「榎戸渡し」の渡し場の名前が見られる。「赤岩渡し」は増森村と対岸の下赤岩村を結ぶ古利根川の渡しで、地元では「馬渡し」と呼ばれた。「榎戸渡し」は、増森村と川藤村榎戸を結ぶ古利根川の渡しで、地元では「さんこう渡し」と呼ばれた。図14の石塔も、越谷、大相模不動、赤岩渡し、野田と道しるべが刻まれている。

(7) 増森神社

もとは水神社と呼ばれた。図15は、増森村三丁野の須賀

家 (増森二一九〇〇) から昭和十三年頃にここに移された庚申塔である。この庚申塔を造立した三丁野の人々の名が正面及び側面に刻まれている。また、道しるべも刻まれている。

(8) 中村家 (増森二四七) 路傍

図16は、宝暦四年 (一七五四) の庚申塔である。ここも三丁野の地である。

(9) 増森新田の稲荷社

庚申塔が四基みられる (図18・19・20・21)。また図22の弁天文字塔の側面には、「真正寺」と刻まれた文字がみられる。すぐ近くの増森新田センターあたりは、かつては真正寺があったとの証拠となる石塔である。

図23は、増森三一九の松井家から移してきた石塔である。松井家は江戸時代は清学院と呼ばれた山伏の寺院であった。明治になると、越ヶ谷の久伊豆神社の初代神主を勤めた。

(10) 増森新田センター

ここは、かつては真正寺があった所である。センターそばの墓地の中に、秩父三十四箇所、坂東三十三箇所、西国三十三箇所、四国八十八箇所すべての百八十八箇所を巡礼した記念に建てた石塔がある (図24)。

(11) 土口田家 (増森二四八四) 路傍

ここに「奉納 両社遷宮記念 氏子中」と刻まれた高さ約百六十六センチの記念碑と二つの祠があるが、雷電社の祠のすぐそばに図25の雷神宮の石塔が建っている。

(12) 森西川集△云所

この集会所のそばに墓地がある。図30の庚申塔に刻まれた「新光寺」の文字によって、ここは真光寺の跡地であることがわかる。図28は、この石塔を奉納した人々の名前が、この石塔の全ての面にすきまなくびっしりと刻み込まれた名号塔である。図29は、「三猿」のみが刻まれた初期の庚申塔である。

旧中島村

(1) 林家 (中島一七九) 路傍

図1は庚申塔である。この庚申塔の下部は土に埋もれているが、鬼と三猿が刻まれていることが判明した。

(2) 中島神社

ここは、稻荷神社と諏訪神社の両神社とすぐそばに正福寺と呼ばれた寺院があった地である。ここに全ての霊を供養するために建てられた三界万霊塔がある(図2)。

(3) 正福寺管轄の共同墓地

図3は六十六部回国塔である。法華経(大乘妙典)をわが国の六十六箇国すべてに納めようと回った記念に建てたものである。

(4) 小川家 (中島二八九) 路傍

ここに三基の庚申塔がある。図6には、十一面観音をあらわす梵字が主尊として刻まれている。庚申様の主尊が青面金剛として定着する前の初期の庚申塔とわかる。

(5) 鈴木家 (中島三一六六一) 路傍

図8は、青面金剛像が刻まれたよく見られる庚申塔。

(6) 送水管近くの土手道路傍

永田家(中島三一〇一〇)前の土手道路傍には、庚申塔と水神塔(図9、10)がある。水神塔の方は破損が激しいのが残念である。

旧花田村

(1) 西円寺

図1は猿田彦を庚申様の主尊ととらえた神道系の庚申塔である。もとは西円寺前の路傍にあった。

図3は、四面に大随求陀羅尼の梵字がびっしりと刻まれた供養塔である。

(2) 山本家 (花田四二一一) 路傍

図15は、和歌山市にある淡島神社の祭神が下の病(婦人病)に効く神様としての淡島(粟島)信仰が全国的にさかんだった頃の石塔である。

(3) 佐藤家 (花田四二〇一三) 路傍

ここにスマツカラ地蔵(図17)がある。スマツカラとは地元の耕地名「砂河原」からきたと思われる。スマツカラ地蔵には次の言い伝えがある。

昔、元荒川が花田の方に花田を囲むように迂回して流れていたころの話である。ある日のこと、この曲流した花田の元荒川を石のお地蔵様を運んで上流へと上る舟があった。

花田のあたりにさしかかると、急に舟が動かなくなる。そこで人々は運ばれていたこの地蔵様がこの地に安住したいのだと思い、舟から降ろし、堤の上へ上げてお祀りしたという。あるいは、地蔵の首の骨が折れて舟が動かなくなつたとか、お地蔵様がここに流れ着いたという話も一部残っている。

旧小林村

(1) 東小林香取神社

図1は、吉川道、不動道(大相模の不動尊をさす)、越ヶ谷道、岩槻道と道しるべが刻まれた庚申塔である。

(2) 東福寺

東福寺は砂丘の上に位置している寺院で、かつては境内地やその周囲には松の大木が生い茂り、「東福寺の秋月」として越谷八景の一つに数えられていた名所地であった。

図2は巨大な三界万霊塔である。図3も巨大な石塔である。これ程の石塔を建てた当時の盛況が忍ばれる。

(3) △云田家(東越谷二一三) 路傍

会田家はこの周辺では昔から唯一の民家であった。そして会田家前の元荒川そば路傍には昔から道しるべを兼ねた石仏があった。しかし心ない人によって破壊され、その石仏の表面や両側面がかなりはがれた状態となつてしまつた。それが図13の石仏である。地元の人たちはこの石仏を「こうしん様」と呼んできた。多分、庚申塔のことであろう。

その庚申塔には、江戸何里、野田何里とかの道しるべが刻まれていたと言う。残念ながら今となつてはこれ以上のことはわからない。

(4) △云田家(東越谷三一七一二) 邸内

幕末の頃にできた庚申塔(図14)が邸内にある。

(5) 清水家(東越谷三一三三八) 邸内

邸内には馬頭観音文字塔(図15)がある。路傍には明治に造立した荒神塔があり、地元では毎年二月十一日に荒神講が平成九年頃まで行われていた。

(6) 鈴木家(東越谷二一四一四) 邸内

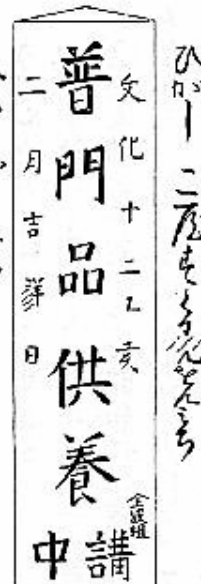
邸内にある馬頭観音文字塔の側面には、「四国八十八箇所」「東福寺」と刻まれて文字が見られる。新四国八十八箇所の一つ、武蔵国八十八箇所の札所巡りが行われた名残である。一番の西新井大師から始まり、南足立郡、北足立郡、南埼玉郡の三郡に及んだ。東福寺は二十七番にあたる。

(7) 浜野家(東越谷八一七) 路傍

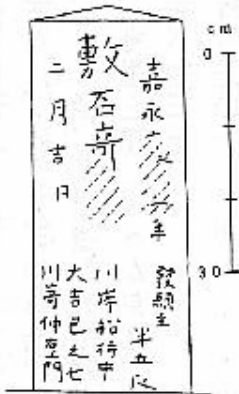
浜野家は屋号を「追分」と呼ばれた。それは一本の道がここで二股の道路(追分)に分かれていたからである。その追分には寛政九年(一七九七)に造立された道標石塔があった。この石塔には、右は岩槻や慈恩寺、左は江戸道という意味の道しるべが刻まれていたという。しかし道路工事によってその貴重な道標石塔が行方不明となつてしまつたために今となつてはそれ以上の詳しいことはわからない。

旧増林村

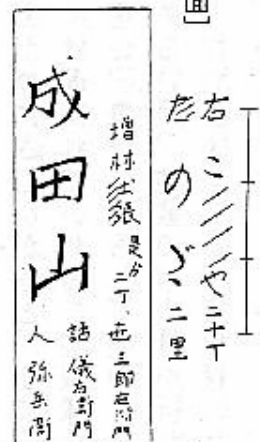
1. 増林 道標付き普門品供養塔



2. 増林 敷石供養塔



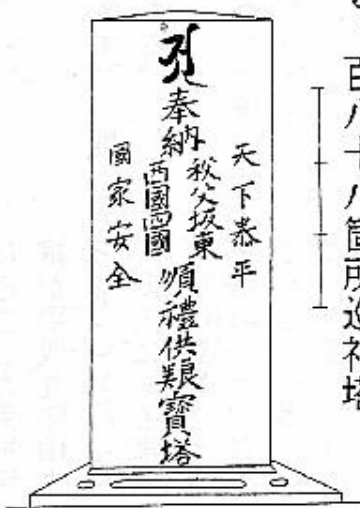
3. 増林 道標付き成田山文字塔



4. 増林 普門品供養塔



5. 増林 百八十八箇所巡礼塔



6. 増林 地蔵菩薩像付き念仏供養塔



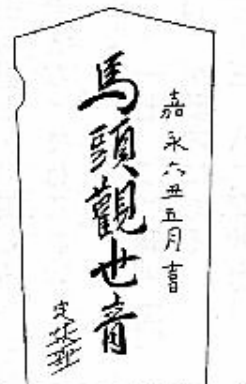
7. 増林 道標付き三界万霊塔



8. 増林 青面金剛像庚申塔



9. 増林 馬頭観音文字塔



10. 観音菩薩像付き普門品供養塔



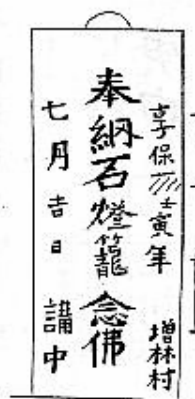
11. 道標付き文字庚申塔



12. 青面金剛像庚申塔



13. 石燈籠供養塔



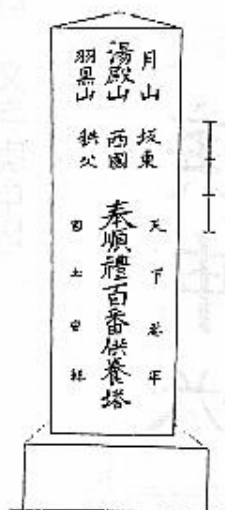
14. 十三仏像容塔



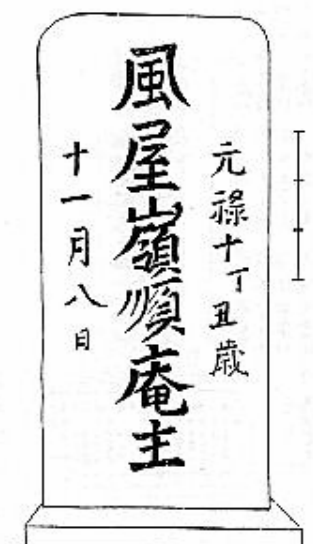
15. 如意輪観音像付き十九夜念仏塔



16. 出羽三山及び百箇所巡礼塔



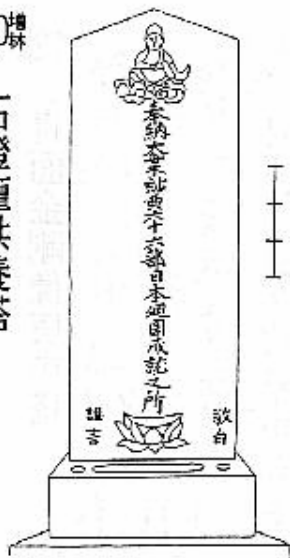
17. 清涼院庵主供養塔



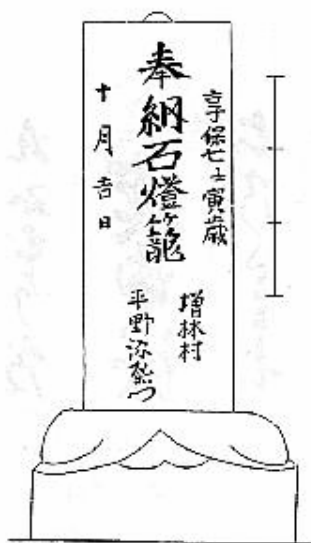
18. 山神宮文字塔



19. 増林
六十六部回国塔



20. 増林
石燈籠供養塔



21. 増林
文字庚申塔



22. 増林
文字庚申塔



23. 増林
青面金剛像庚申塔



24. 増林
文字庚申塔



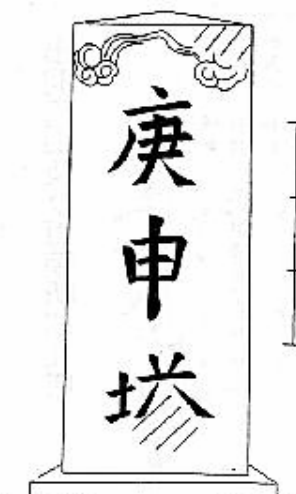
25. 増林
板碑型墓塔



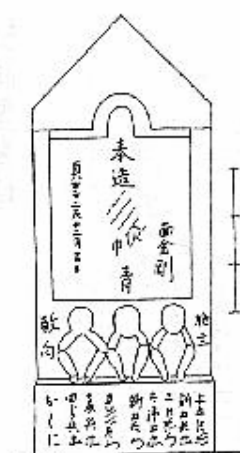
26. 増林
文字庚申塔



27. 増林
文字庚申塔



28 増棟
文字庚申塔



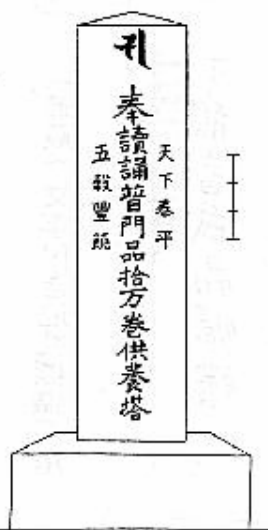
29 増棟
石階・敷石供養塔



30 増棟
法華經供養塔



31 増棟
普門品供養塔



32 増棟
弘法大師像



33 増棟
不動明王像



34 増棟
五大の梵字付墓塔



35 増棟
利劍名号塔



36 増棟
青面金剛像庚申塔



37^{増林}

青面金剛像庚申塔



38^{増林}

百八十八箇所巡礼塔



39^{増林}

板碑型墓塔



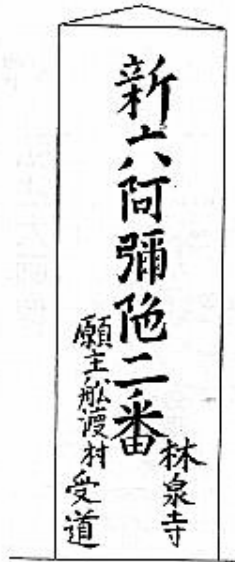
40^{増林}

地藏菩薩像付き念仏供養塔



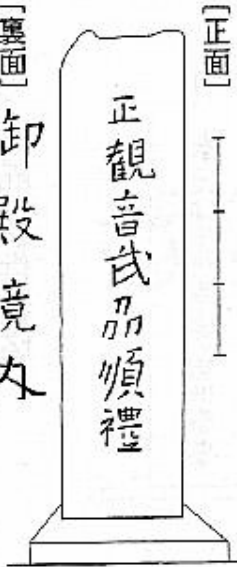
41^{増林}

『新六阿弥陀二番』標識石塔



42^{増林}

『御殿』文字付き巡礼標識石塔



43^{増林}

徳本行者の名号塔



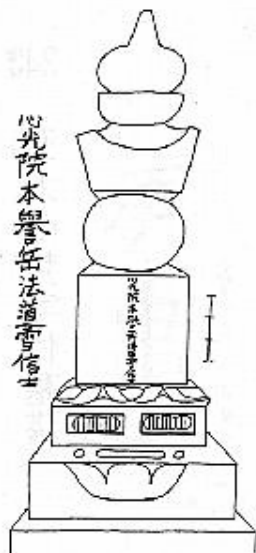
44^{増林}

阿弥陀如来像付き開山塔



45^{増林}

増林関根氏始祖の五輪供養塔



46^{増林}

辞世の匂付き僧侶の墓塔



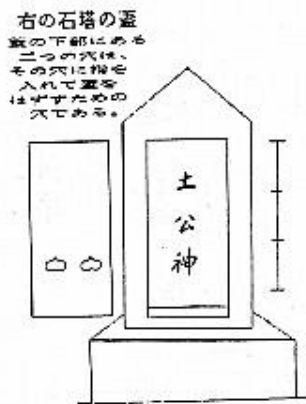
47^{増林}

文字庚申塔



48^{増林}

どくうじん
土公神文字塔



49^{増林}

文字庚申塔



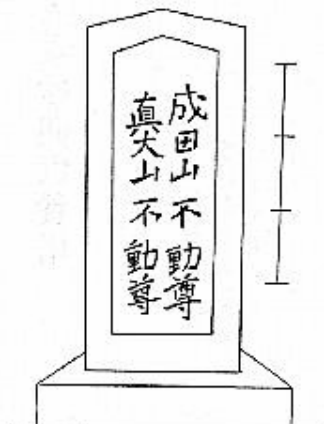
50^{増林}

水神宮文字塔



51^{増林}

成田山・真大山不動尊文字塔



52^{増林}

地藏菩薩像



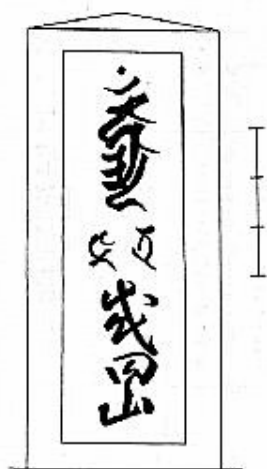
53^{増林}

法華経及び般若理趣経供養塔



54^{増林}

不動三尊梵字付き成田山文字塔



55 増棟

釈迦十六善神塔

せんじん



〔参考〕
 勝林寺近くの天祖宮にある記念碑
 和歌と人物像が刻まれている

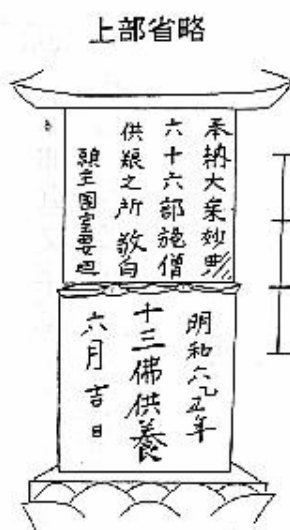
57 増棟

大乘妙典供養塔



58 増棟

回国塔及び十三仏供養塔



上部省略

下部省略

60 増棟

六十六部回国塔



61 増棟

明覚禪師の文字庚申塔



56 増棟

普門品供養塔



59 増棟

普門品供養塔



62 増棟

地藏菩薩像付き百箇所等巡礼塔



63 増棟

文字庚申塔



64 増棟

文字庚申塔



65 増棟

文字庚申塔



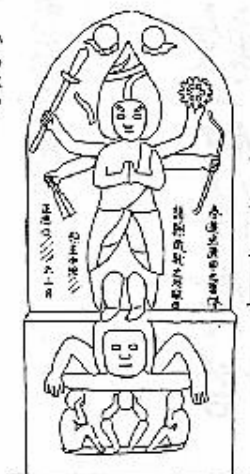
66 増棟

道標付き文字庚申塔



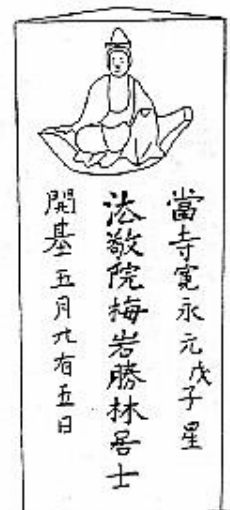
67 増棟

青面金剛像庚申塔



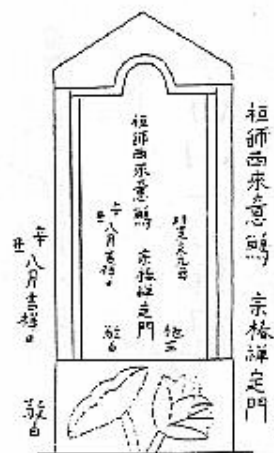
68 増棟

一葉観音像付き石塔



69 増棟

『祖師西来意』文字塔



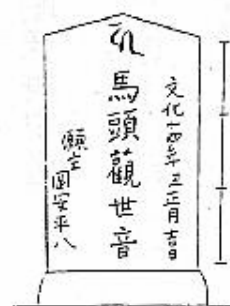
70 増棟

大乘妙典回国塔



71 増棟

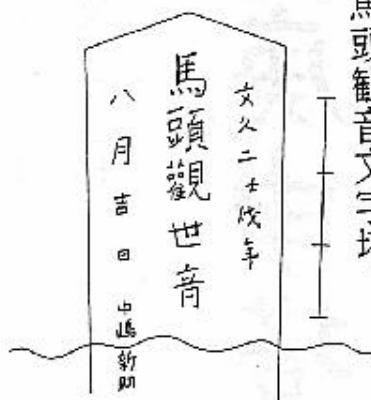
馬頭観音文字塔



72増棟 道標付き馬頭観音文字塔



73増棟 馬頭観音文字塔



74増棟 馬頭観音文字塔



75増棟 百箇所巡礼塔



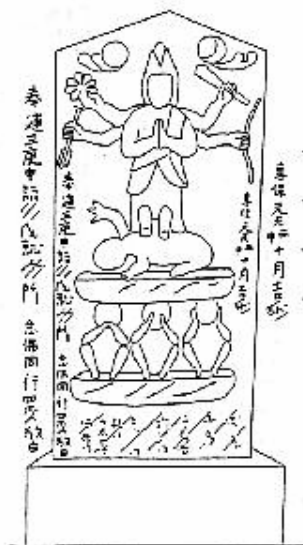
76増棟 敷石供養塔



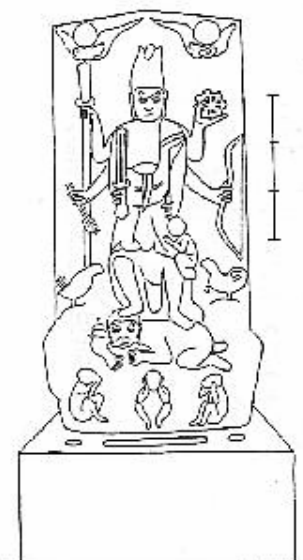
77増棟 文字庚申塔



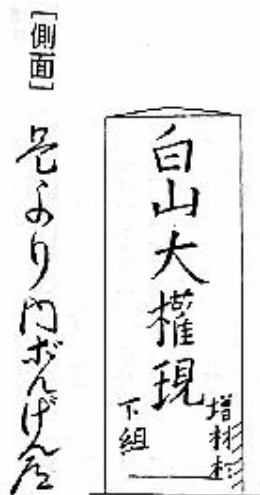
78増棟 青面金剛像庚申塔



79増棟 青面金剛像庚申塔



80増棟 道標付き白山権現文字塔



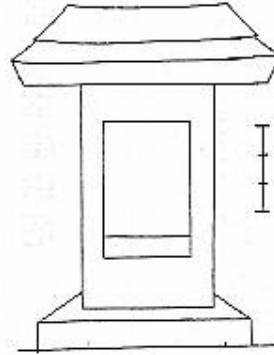
81^{増棟}

願掛け奉納石塔



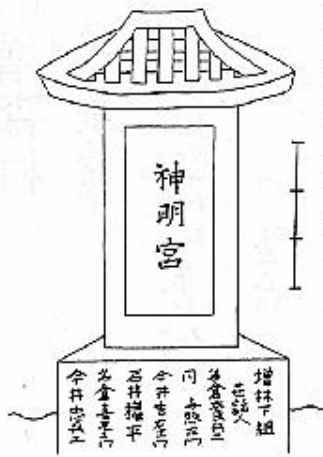
82^{増棟}

水神宮石塔祠



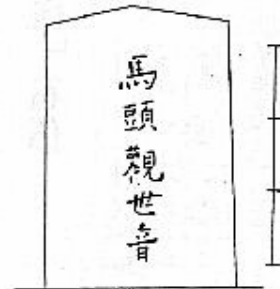
83^{増棟}

神明宮文字塔



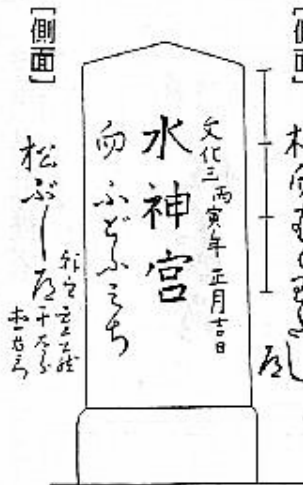
84^{増棟}

馬頭観音文字塔



85^{増棟}

道標付き水神宮文字塔



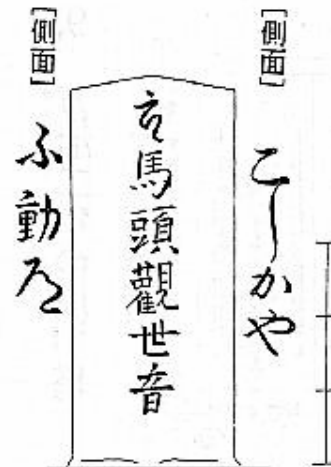
86^{増棟}

文字庚申塔



87^{増棟}

道標付き馬頭観音文字塔



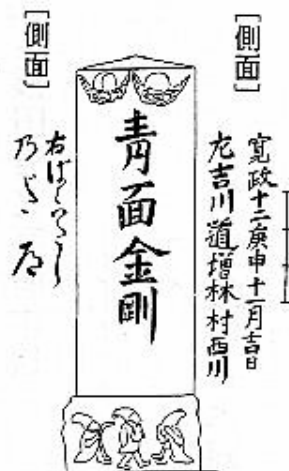
88^{増棟}

権現宮文字塔



89^{増棟}

道標付き文字庚申塔



旧増森村

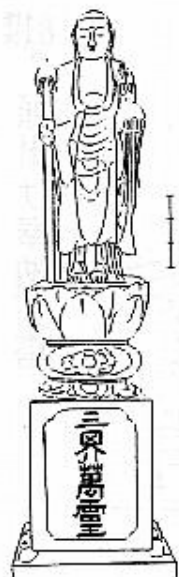
1. 増森
敷石供養塔



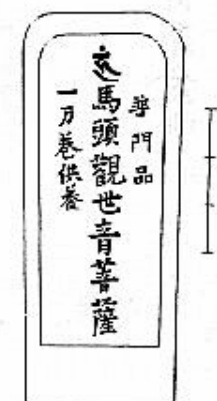
2. 増森
板碑型文字庚申塔



3. 増森
「高地蔵尊」石仏



4. 増森
馬頭観音文字塔



5. 増森
普門品供養塔



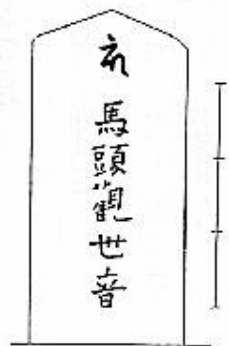
6. 増森
「大日様」石仏



7. 増森
猿田彦文字庚申塔



8. 増森
馬頭観音文字塔



9. 増森
万治二年の庚申塔



10^{増森} 道標付き文字庚申塔



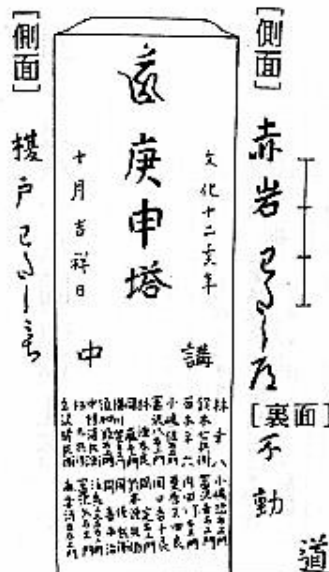
11^{増森} 聖徳太子供養塔



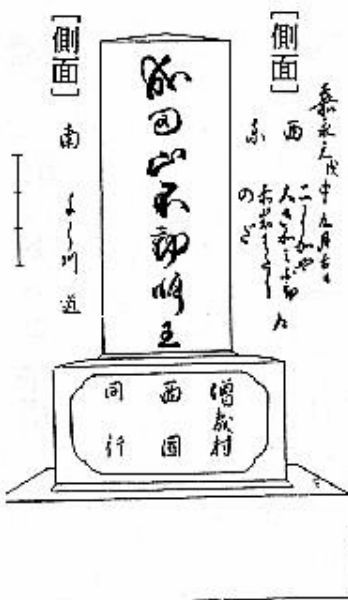
12^{増森} 道標付き青面金剛像庚申塔



13^{増森} 道標付文字庚申塔越ヶ谷道



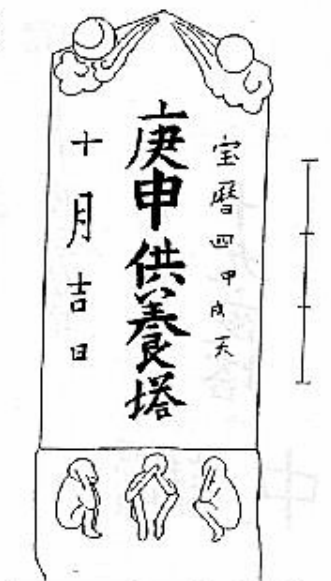
14^{増森} 道標付き不動明王文字塔



15^{増森} 道標付き文字庚申塔



16^{増森} 文字庚申塔



17^{増森} 三田八幡宮文字塔

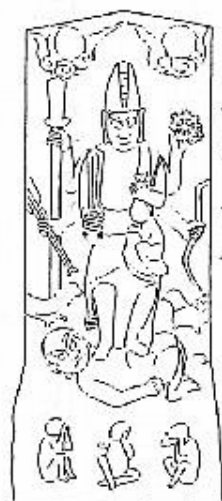


18^{増森} 青面金剛像庚申塔



19増森

青面金剛像庚申塔



20増森

青面金剛像庚申塔



21増森

道標付き青面金剛像庚申塔

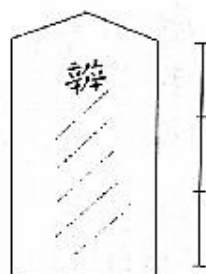
〔側面〕

右まゝ
左まゝ
乃



22増森

弁天文字塔



23増森

「第六天」文字塔



24増森

百八十八箇所巡礼塔



25増森

雷神宮文字塔



26増森

道標付き文字庚申塔

吉川道



27増森

十九夜念仏塔

榎戸渡のた乃
赤岩

越ヶ谷
大相模不動道

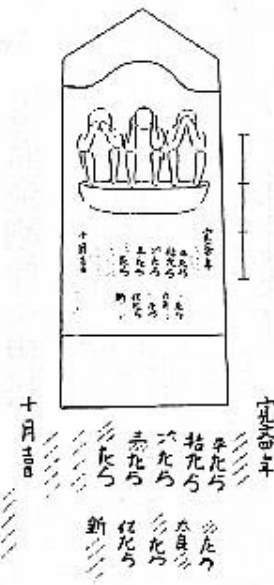


28. 増森
名号塔

在平松東七百八丈
結東宮跡土塔塔体六條
成道社跡塔土人圓和の
願其塔體其北
十増久合北五



29. 増森
三猿庚申塔

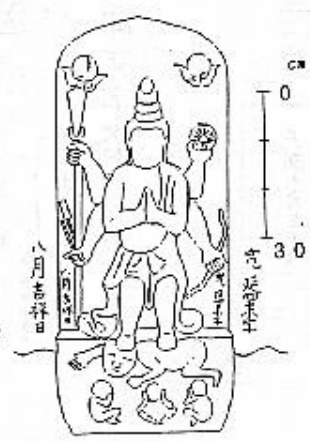


30. 増森
青面金剛像
庚申塔



旧中島村

1. 中島
青面金剛像庚申塔



2. 中島
地藏像付き三界万霊塔



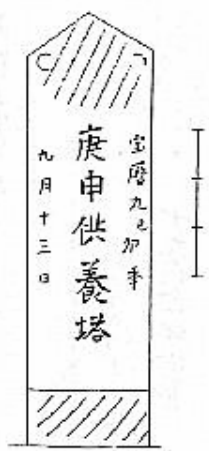
3. 中島
六十六部回国塔



4. 中島
地藏像付き念仏塔



5. 中島
文字庚申塔



6. 中島
文字庚申塔



7. 青面金剛像庚申塔



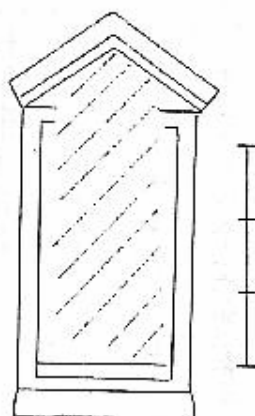
8. 青面金剛像庚申塔



9. 青面金剛像庚申塔



10. 水神文字塔



1. 猿田彦文字庚申塔



2. 天神文字塔



3. 「大随求陀羅尼」梵字文供養塔



4. 十九夜念仏塔



5. 十九夜念仏塔



6. 花田
十九夜念仏塔



7. 花田
阿弥陀像付き念仏塔

奉造五阿弥陀如来念佛講中人敬造十二世平樂塔



8. 花田
文字庚申塔



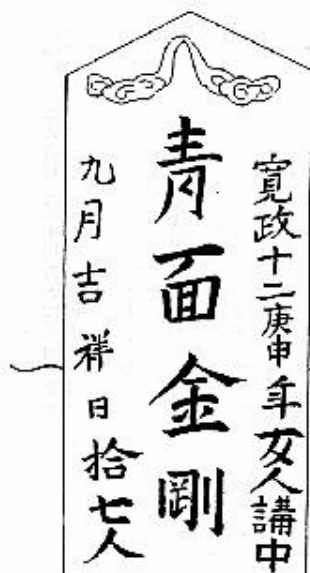
9. 花田
十九夜念仏塔



10. 花田
文字庚申塔



11. 花田
文字庚申塔



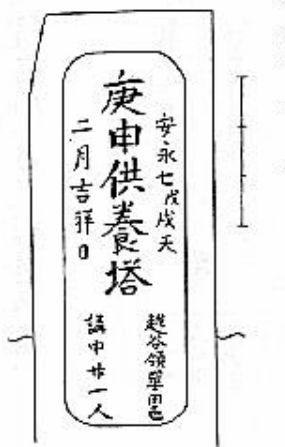
12. 花田
文字庚申塔



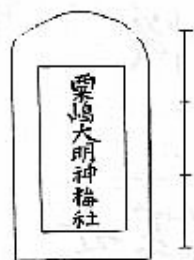
13. 花田
道標付き文字庚申塔



14. 花田
文字庚申塔



15番
淡島あわしま明神文字塔



16番
青面金剛像庚申塔



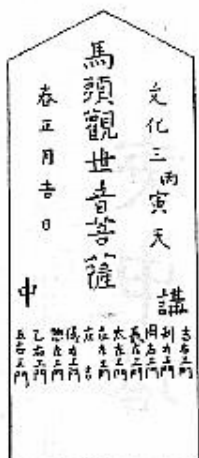
17番
「スマツカラ地蔵」石仏



18番
青面金剛像庚申塔



19番
馬頭観音文字塔



旧小林村

1. 道標付き文字庚申塔



2. 地藏像付き三界萬霊塔



3. 法華経・普門品供養塔



4. 観音像付き念仏塔



5. 小林
十九夜念仏塔



6. 小林
青面金剛像庚申塔



7. 小林
大日如来像付き光明真言塔



8. 小林
如意輪觀音像付き念仏塔



9. 小林
大日如来像付き光明真言塔



10. 小林
地藏像付き念仏塔



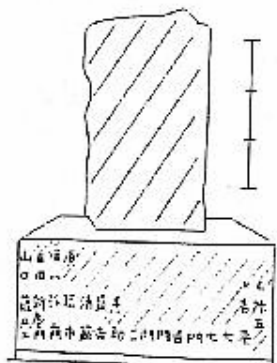
11. 小林
地藏像付き念仏塔



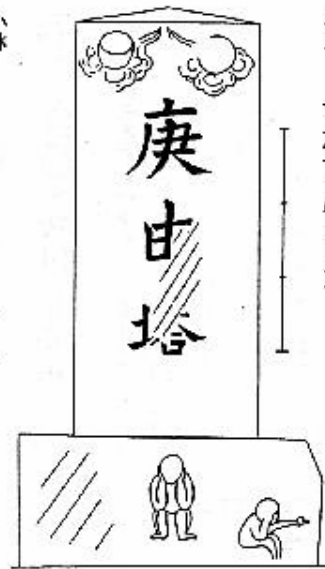
12. 小林
石灯籠供養塔



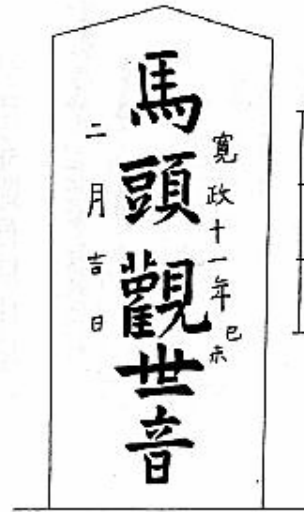
13. 小林
道標付き「庚申様」石仏



14小 文字庚申塔



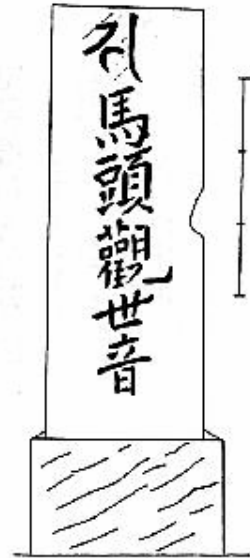
15小 馬頭観音文字塔



16小 荒神文字塔



16小 馬頭観音文字塔

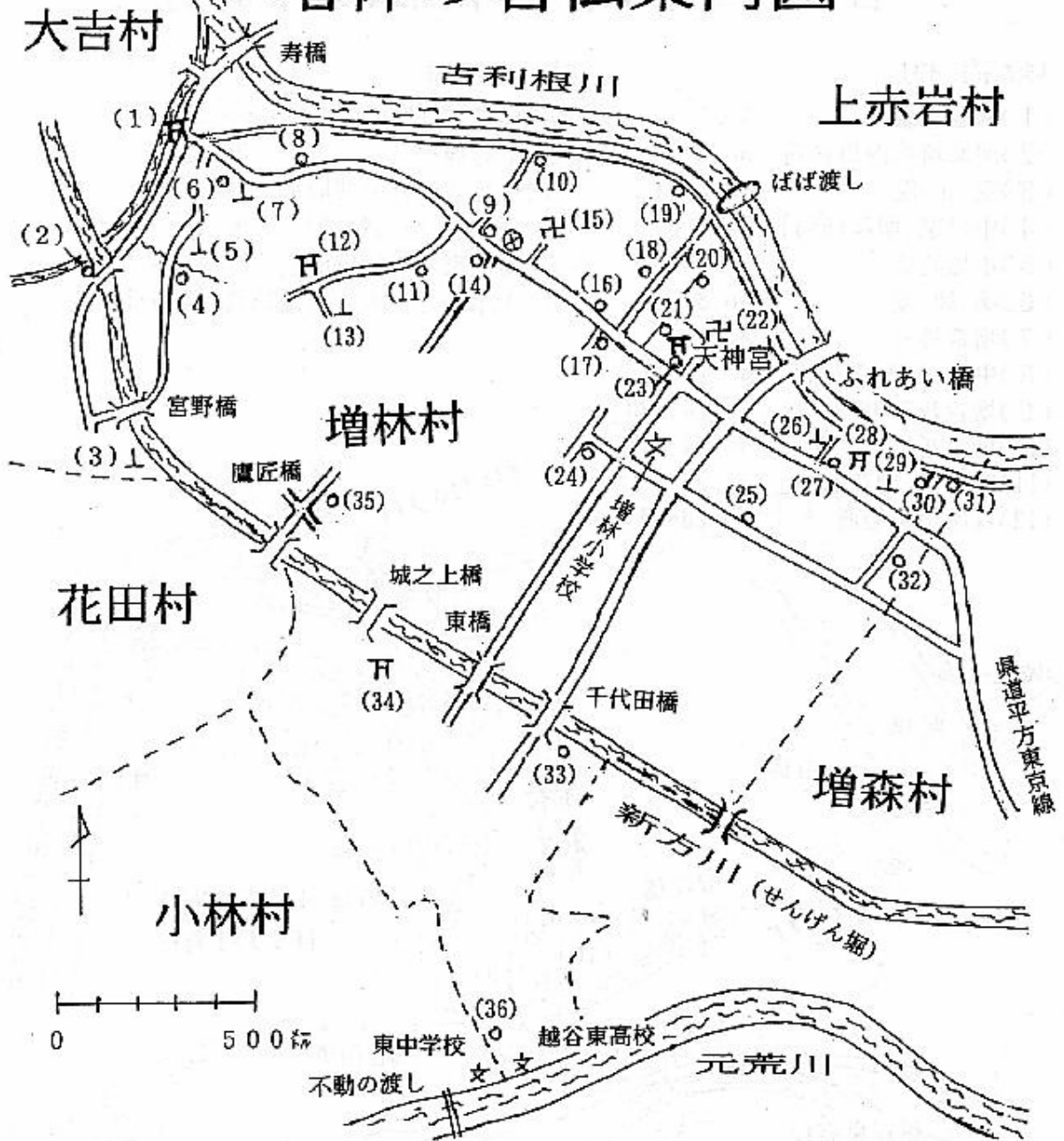


越谷八景の水神文字塔



昭和六年六月廿日
妹尾新之助

増林の石仏案内図



- (1) 増林前波の水神宮 No. 1~4 (2) 定使野橋そば水神宮 No. 7・8 (3) 定使野共同墓地 No. 9・10
 (4) 増林用水近くの平野家[増林1270]そば十字路 No. 11・12 (5) 清涼院墓地 No. 13~17
 (6) 平野家[増林 3500]邸内No. 18 (7) 平野家個人墓地No. 19・20 (8) 藤掛家[増林3555]路傍No. 21~23
 (9) 鈴木家[増林3763]路傍No. 24 (10) 吉利根川八幡河岸跡地No. 25 (11) 今井家[増林3711]路傍No. 26
 (12) 護郷神社(旧「浅間神社」) No. 27~30 (13) 福寿院跡墓地 No. 31~33 (14) 須賀家[増林3781]前 No. 34
 (15) 林泉寺 No. 35~46 (16) 今井家[増林3894]路傍 No. 47 (17) 須賀家[増林2-431]邸内 No. 48-50
 (18) 須賀家[増林3864]そば稲荷神社No. 51 (19) 林泉寺裏の土手No. 52 (20) 勝林寺北西の「とうかん山」
 No. 53 (21) 須賀家[増林2824]路傍 No. 54・55 (22) 勝林寺 No. 56~70 (23) 岡安家[増林2707]路傍No. 71
 (24) 岡安家[増林2-369]そば路傍No. 72 (25) 宮川家[増林3-174]路傍No. 73 (26) 増林下組地蔵堂 No. 74
 (27) 山崎家[増林3-190]そば路傍 No. 75 (28) 増林下組香取神社 No. 76 (29) 下組集会所 No. 77~79
 (30) 白山神社No. 80・81 (31) 名倉家[増林4537]No. 82 (32) 名倉家[増林3-269]邸内No. 83 (33) 千代田橋
 No. 84・85 (34) 城ノ上稲荷神社 No. 86・87 (35) 須賀家[増林1-4] No. 88 (36) 百木家[増林5643] No. 89

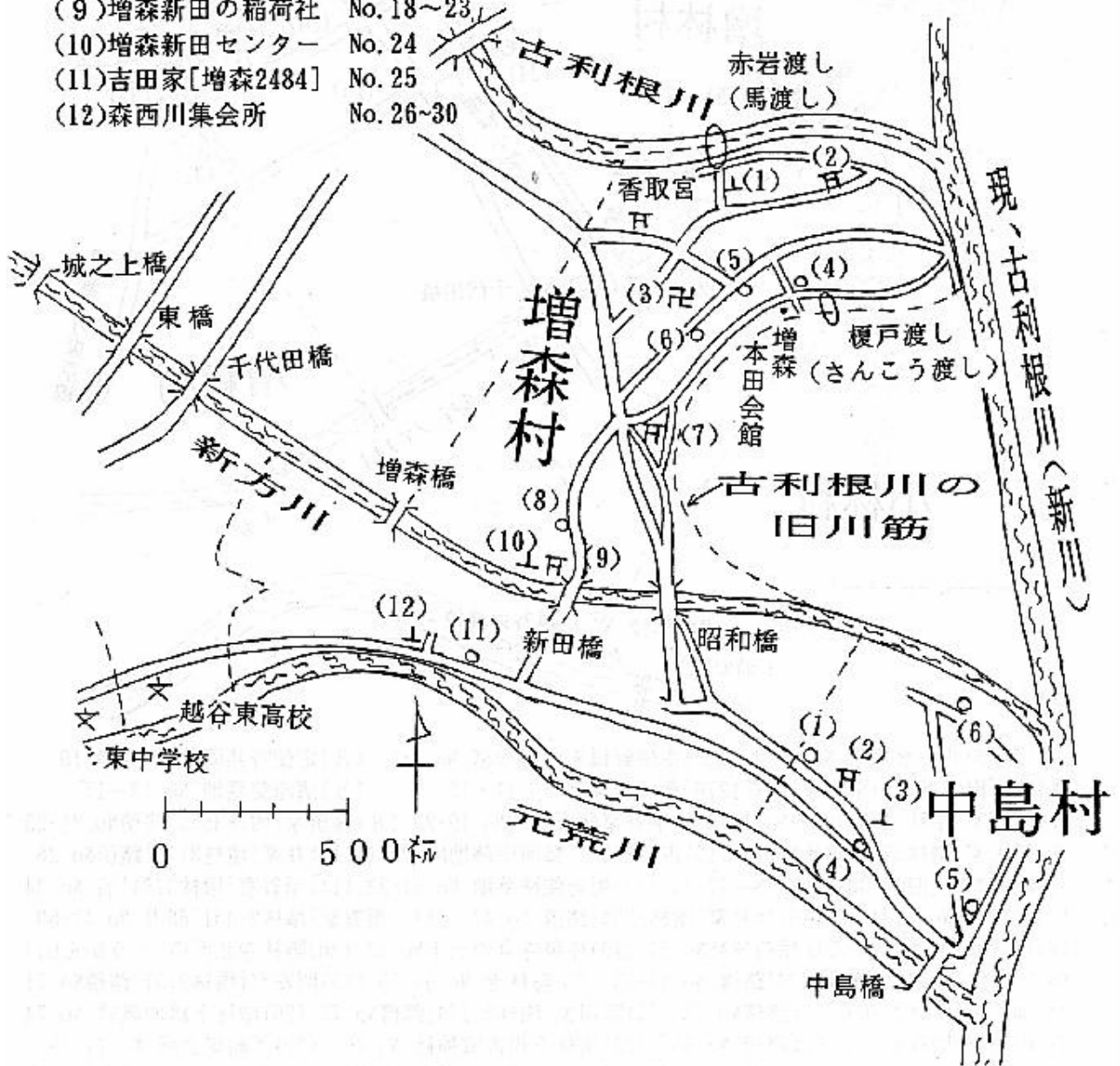
増森・中島の石仏案内図

増森村

- (1) 観音堂墓地 No. 1
- (2) 河原崎の内田稲荷 No. 2
- (3) 宝正院 No. 3~5
- (4) 中村家[増森1654] No. 6
- (5) 小島酒店 No. 7
- (6) 薬師堂 No. 8~14
- (7) 増森神社 No. 15
- (8) 中村家[増森2-47] No. 16・17
- (9) 増森新田の稲荷社 No. 18~23
- (10) 増森新田センター No. 24
- (11) 吉田家[増森2484] No. 25
- (12) 森西川集会所 No. 26~30

中島村

- (1) 林家[中島1-79] No. 1
- (2) 中島神社 No. 2
- (3) 正福寺管轄の共同墓地 No. 3・4
- (4) 小川家[中島2-89] No. 5~7
- (5) 鈴木家[中島3-66-1] No. 8
- (6) 送水管近くの土手道路傍 No. 9・10



花田・小林の石仏案内図

花田村

- (1) 西円寺 No. 1~14
- (2) 山本家 [花田4-2-1] No. 15
- (3) 佐藤家 [花田4-20-13] No. 16~19

小林村

- (1) 東小林香取神社 No. 1
- (2) 東福寺 No. 2~12
- (3) 会田家 [東越谷2-2-3] No. 13
- (4) 会田家 [東越谷3-17-2] No. 14
- (5) 清水家 [東越谷3-3-8] No. 15
- (6) 鈴木家 [東越谷2-14-4] No. 16
- (7) 浜野家 [東越谷8-117]



「藁細工・祝い亀」のこと

宇田川正治

一色 英子

昔から越谷でも藁で注連縄や縄・俵・むしろ・もっこなどの農業用品をはじめ、藁布団・草履などの生活用品を作っていた。時を経て、今では藁製品の姿は消え、藁は生活に利用されなくなった。

そんな中で、七左町四丁目で農業を営む松沢開作さんは、十数年前より藁細工の「祝い亀」を製作している。

材料が容易に手に入ることで、以前、三郷市で見た藁細工の亀を作ることをついに思いついた。

この藁細工の亀の起源は定かでないが、東北地方の上棟式で使われていたものらしい。

松沢さんは試行錯誤のすえ、現在の形に至ったという。そしてこの藁細工の亀を「祝い亀」と名づけている。

十月上旬、松沢家を訪れ、「祝い亀」の製作を見学した。

材料は、現在、植え付けている「日本晴」という品種で、青みのある穂つきのおいしものを、九月下旬から十月上旬までに刈りあげ、軒下で乾燥させたものを使う。

作品の出来上がりには色合いが重要で、あまり天気がよすぎ

ると赤くなってしまう。刈り時と干し加減に気をつかうとのこと。

また、細工するとき藁が折れやすい品種はやめて、やわらかい品種のものを用いている。

その年により藁のできがちがうので、艶と色合いの異なる「祝い亀」が出来あがる。

作り方

① 六本の藁の穂先をしばったものを十二束用意する。六束は縦、六束は横に使う。

② 六束を縦にならべ、横の一束を交互に通し、横藁が上にのった縦藁は下に折りまげて、二束目の横藁をのせる。(写真一)

③ 横藁を六束入れるまで、くり返し市松模様編みに編み、これを甲羅とする。

編み終わると先を結び、先端を切りそろえ手足とする。(写真二・写真三)

④ 穂のついた藁を十三〜十四本を一束として六束用意する。一束ずつ甲羅の表の下部から裏にむけてさしこむ。(写真四)

⑤ 甲羅の裏にさしこんだ藁は、支柱で止め、つりひもを通して上部を写真のように折りまげ、支柱をはずす。(写真五)

⑥ 折りまげた藁の上と下を針金入りの藁支柱でとめ、甲羅を形づけ下部の藁を切りそろえる。(写真六)

⑦ 頭と甲羅の縁どりの縄を左みつぐり（三本の左撚り）に編む。左三つぐみは堅く編めて見栄えがよいので、この編み方を使う。（写真七）

⑧ 手足の先端を切りそろえ、結び目に赤白の糸を結びつける。首の部分にも赤白の糸を結びつける。

（写真八）

このように生命をふきこまれた藁は、「祝い亀」に変身するのである。

松沢さんの製作を見てみると、単に藁細工を作るというだけでなく、農業人としての稲に対する敬虔な気持ちが藁に生命をふきこんでいると思われる。

この「祝い亀」は近くの武蔵野中学校の生徒を通じて、インド大使館やデンマーク大使館に届けられ、越谷の「藁細工・祝い亀」として世界に広まっている。

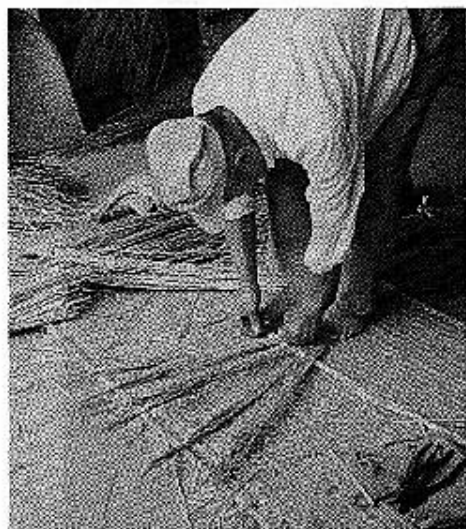


写真 一



写真 三



写真 二



写真 五



写真 四



写真 七



写真 六

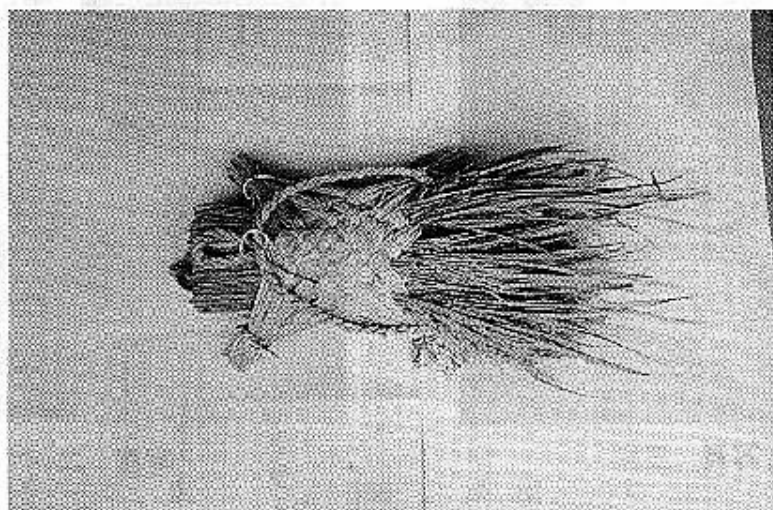


写真 八

二十世紀余聞

高橋 清

一 伝染病の話

二十世紀に入っても恐ろしい病氣といえ、肺病・らい病・伝染病であった。法定伝染病は十一種ある。

明治十年、志賀潔が赤痢菌を発見した。この年、赤痢で二万三七六三人が死亡した(赤痢と疫痢は同じ)。

明治三十二年、ペストが西日本に流行、患者六十二人のなか四十五人が死亡した。

明治三十四年、二十世紀となる。

この時代、衛生行政は、内務省の所管で、末端は警察署を経て村役場衛生係と駐在所巡査が担当した。

大字では衛生区長・区長代理が住民を督促した。万一、伝染病が発生すると一九四四年以前は次のような処置をした。

(1)患者は避病院に入れて隔離。やむを得ないときは自宅療養

(2)患者の出入(門口)には縄を張って出入を役員が監視。

(3)患者の糞尿は石油缶で煮沸消毒した。

(4)布団・衣類などは、役場備品の大きな釜で蒸気消毒した。

(5)便所・下水などには、石炭酸という臭気の強い液体を如露

撒布した。

その上に多量の石灰をまいて蠅の菌の媒介を防いだ。

(6)井戸には塩素系カルキを投入し、飲用には煮沸消毒。

子どもたちは鼻をつまんで呼吸をとめて、走って通った。

以上は巡査立会いで、定使を使役し、衛生区長・区長代理らが実施した。

二 越谷にも飛行場があった(一九四一〜四五)

昭和三九年、越谷西中学校生徒が、この飛行場について、関係住民よりきき取り調査をした。

(1)主滑走路 幅六十m、長さ一五〇m、一本、他に誘導路。

(2)飛行場総面積 約二〇〇町歩、一九八万㎡。

(3)工事関係者

飛行場設定隊 約七〇〇人(軍人・軍属・民間人)

警備隊 約七〇人(陸軍軍人)

その他 約一二〇〇人

昭和一九年七月、勤労奉仕隊の要請があり、各部落一日、十人ずつ交代で使役に出た。範囲は約八km四方の部落。

(4)事業経過 昭和一六ころより、用地買収にかかる。

昭和一七年より工事にはいる。昭和一九年末に完成。

(5)土地の選定 軍は大相模耕地(現在のレクタウン地区)と論田耕地を候補にあげた。当時、食料不足の時、反当り米収量の少ない方を選んだ。論田耕地は反収二俵半と県

農林部に届けてあったのでここに決まった。

(6)飛行場の目的 小型機の前進基地であつたらしい。

(7)飛行場の使用 小型機が一回着陸した。滑走路の地盤が軟

弱で、バウンドしてオーバーランして停まったという。

昭和一九年十一月よりB二九の空襲がはじまり、二十年

三月ごろより機動部隊から発する艦載機の空襲となる。

このころより竹・木材・紙で造った偽飛行機を並べた。

敗戦後は農地に戻された。

三 召集令状 (一九三七〜四五)

日本の二十世紀は戦争を抜きにしては語れない。

庶民にとって、あの召集令状(赤紙)はどのようなにして届けられたか。終戦後も秘密の中に埋もれて全く知られなかった赤紙。

平成八年、富山県砺波市で突然この事実が解明された。

終戦直後、各連隊区司令部は、市町村役場兵事係に兵

事関係書類はすべて焼却処分するよう命令した。

砺波市の一八歳の兵事係は焼却せずに、全ての書類を自宅の屋根裏に隠した。

そして五〇年後に世間に出したところ、マスコミの注目するこ
ととなった。

その仕組みは次のようである。

大本営陸軍部の編成担当は、新設部隊の要員、既設部隊の
欠員補充を兵科・階級・人数・特殊技能者ごとに、連隊区
司令部に命令する。

連隊区司令部は、市町村役場兵事係に召集人員を通達し、

人選を付託した。

兵事係は兵籍簿より要請に合った人を選びだした。

ここで選抜された氏名は極秘で、村長と兵事係だけが知る
ものであった。

令状の発送期日・時刻は予め決められている。その時、赤紙
は役場吏員により該当者に配達された。

それ故に、村長・兵事係の姻戚関係を除外しようと思えば
できた。

同様に連隊区司令部に勤務した下士官でも、事務屋であれ
ばできた。兵籍原簿の氏名を二本線で抹消すればよかった。

砺波市の当時の兵事係は、近隣の人から怨まれ・非難され
て、ついに自殺したそうだ。

彼もまた、戦争の犠牲者となってしまった。

私

の子供のころの越ヶ谷町・大澤町は、昔の宿場町の名残を
感じさせる町でした。

大沢橋近くには、川魚料理を出す料亭や小料理屋が多くあ
り、芸者さんも住んでいました。

映画や芝居もかかる東武劇場があり、大沢橋と元荒川橋の間
には、遊廓があつて、農家の休みの日には、近郷近在から大勢の人
が集まって、とても賑わいました。

(岩瀬記)

増林地区の江戸時代の寺社

山本 泰秀

江戸時代中期には、当地に多くの寺社が存在していたが、明治維新に出された神仏分離令とそれにもなつて起こつた廃仏毀釈運動によって多くの寺院が破壊され、現在は寺院のない墓地となつているなど、かすかに当時の名残がみられる。そこで江戸期の寺社について紹介したい。

増林地区（旧増林村・増森村・中島村・花田村・小林村）で現在住職の在住する寺院を宗派別に分けてみると、真言宗二カ寺、浄土宗・曹洞宗各一カ寺である。それ以外の江戸期に遡る次の二宗派について調べてみた。

《本山修験宗（天台密教）》

増林にある梅光院、大正（だいしょう）院、増森にある清学（せいがく）院がこれに属する。「新編武蔵風土記稿」によれば、これらは幸手不動院が本寺である。幸手不動院は、江戸時代に現在の春日部市の小湊の観音院

周辺にあった。葛飾郡幸手領に属していたため幸手不動院と呼ばれたのである。江戸時代は隆盛を誇つたが、明治維新の廃仏毀釈の影響で衰退し、大正に入って東京の砂村（現、江東区南砂町）に移転した。その後、東京大空襲で焼失し、戦後は台東区竜泉にある正法院（しょうほういん）に合併された。跡地は曹洞宗の中央寺となる。

《日蓮宗》

増林唯一の日蓮宗派の寺院があつた。法立寺と呼ばれた。この法立寺の本寺は本土寺である。そこで本土寺について紹介する。

本土寺は現在も松戸市平賀にある。山号は長谷山、本尊は大曼陀羅である。天正十九年（一五九一）、徳川家康がこの寺に寺領十石の朱印を付し、隆昌を極めた。法立寺はその末寺であつたのである。

江戸時代の増林地区の寺社を文政年間の寺院明細をもとに一覧表にしてみると次のようになる。

増林地地区の江戸時代の寺院

《増林村》

寺院名	宗派	本寺	本尊	開山年か没年
林泉寺	浄土宗	増上寺	阿弥陀如来	本誉・寛政三十四年
清伝寺	浄土宗	林泉寺	阿弥陀如来	證誉・寛政三十四年
浄泉院	浄土宗	林泉寺	阿弥陀如来	
勝林寺	曹洞宗	福嚴寺	十一面観音	閻契・文政三十四年
清涼院	曹洞宗	勝林寺	聖観音菩薩	嶺順・寛政三十四年
福寿院	新義真言	照蓮院	聖観音菩薩	長清・寛政三十四年
宝蔵院	新義真言	金乗院	不動明王	祐範・寛政三十四年
法立寺	日蓮宗	本土寺	三宝祖師	日明・正徳十一年
梅光院	本山修験	不動院	不動明王	
大正院	本山修験	梅光院	不動明王	宥秀・寛政三十四年
密蔵院	(風土記稿に記載なし)			

《増森村》

寺院名	宗派	本寺	本尊	開山年か没年
東正寺	新義真言	金乗院	大日如来	賢永・寛政十一年
観音寺	新義真言	東正寺	阿弥陀如来	尊賢・天保三十四年
金蔵院	新義真言	東正寺	十一面観音	良識・天保三十四年
真正寺	新義真言	東正寺	十一面観音	尊海・寛政三十四年
真光寺			阿弥陀如来	賢明・寛政三十四年
清学院	本山修験	不動院	不動明王	

《中島村》

寺院名	宗派	本寺	本尊	開山年か没年
正福寺	新義真言	金乗院	大日如来	

《花田村》

寺院名	宗派	本寺	本尊	開山年か没年
西円寺	新義真言	照蓮院	聖観音菩薩	

《小林村》

寺院名	宗派	本寺	本尊	開山年か没年
東福寺	新義真言	照蓮院	虚空蔵菩薩	快春・寛政三十四年
蓮乗院	新義真言	東福寺	地藏菩薩	
東光院	新義真言	東福寺	薬師如来	
観音寺	新義真言	東福寺	十一面観音	

※以上より、元荒川流域より古利根川流域に寺院が多い。
古利根川流域の方が社会活動・文化活動が盛んであった
ことがわかる。

増林地地区の江戸時代の神社

《増林村》

神社名	管理者	現在名と備考
浅間社	福寿院持ち	護郷神社(大正時代以後村社)
山王社	福寿院持ち	
香取社	宝蔵院持ち	
香取社	村持ち	
八幡社	梅光院持ち	
稲荷社	梅光院持ち	
天神社	大正院持ち	
天神社	村持ち	
神明社	大正院持ち	
神明社	村持ち	
三十番社	法立寺持ち	天満宮

《増森村》

神社名	管理者	現在名と備考
香取社	東正寺持ち	増森神社
水神社	金蔵院持ち	
弁天社	眞正寺持ち	
第六天社	清学院持ち	
稲荷社	観音寺持ち	
稲荷社	東正寺持ち	

稲荷社	清学院持ち
天神社	東正寺持ち
清瀧社	東正寺持ち

《中島村》

神社名	管理者	現在名と備考
稲荷社	正福寺持ち	中島神社
諏訪社	正福寺持ち	中島神社

《花田村》

神社名	管理者	現在名と備考
稲荷社	西円寺持ち	
第六天社	西円寺持ち	

《小林村》

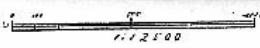
神社名	管理者	現在名と備考
神明社	東福寺持ち	香取神社
香取社	観音寺持ち	
水神社	村持ち	

※神仏習合思想の中から生まれた神社は、ほとんど寺院持ちであったことがわかる。

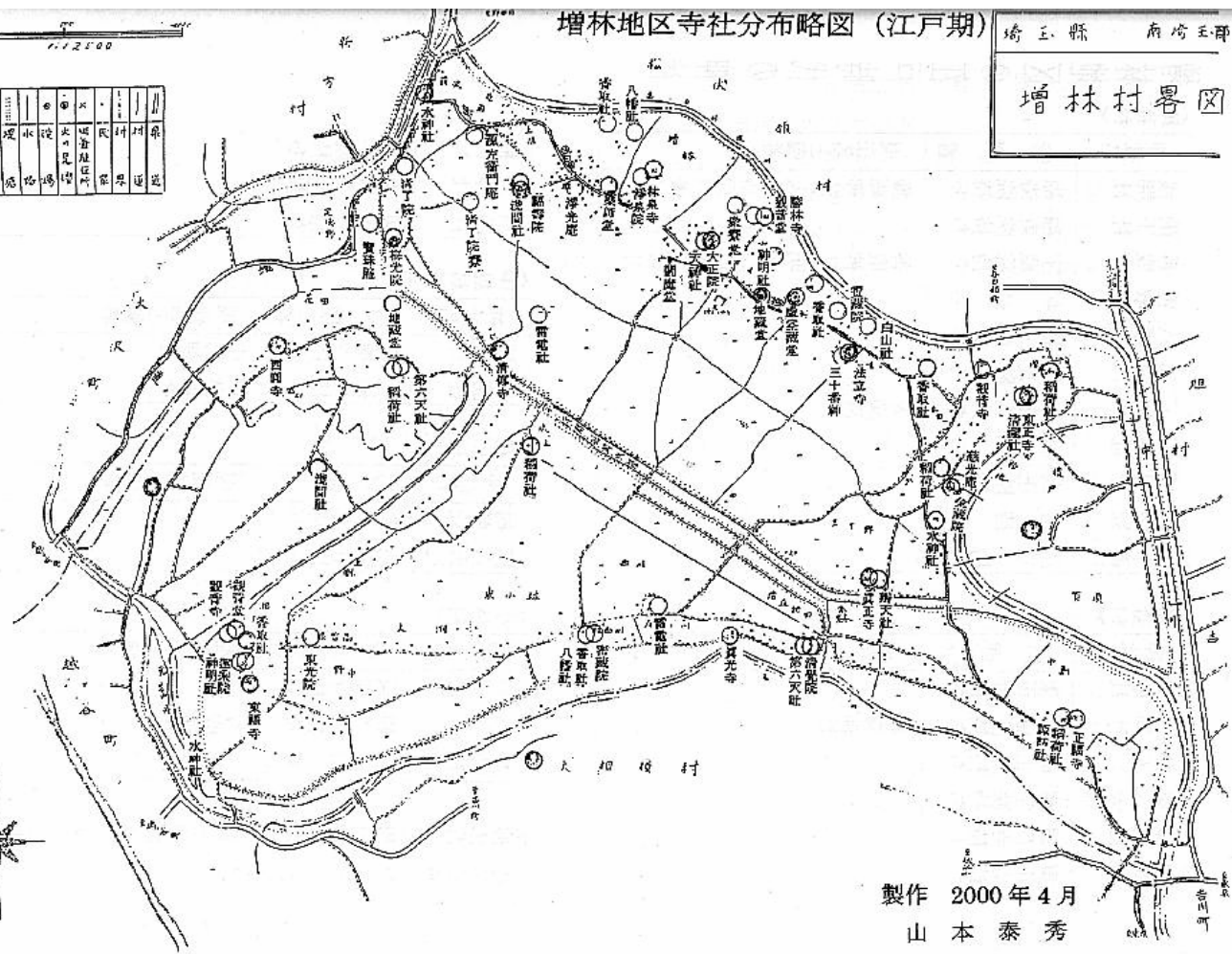
增林地区寺社分布略図 (江戸期)

埼玉縣 南埼玉郡

増林村畧図



○	◎	⊙	⊚	⊛	⊜	⊝	⊞	⊟	⊠	⊡	⊢	⊣	⊤	⊥	⊦	⊧	⊨	⊩	⊪	⊫	⊬	⊭	⊮	⊯	⊰	⊱	⊲	⊳	⊴	⊵	⊶	⊷	⊸	⊹	⊺	⊻	⊼	⊽	⊾	⊿	Ⓚ	Ⓛ	Ⓜ	Ⓨ	Ⓩ	ⓐ	ⓑ	ⓒ	ⓓ	ⓔ	ⓕ	ⓖ	ⓗ	ⓘ	ⓙ	ⓚ	ⓛ	ⓜ	ⓝ	ⓞ	ⓟ	ⓠ	ⓡ	ⓢ	ⓣ	ⓤ	ⓥ	ⓦ	ⓧ	ⓨ	ⓩ	⓪	⓫	⓬	⓭	⓮	⓯	⓰	⓱	⓲	⓳	⓴	⓵	⓶	⓷	⓸	⓹	⓺	⓻	⓼	⓽	⓾	⓿	Ⓚ	Ⓛ	Ⓜ	Ⓨ	Ⓩ	ⓐ	ⓑ	ⓒ	ⓓ	ⓔ	ⓕ	ⓖ	ⓗ	ⓘ	ⓙ	ⓚ	ⓛ	ⓜ	ⓝ	ⓞ	ⓟ	ⓠ	ⓡ	ⓢ	ⓣ	ⓤ	ⓥ	ⓦ	ⓧ	ⓨ	ⓩ	⓪	⓫	⓬	⓭	⓮	⓯	⓰	⓱	⓲	⓳	⓴	⓵	⓶	⓷	⓸	⓹	⓺	⓻	⓼	⓽	⓾	⓿
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---



製作 2000年4月
山本 泰秀

旧「越巻」地名考

酒井 達男

越谷の地に人々が住みついたのは、昭和四十一年、四十二年に発掘調査された見田方（みたかた）遺跡の出土品からみて、およそ古墳時代の後期から奈良、平安時代のことと推定されている。

寺院や神社の伝えでは、大相模の不動尊は奈良期、野島の不動尊と大沢の浅間神社は平安期という古い頃の創立を伝えている（越谷教育委員会の書より）。

江戸時代以前に越ヶ谷郷と呼ばれた地名「越ヶ谷」は、いつの頃から付けられた名称なのか。

平安中期、現在の埼玉県東部で勢力のあつた武士集団である与野党の一族が越ヶ谷郷を領し、古志賀谷氏を名乗つたという。また一説には、関東の武士団である千葉氏の系図の中に、およそ九百年位前の人とみられる「古志賀谷」という人名が載せられている。

当時はそこに住んでいる土地の名を苗字としていたので、越谷は古くからの地名であつたことがわかる。

越谷の「谷」は字義どおり元荒川が浸食した谷地を示す。

「越」には越える意味とは別に山や丘、台地のふもとを指す説が強い。

また、北方から元荒川を越えてやって来た人々が、稲作に適した谷地を見つけて定住し、名づけたとする説の二とおりの由来をもつ。はたしてどちらが有力なのであろうか。

越谷市の西南、綾瀬川左岸の沖積地に「新川町」がある。

ここはかつての「越巻村」である（江戸期、明治二十二年、以後は大字名）。字音から女性の肌着を連想させるような何ともユーモラスな地名であつた。

地図を見て感じたことだが、周辺の地名である「長嶋、西新井、谷中、七左、北後谷」等の旧地名が立派に現存しているのに何故かここだけが昭和四十七年に変わってしまったている。

何故、消えたのかはよくわからない。

越巻の語源について角川の日本地名辞典によれば「川沿いの半円状に連なる集落」を意味するとなつている。

越巻の越については越ヶ谷の越と同じで、越と腰とは字面が違うが意義共通といわれる。昨年、秋号の広報こしがや季刊版にも「越ヶ谷の越は腰とも書かれ」と掲載されている。

巻についての語源は沢山ある。牧、牧場、丘の傾斜地、低地、川の渦巻、川の蛇行地、蒔（種）、真木（楨）、薪等があり、内陸平地の場合は川の流れば無視できないようである。

従つて一般的な解釈では角川辞典のようになるだろう。

飛躍して考えると、越ヶ谷地名の「越えてきた新天地」の縮小版ともいえる「西の台地からやってきた新天地」ともいえるのではな

いだらうか。

全国的にみた越(腰)巻地名は非常に多く、実に二百十四ヶ所を数えるという(東北地名研究所調査)。

いかにこの地名が各地に根をおろし、歴史風土にとけこんだ名称であつたのかがわかる。

このうちほとんどが関東、中部、東北地方に集中し、関西から西は少ないというのはまことに不思議である。

地名は土地に刻まれた庶民の歴史である。地名は生きており、それぞれの意味があつて、その土地特有の歴史や風土、自然や生きる営みを語ってきた。

もしも、語呂がよくないというだけの理由で変えられてしまえば、もう一度と戻つてこないいだらうか。

何ともさびしい限りではないか。

次の標的は下間久里とならないよう切に願うものである。

「」存知ですか。越谷特産の「くわい発泡酒(慈姑菜我)」を、くわいは埼玉県・広島県などで生産されており、埼玉県内では越谷市を流れる綾瀬川流域の湿地帯で多く生産され、その品質は高く評価されています。

「この越谷産の縁起物(くわい)を原料とした発泡酒が「くわい」があつて、多くの人に楽しんで飲んでもらうよう(慈姑菜我)と意味で「慈姑菜我」と命名されたそうです。麦のビールとは一味違った飲みこちの美味しい発泡酒です。是非一度召し上がってみてください。

なお価格は一本五〇〇円(三〇〇円)で、お求めは出羽地区の酒店に置いてあります。(増岡記)

子

供の頃、よく度胸のためのポイントとなつた蒲生の「馬捨場」を尋ねてみた。

現在、蒲生西町二丁目・西浦橋の袂に「馬頭観音」二体を含む四体の石仏が安置されている。

確か、昔は岩槻道と出羽堀に挟まれた寂しい処であつたはず。

宅地造成、岩槻道、出羽堀の改修工事により「馬捨場」の移動も何度かあつたとのこと。社会の進歩に伴つた移動はままある。しかし、確かな記録だけは、後世へ伝えなければならぬ。

(高橋正澄記)

古志賀谷十号「越谷市の狛犬」追加

泉 雅彦

前号の「古志賀谷」(一〇号)に発表された「越谷市の狛犬」には追記として平成九年造立の二体(浅間神社 越ヶ谷一五七九)を含め全部で四一体の狛犬が越谷市内にあるとされていますが、それ以外(新発見)の狛犬についてご報告いたします。

No.	所在地	右左	造立年	銘	備考
42	香取神社 大沢三―一三―三八	右	文化八年 造立年	正面 奉 大澤町 後面 内田政右衛門 遠藤忠右衛門 松伏 石工 八兵衛	神殿柵内
43	同	左	同	正面 献 後面 文化八辛未歳 五月吉祥	同
44	久伊豆神社 蒲生一―七―二 (檜先道り)	右	不明		神殿柵内 背に仔獅子が乗る 砂岩
45	同	左	同		同
46	稲荷神社 越谷本町五―九〇三 地先	右	文政四年	正面 東郡 小船町一丁目 和泉屋安兵衛 神田下駄新道 播磨屋七平	ここには変わり形灯籠もある
47	同	左	同	正面 宮(堂)所 本町番組 後面 富田屋市兵衛 文政四年辛巳年 十一月吉日 新長屋 石工 吉蔵	
48	清蔵院 蒲生本町一三―四一		不明		全長三十センチの小さなものだが口中に貨幣 があり信仰されているもの

まだ未発見のものもあると思われませんが、偶然みつけたものについてご報告いたしました。(No.42、43の狛犬については越谷市郷土研究会に報告済み)また前号の報告中に狛犬に書かれている文字の誤認が見られますが製作年の違いについては

① No.19・20 久伊豆神社(蒲生一七二二)

昭和五十三年 ▼ 三十三年

② No.24・25 香取神社(大沢三一―三三―三八)

宝暦□ ▼ 宝暦十年庚辰

③ No.30・31 市神社(越ヶ谷本町八一―一〇)

不明 ▼ 平成八年

(Noは前号の報告の順に便宜上機械的に1―41を付けそのうちの該当Noです)

なお、前記久伊豆神社には屋根の流れ止めと思われる瓦製の獅子も一対ある

「越ヶ谷から越谷へ」

市の前身である越谷町は、昭和二十九年十一月三日、越ヶ谷、大沢二町と蒲生ほか八ヶ村が合併し、全国二番目の大きな町として発足した。この時の合併条件のいちばん大きなものは、町名から「ヶ」の字を取り去ることであったという。

越ヶ谷町は、明治三二年四月、旧越ヶ谷宿を構成していた越ヶ谷・大沢二町の合併で発足した。

百万都市の「さきたま市」と同様、町名論争で、明治三五年に大沢町が分離独立し、以後、戦後の昭和二十九年まで続いていたという。他市の上とは笑えない。住民の郷土愛が秘められていた。

(高橋正輝記)

家

康蘭東入国より、越谷を含めた支配代官として、農政に民政に、はたまた利根川や綾瀬川の流路改修や交通政策など、徳川幕府の経済基盤を確立させた二代記が刊行されている。

この偉大な人物の施策は、現在でも学ぶことが多いはずである。

現在、借金財政で孫子に大きな負担を強いようとしているやり方で良いものであるか。

改めて伊奈忠次の国策を振り返ってみることが必要ではなからうか。

(本間記)

謎の石碑

泉 雅彦

越谷市の相模町に、通称、大相模不動とよばれている大きな寺がある。正式には真大山大聖寺といい、かつては広大な寺領を持ち、本堂の規模はおなじみの浅草の観音様のお堂をしのぐほどだったという。

借しくも明治期に、付近の民家からの失火によりことごとく灰燼に帰してしまった。ただ一つ現存する山門（仁王門）だけが不釣合いに大きく儚さすら感じさせる。

大聖寺に現存する石造物は、七〇〇年以上以前のものはじめとして、板碑が何枚も残されているという。

百庚申や多くの石碑などもある。

その一つに写真の石碑がある。高さ八六cm、横幅八十cmで紀年銘はなく、裏面には石工の名が刻まれているだけだ。

表面の文字の奇妙さには目を見張る。

果たして文字なのか、文字だったら何と読むのだろうか。

よろしくお教えいただきたいと思います。近くにお住まいの方は、ぜひ、現物を見ることをおすすめます。



博物館のない越谷

菅波 昌夫

越谷市の人口三十一万となる今日、文化の市にふさわしく、秋にはコミュニティーセンターを中心に、各種の文化行事がくりひろげられる。

花田苑・能楽堂・野鳥の森・けやき、くすのき荘・各地の公民館・しらこぼと橋・久伊豆神社の大鳥居などの施設がある。文化を愛する越谷の姿は、近辺の市より数段すぐれている。

現在、市民の視野は広がっているが、時として足元を見失いがちである。社会生活の原点は、足元を知ることからはじまる。人は誰でも心の故郷をもっている。越谷にはすばらしい自然と、先人から受け継がれた歴史がある。これを絶やすことなく育んでいくことが、私たちの使命である。

現在まで郷土に伝えられてきた民俗資料・遺跡などの貴重な文化遺産は、ある程度までは収集がはかられてきた。それらは図書館二階や見田方の収納館に眠っている。

この資料を永久に保存するためにも、常設で展示公開できる郷土博物館（資料館）を設置してほしいと願うものである。

一、郷土の歴史資料・民俗資料を収集・保管・展示することによって、教育・学術・文化の発展に寄与できる。

二、越谷市民の財産である文化財を子孫へ伝えていく。

三、越谷市民の郷土を知る権利と、小中学生への課外教育・体験学習の一環として必要である。

現在、埼玉県内には県立をふくめて、五〇の博物館（資料館）がある。

越谷市の周辺一時間ぐらいの範囲だけでも二〇を数える。その規模はさまざまである。

■草加市・三郷市

小学校児童数の減少による空き教室を転用。

■流山市・戸田市

図書館に併設。

■岩槻市

元岩槻警察署を改修。

■浦和市

元師範学校を解体し、その一部を移築。

六

七年前、娘の結婚のため越谷中町の乾物屋かつお節を買いに行きました。その商店の主人の話です。

「昔、徳川のお殿様が越谷の「旗場」に狩にいられて、夜、少ない子供をつれてぶらりと町へ遊びにお出ましになりました。反感をもたれ、夜討・闇討にあわないうよう商人・町人などに、良くして（税金などのとらしい）くれたらしく、商人は割合、捨得だった」と聞きました。

（磯谷記）

越谷市周辺の常設博物館（資料館）

20	宮代町立郷土資料館	"	5・11
19	松戸市立博物館	"	5・4
18	桶川市立歴史民俗資料館	"	4・11
17	三郷市立郷土資料館	"	4・4
16	蕨市立歴史民俗資料館	"	2・11
15	春日部市立郷土資料館	"	2・7
14	川越市立博物館	平成	2・3
13	行田市立郷土博物館	"	63・2
12	三芳町立歴史民俗資料館	"	61・11
11	羽生市立郷土資料館	"	61・8
10	吉川市立郷土資料館	"	59・3
9	上福岡市立歴史民俗資料館	"	58・11
8	草加市立歴史民俗資料館	"	58・11
7	岩槻市立郷土資料館	"	57・5
6	鳩ヶ谷市立郷土資料館	"	56・11
5	大宮市立博物館	"	55・11
4	戸田市立郷土博物館	"	54・11
3	志木市立郷土資料館	"	54・4
2	流山市立郷土博物館	"	53・6
1	浦和市立郷土博物館	昭和	47・6
	常設博物館（資料館）		開設年月

一、数年前、宮内庁御獵場入口左側にあつた薬師様（鶴の森の薬師といわれた）のイチヨウとケヤキが伐採されたので、双方の年輪を数えたら共に四百年であつた。

二、その昔「だる吉」なる人物が「越谷ダルマ」を作つたのは事実か。また「ダルマ屋敷」はいつ頃からあつたのか。

三、大成町の中村頼司家の先祖は、小相模次郎能高で延久元年（一〇六九）に九〇歳で没したといわれているので、中村家は九百年の昔から二七代にわたり同一場所で居住して来たことになり、これは全国的にも珍しいのではないか。

四、簗屋・傘屋・桶屋・桐箱屋などは姿を消し、または、消そうとしてゐる。寂しい。越ヶ谷市（八奈市のこと）はどへへ行つてしまつたのか。

（高崎記）

越谷市・資料館都市構想

…資料館を将来のお荷物にしないために…

宮川 進

一 収蔵庫、資料館、博物館

越谷市にも郷土資料館が必要だと、よく言われる。しかし、本当に（貴重な市民の税金を使ってのそれが）必要なのだろうか。

県内でもほとんどの市町村が博物館、郷土資料館をもっている。しかし、それらの年間、利用者は何人いるのだろうか。それぞれの地元の歴史資料と、民具が展示されていて、たまに特別展があつて…、一年に何回も足を運ぶひとがいるのだろうか。

確かに、歴史資料、民具が散逸しないようにすることは大切である。しかし、保存しておき、たまに見学にくるひとがいるという程度であれば収蔵庫があればよい。それなら今までもあつたのだ。

博物館というと博物館法という法律があつて、いろいろ規制があるので、各市町村とも資料館設立に走つた揚句が、入場者数から考えると、民間企業ベースならとんでもない収支のお荷物が残つてしまつてゐる。

市町村の「ハコモノ」といっても、資料館というものは、設立したら最後、毎年、人件費、維持管理費など、相当のコストがかかるのだ。それは市役所が出してくれるのではない。市民の血税から支払われるのだ。それでよいのか。コストに見合う

成果があればよい。しかし、資料館はそれに耐える成果が得られるものなのか。資料館をもつということはそのあたりを考えに考えて、決断すべきことなのだ。

二 もし、設立するのならあらゆるプランを刷り合わせて

前述のような、切羽詰まった結論で「設立する」となったのであれば、その緊迫感に基礎をおいて、他の市町村には見られないような、独自性のあるものをつくるべきであろう。

まずは、考えられるあらゆる観点からのプランを含んだ複合的な施設とするべきではなからうか。

(1) 地域振興・都市計画のラインから…

現在の越谷市を考えると、都市として二つの問題があるかと思われる。その一つは市街中心地の空洞化である。もう一つは他からの訪問者を案内し、歩きまわれる魅力あるポイントがないことである。

この二つの問題をいささかでも解決するために資料館を使うことはできないだろうか。

(2) 高齢者の活性化のラインから…

高齢者の方々を活性化し、生きがいのある生活を送っていたために、資料館という組織を使うことができないだろうか。

(3) 市民の誇り・シンボルづくりの観点から…

能楽堂のように、どこにもある施設では市民の誇りにはな

らない。他市町村の人たちから「越谷？あのユニークな資料館のあるところ？」といわれるぐらいになれば、資料館が市民の誇りになり、また、それにより越谷市がユニークな都市になることもできるだろうと思われるのである。これが越谷市全体を資料館都市にするという構想なのである。

市民の税金を使ってつくとしたら、できる限りの計画の刷り合わせを行なうたうえで、つくるのが当然のことでしょう。

三 具体的プランとしては：

それでは、具体的にどのような「資料館」が考えられるだろうか。まず、アウトラインから述べてみたい。

(1) いまや、大資料館は必要がない。

現在、各地に存在する大型の「資料館」は必要がないと思われる。維持費、管理費も多くかかりやすいし、あらゆる意味で小回りがきかないのが致命的である。

(2) 小さい「資料館」を複数つくれば：

見学者がそれらを巡回していただくことにより、市内の活性化につながられる。市内に動線が描かれれば、その付近に、みやげもの店、食堂などができ、地域振興に役立つ。

(3) 競争原理の導入

一つだけの「資料館」では競争原理が働かず、サービスの向上もむづかしい。それでは困るのである。職員が一生懸命、見

学者のためにサービスしてくれる「資料館」でなければならぬ。複数館あれば、それらの間で、サービス競争が行なわれる。

(4) マーケティング手法を導入して：

何人ぐらいの入場者が見込まれるか、それを増やすにはどうすればよいのか、マーケティング・リサーチなどの手法を駆使して立地、テーマなどを決定しなければ、そのツケは市民に返ってくる。

(5) 人の気持を理解して：

いま、流行しているのは大人⇨カラオケ、子供⇨ゲーム：である。今後も多分、この人気はすたれることはないだろう。それは何故なのか。それを分析し、その人気をとりいれた施設にする必要がある。

具体案としては「資料館」複数建設プランを提示したい。大きい館は必要がない。小さい館を市内のあちこちにつくるといふことである。(一度にでなくてよい。徐々につくってゆけばよい)

たとえば、次のような館をつくってはどうか。

*三ノ宮卯之助資料館 ……当市出身の江戸時代・力持ちをテーマとする。

*越谷だるま資料館 ……当市名産の越谷だるまから、世界中のだるまをテーマとする。

*太郎兵衛もち資料館 ……当市名産の「太郎兵衛もち」という餅米、餅などをテーマとする。

***日光街道資料館**

…当市を貫通する街道の資料を展示するもの。

***石仏資料館**

…当市内に散在する石仏をテーマとする。

***越谷人形資料館**

…これも当市名産のひとつであり、歴史も古い越谷人形を展示する。

これらの館を統一デザインでなく、それぞれユニークなデザインで建設する。

上記の各テーマは、普遍的に興味をひくものであり、かつ、現在は他にはないものである。

これらの複数の資料館を訪問者に回遊してもらおうのである。回遊しはじめると「日本百名山」のように、人間の心理として全部回らないと気がすまないということになる。これが、「ツケ目」。そして、回遊コースが市内にできれば、食堂、みやげもの店ができる。それが市内の活性化につながる。

なお、次のような施設を附属させたい。

***文化財収納庫**

…収集した古民具等を収納する。

***セミナールーム兼ミーティングルーム**

…文化講演会等が開催でき、文化団体の集會に使用

***フリールーム**

…高齢者が交流し、生活エンジョイできるスペース。碁・将棋、カラオケ設備。飲み食い可能。

***ゲーム**

…子供たちにバーチャルリアリティゲームを楽しんでもらいながら知

識がえられる「場」とする。

四 運営と活用

(1) 運営

上記のような施設をつくっても行政が運営することになれば、結局、図書館の開館時間に代表されるがごとく、行政主体の都合となって、利用者の利便は後順位になってしまう。

そして、サービスの低下、慢性赤字は火を見るより明らかである。

民間ベースで赤字をださないように、倒産しないように、必死で頑張る運営がこのような施設にも必要なのだ。

すべてを民間に運営させるべきで、そうしてこそ、真の意味での市民の資料館の誕生となるのである。

(2) 活用

***資料館としての活用**

…来訪する人達に越谷市とその文化を紹介する

…市民に越谷市をより深く知ってもらう

…若い世代に越谷についての誇りをもってもらう

***新しい文化創造の拠点**

…セミナー、ミーティング、リハール、印刷、通信の基地

***市民の生きがい拠点**

…特に、熟年、高齢者が自ら運営し、集い、楽しむ拠点として

*街ウォッチングのルート…街あるきのルートの拠点として

複数館を配置する。

*地域振興の拠点

…滋賀県長浜市の「黒壁スクエア」

をモデルにしたい。歩き回る拠

点をつくれれば近隣にいきいきと

した商業施設もつくられる。

(3) 入場料

ここで、入場料金をどのように設定すべきかについて、考えを述べておきたい。まず、「公共施設だから」ということで、安易な「無料論」がでてくるであろうが、これは「経営無責任論」の隠れ蓑である。資料館が「いきいき」としたものであるためには、「有料」として収支バランスに市民も行政も過敏になる条件を設定しておくべきである。

よいものであれば、料金が高くても見にくられるが、無料でも面白くなければこないのである。

公共事業の「民営化論」がいわれていることは、民営化されれば、当事者が懸命に収支確保に努力するであろうということである。

入場者がすくなくれば、ボーナスはもちろんもらえない、給料もダウンする、いずれは閉鎖に追い込まれるという水際の経営を運営の基本精神としてほしい。

そのためには、収支が明確となる「入場料・有料」でなければならぬのである。

前記のフリールームでさえも、施設利用に見合う料金をとる

べきであることは当然である。

五 最後に…

「集客力」といえば東京ディズニーランドといわれるが、その集客をささえる一つはリピーターが多いことである。

資料館も、一回見るだけの市民を集めるだけではなりたない。同じひとに一年に何回も足を運ばせられるものでなくてはならない。そういうものにする計画がまず必要である。

また、ディズニーランドのもう一つの特長は「徹底した顧客志向」である。

遊園地と資料館を同一視するなどおっしゃるなら、まず、そんな考えそのものが間違いだ。ひとりの人が余暇を、どう使うかを考えるとき、遊園地も資料館も同一の次元にある。

市役所のライバルはない。しかし、資料館のライバルは多い。

だから、越谷市の資料館は東京ディズニーランドとも競争しなければならぬ。ディズニーランド以上の「顧客志向」を貫くことができるだろうか。

そんな決意をしてこそ、資料館をつくるべきである。そしてつくるからには「資料館で有名な越谷」にしたいものである。

史跡めぐりの記録

二六四回 向畑・大吉・弥十郎の石仏

記録 増岡武司

日時 平成十一年四月四日(日)

天候 薄曇

参加者 六十九人

案内者 加藤幸一

うす曇りやや花冷えのする天候のもと、総勢六十九名が参加、北越谷東口よりバスに乗車。超満員のバスにゆられながらも無事松伏に到着。ただちに堂面橋を渡り、かつて渡船場であった土手の上で加藤先生から今日のコースについての説明を受け全員元気に出発。

対岸松伏の桜を眺望しながら進み、堂面の観音堂を皮切りに旧向畑村に散在する多くの石仏・石塔をこの目で確かめ、そのあと途中、香取神社を横手に見ながら進み、山倉・藤原両神社及び向畑十観音、立野の庚申塔などを見て廻り、往時の人々の信仰の様子を垣間見ることができました。

次いで大吉の青龍山徳蔵寺では六十五貫の力石や道標を兼ねた庚申塔を見ることができ、本堂では天井伽藍や仏さま(如来・菩薩・明王)についての説明に参加者それぞれが理解して次のコースに回りました。

次は増林河岸跡に足を運び、かつて河川利用による当地の繁栄ぶりを偲びつつその足で大吉調整池東側路傍の文字庚申塔の所在を確認し、その後、予定を変更し古利根堰公園にて昼食をとり小休止の

のち白鷺橋を渡りキャンベルタウン・野鳥の森に到着。

園長の案内のもと園内を遊覧しぼし童心に返り体力を整え再出発。

逆川緑道の満開の桜の下を歩き東大沢に入り天満宮跡地を確認しつ

つ鶯代四谷天満宮に詣でその後、最終地点弥十郎地区に向う。

途中、観照寺跡で弥十郎の地名の由来を聞き、出羽三山供養塔等を

拝観、その後「やほ」の地藏堂・十九夜如意輪観音・弥十郎稲荷・

水神宮と廻り、昔この地に住んでいた人々の信仰のあり方を知ること

ができました。現地で解散式を行ない、次回秩父めぐりでの再会

を約し、一万数千歩歩いたほどよい疲労感を感じながら弥十郎より

バスに乗り帰路につきました。今回の史跡石仏めぐりは地元越谷を

深く理解するうえで勉強になりました。



越谷市・古利根川土手

第二六五回 春の秩父

日時 平成十一年四月二十五日(日)

天候 曇

参加者数 四十五人

案内者 野村勝八

秩父駅に降り立つと頂上までえぐり取られた武甲山の山肌が目に見え、飛び込んできました。武甲山を昼間ゆっくりと見上げるのが初めての私には山が人間の生活の犠牲になって泣いていると思いました。山々が若草色に萌え新緑とのコントラストが美しい限りです。

最適な陽気となり朝の雨が嘘のようです。

十五番札所の少林寺に詣で、野村理事より寺にまつわる話を会員の方々は熱心に聞き入り、その背に八重桜がひらひらと振りかかっています。

まつり会館の中の山車の華やかさ、宝来山へ向かうという意味では、ほーらいほーらいがホリヤホリヤと大勢の町衆の掛け声となり市街を練り歩き、夜ともなると日本三大曳山祭りの名に恥じぬ御走の大イベントとなることです。

秩父神社の荘厳な建物を拝観し、森(秩父)の人々は神々が住む神聖な場所(別意味あり)この地の人々が大事にしている何かがなくなく判かるような気がします。十六番、十四番、十三番札所をゆったりと巡拝でき、今日一日が穏やかにすごすことに感謝し、残りの札所巡りを近い日に必ずやチャレンジしようと心に念じ、明日の安らかな日々を願いつつ秩父路をあとにしました。

記録 山口美津江

二六六回 さきたまの鉄道展

日時 平成十一年五月四日(火)

天候 雨

参加者数 十五人

案内者 宮川 進

昨日の天気予報では今日は雨で風も強いとのことだった。

大宮公園駅では小降りであった。今日は博物館の休憩所で昼食をとるので、途中の弁当屋、コンビニ・パン屋などでそれぞれに買い求めた。飲み物は館内にあるとのことだった。博物館の門の横に弓道



秩父市・13番札所 慈眼寺

記録 佐藤光夫

場があり、高校生なのか若い男女が弓の競技をやっていた。

弓の引く姿はなかなか良いものだった。

門を入った右の所に縄文時代や弥生時代の住居跡と方形周溝墓があつて、案内の先生が当時の生活や、どうしてここに住居を建てたかの説明があつた。入館料は六五歳以上は無料で、ほとんどの人が無料入場券で入つた。

特別展示室は「さいたま鉄道展」で、埼玉県内に走っている初期の鉄道や使用していた物が展示してある。

常磐新線パンフレットがあり、工事着手・平成四年度、開業予定平成十七年度、路線は秋葉原〜つくば間五八・三Km、駅数二〇駅、所要時間約四五分と記してあつた。

常設展示室は七室あり、旧石器時代から現代までの埼玉における人びとのくらしと文化の展示だった。一つの展示室には武蔵武士を紹介している。そこに埼玉にある五つの国宝のうち、二つがここにあり短刀・太刀の二振で備前長船景光作だった。

昼食をとり、次の氷川神社へと歩き出したところで、鈴木先生がここまで来たら近くの埼玉護国神社があるのでと案内され、参拝してから氷川神社へ。氷川神社は格の高い立派な神社であつた。

境内にある奉納額を飾る所に、鈴木先生のおじいさんが書いたという額が飾つてあつた。

氷川神社の参道は一の鳥居から約二kmというが、人だけが歩く参道は一kmくらいで、参道の横に入った所に市立博物館がある。

特別展示として江戸の火消刺子が展示してあり、刺子の図柄や模様は粹に見えた。他の所は県立博物館を小さくしたようだった。

雨もたいして降らずに意義ある一日だった。

第二六七回 御岳山溪谷公

記録 加藤幸一

・日 時 平成十一年五月二十三日(日)

・天 候 晴のち曇

・参加者数 七十四人

・案内者 平川陽三

朝からとてもよいハイキング日和。南越谷駅を出発し、目的地の青梅線御岳駅に到着。風景が一変。周りは山に囲まれ、溪流の音が絶え間なく聞こえてくる。一見してちょっとした秘境に迷いこんだ感じ。天気にも恵まれて駅周辺は人々で賑わう。

急斜面の眼下には急流がみられる。多摩川の上流である。

ここから奥多摩の地も近い。下に降りると岩場の急流でカメラを操っている若者の姿があちこちに見られる。

溪流釣りを楽しむ人、テントを張って楽しむ家族連れや若者。

大自然の中でエネルギーに活動するそんな様子を見ながら、溪流沿いの遊歩道を上流に向かってハイキング。御岳美術館に到着。

二階玄関を入ると、萩原守衛の彫刻「女」が目飛び込んでくる。写真ではよく見る。教科書にも載っている。それを目のあたりに、そばには高村光太郎の彫刻「手」もある。

館内では椅子にすわりコーヒーや紅茶を飲みながら絵画をゆっくり觀賞できる。ベランダに出て大自然を堪能しながら紅茶を飲む参加者の姿がみえる。実にいい所に美術館があるものだ。

いま来た道を戻り、途中、釣り橋を渡って対岸に。森林浴を満喫しながら「袖の小橋」まで下る。ここで斜面にすわり下方では溪流、

斜め上方では樹木の間から見える青空をながめながら昼食。
溪流の音に混じって若者の甲高い声も聞こえる。

昼食が終わるとさらに下って次は玉堂美術館。玉堂紹介のビデオを見上げる一群、展示に見入る一群、アトリエのそばの枯れ山水の庭にみとれる一群。ここはかつて昭和天皇・皇后や現天皇ご夫妻も訪れたところ。

玉堂をあとにして北岸の「お山の杉の子散歩」とやらも通る。

最後の見学地寒山寺に到着。中田寒山寺より渡来の釈迦像がある。中国に行った気分を味わう。さらに沢の井酒造で説明つきの無料見学。おまけに名水百選で作られたお酒一瓶をタダでもらう。得した気分を最後に味わいながら沢井駅をあとにして帰路につく。とてもよい一日となった。案内の平川理事に感謝。



青梅市・御岳

第二六八回俳句夕日寺・金沢文庫・シーパラダイス

・日時 平成十一年七月二十五日

・天候 晴

・参加者数 八十二人

・案内者 宮川 進

朝から快晴、今日も猛暑になりそうだが、参加の皆さんには、暑さに負けない素晴らしい中高年パワーが感じられた。

金沢文庫駅で下車、称名寺に向かう。潮風が心地よい。

赤門をくぐり桜並木の参道を進み、古色蒼然とした大きな仁王門の脇を通過して称名寺庭園に入った。門の裏側に立つと称名寺の全景が眼前に広がる。大きな池に朱塗りの欄干の反橋・平橋が架けられ、正面に金堂、向かって右側に茅葺の釈迦堂、左側に庫裏が見え、深緑の裏山を背景にした美しい眺望である。

地元の方が、二人、絵を描いていた。

案内の宮川幹事の説明があり、皆さん熱心に傾聴される。

称名寺は鎌倉時代、金沢北条氏に帰依され菩提寺として栄えたが、元弘三年、金沢北条氏滅亡とともに寺運は衰えた。

金沢北条氏は古文書によると、下総国下河辺庄、その他六郷を所領としていた、といわれる。中世越谷との関係を示す「新方検見帳」は、貴重な資料として金沢文庫に残されている。

橋を渡り金堂・釈迦堂に参拝。近くにひっそりと立つ実時廟所、顕時・貞時の墓所に詣で、しばし往時を偲んだ。

次に県立金沢文庫へ入り、展示された金沢北条氏ゆかりの絵画・

仏像・古書とテーマ展の絵本徒然草を見学した。

海の公園南口駅から八景島駅に着く。夏休みで賑わう大通りを直進、橋を渡るとシーパラダイスである。あちこちで動く体感マシンが目に入る。ブルーホールが一〇七mから落ちるのを見て肝を冷やした。近くの食堂で海を眺めて昼食。

午後は水族館四階の観覧席でイルカショーを見物。「おでこぶるぶるシロイルカくん」の妙技に拍手する。終って世界の珍魚・怪魚を見学しながら一階へ降り、外に出た。

これで今日の予定は無事終了し、八景島駅より帰途につく。中世から一転現代、温故知新の史跡めぐりであった。

第二六九回 十八町至土寺

日時 平成十一年九月二十六日(日)

天候 晴

参加者数 八十一人

案内者 高崎 力

「相扶共済」の碑の前に集まった参加者は、残暑の日射しの中を平和橋の袂から葛西用水の遊歩道を下り歩きはじめる。

「今日の道は初めて歩くので楽しみだわ」

「おれの散歩コースだよ。あの橋まで七百mだ」
などの弾んだ声が聞える。

今の時期、葛西用水の水は落ちており川底には昔の船着場の立杭がみられ水鳥が羽をやすめている。土手側には三つの用水取入口がみえ、下流にはしらこぼと橋と新しい堰がみえる。

記録 一色英子

元荒川沿いを下り斎藤豊作の生家跡を通りすぎ、真大山大聖寺の惣門に至る。その昔、大聖寺は寺領六十石の寺格を誇る寺で、不動尊信仰の隆盛と共に大いに賑わった。さあ十方庵になった気分で惣門をくぐってみよう。「牡丹をくわへし辯子」をながめ、黒門、赤門、百庚申、北向不動をめぐり梅、松、タブ、樺、樟の木々をみあげてみよう。史跡の多い境内をくまなくめぐり、寺をあとにし、むかし賑わった門前町のたたずまいを思いうかべながら不動道を通り、八条用水にかかる馬頭橋まで進む。

「この川へは子供の頃、おやじと魚つりによく来たものだが、この不動道は知らなかったなあ」との声。

今より道幅が半分の田舎道は、子供心には印象のない道だったのだ



越谷市・谷古田河畔緑道

ろう。八条用水に沿って葛西用水の取入口まで上る。取入口近くに番小屋跡。「瓦曾根溜井防水記」の碑がある。

更に瓦曾根観音堂跡で碑や力石を見て、照蓮院の千徳丸供養塔をたずね武田家公胤千徳丸を偲んで史跡めぐりを終えた。

さて、瓦曾根溜井は多くの歴史を刻んでいる。詳しくは高崎氏などの資料で探ってみよう。そして時間があれば、鳥文齋栄之になった気分です。松土手の方をながめてみよう。

清々と湛えた水「上の河岸場」にもやう船の軋み、船頭の声、荷駄を負う馬の嘶き、馬喰の声が松風の中に聞えるだろう。

このコースは「郷土」を発見するおすすめの散策コースだ。

第二七〇回 秋の鎌倉 (一)

日 時 平成十一年十月三十一日(日)

天 候 曇

参加者数 五十四人

案内者 宮川 進

第二七〇回 秋の鎌倉 (二)

日 時 平成十一年十一月七日(日)

天 候 晴

参加者数 六十八人

記録 宇田川正治

案内者 宮川 進

秋の鎌倉、「頼朝没後八百年」に参加しました。

鎌倉駅西口を出て直進、今小路へ出て北に向かって四百mほど行って線路際に出た所で、西に折れて二百mほど道なりに進むと、寿福寺の外門がありました。臨濟宗建長寺派で、龜谷山寿福金剛禪寺という。近くに八坂神社や源実朝、北条政子の墓がある。合掌して次のコース小町通りを橋切り、鶴岡八幡宮に参拝し戻る。

東へ通りに沿いながら大蔵幕府跡に進み、その道路の両側に民家がある(終戦時、外務大臣秘書官の住居や有名な画家の家もあり)。家並びを眺めながら、来迎寺および頼朝の墓と荏柄天神(菅原道真相殿・八雲大神・熊野三柱神社)に参拝しました。

次に大塔宮方面に向い、道向かいの鎌倉宮の前庭で昼食、休憩をとりました。

食後、鎌倉宮に参拝し、本殿と護良親王の幽閉された土牢の薄暗い中を見物。一周して拝殿まで戻りました。鎌倉宮を見学中、皆さんと離れてしまい、地図を頼りに追いかけてきました。

永福寺跡でやっと追い着き、皆さんと共に説明を聞きました。

当時の総門跡があり、入ると左の山裾に多宝塔、中央に本堂、二階大堂、左右に脇堂・阿弥陀堂・薬師堂、前面には広大な苑池がひろがり、その他、鐘楼・三重塔などから壮麗な大寺であったと思われる。坂道を登りながら、瑞泉寺に到着、参拝しました。

元の大塔寺方面に戻り、大塔寺バス停に着き、間もなくバスが来て鎌倉駅に着きました。

小町通り買物をし、休憩のあと、大宮行きの快速にのり、南越谷駅に六時ごろ着きました。

第二七一回 湯島から根津へ

記録 若松清一

・日時 平成十一年十一月二十八日(日)

・天候 晴

・参加者数 八十四名

・案内者 野村勝八

最初に訪ねたのは湯島聖堂。小生は毎月一度、湯島をおとずれ、志實先生の漢詩朗読と石川先生の聖社詩会で、拙詩のご指導をいただいている。湯島聖堂で案内人のご説明をいただいた後、聖堂を辞し湯島天神を訪ねる。

坂道を登りながら、ご婦人たちのお姿を見すると、皆さんお元気な様子で、その健脚ぶりに感心する。

建築家の小生にとって日本古来の「木の文化」を象徴する純木造の建築はなつかしく親しみ深い。久しぶりに訪ねた湯島天神の新社殿は総檜木の権現造である。新社殿は樹齢二百五十年といわれる木曾松を使用しているという。感慨ひとしおである。

ご祭神は天之手力雄命と菅原道真公である。道真公といえば「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花、あるじなしとて春な忘れそ」のお歌が心に浮かんでくる。江戸庶民の学問の神様として尊敬されている。

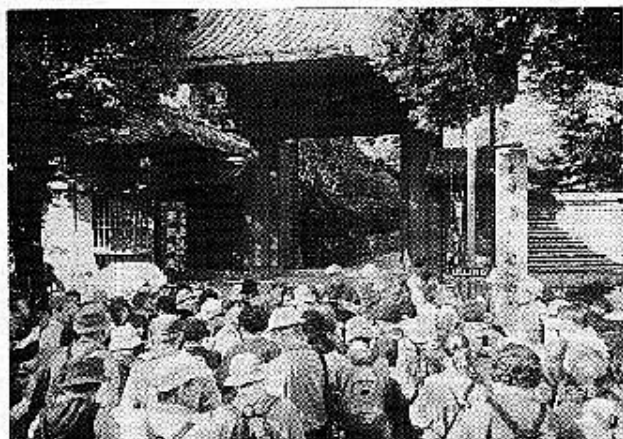
湯島天神の拝養を終えると本郷三丁目を通り東京大学にいく。

本郷三丁目には「かねやす」という古い古いお店があり、「本郷もかねやす」までは江戸の内」と案内のプレートが目につく。赤門をくぐり落葉を踏みながら奥の三四郎池にゆく。ここで昼食となる。

午後は文京区の根津神社を訪ねる。参道を歩き山門をくぐると、

壮麗な雰囲気の中に、権限造りの本殿が見えてくる。

本殿に拝養し、絢爛豪華な社殿や重要文化財にも指定されている櫻門を拝観する。日本古来の木造建築のすばらしさに感慨ひとしおである。いつか独りで訪ねて来てゆっくりと拝観しようと心にちかい、根津神社を辞去する。



文京区・湯島聖堂

第二七二回 中忠臣蔵遺跡めぐり

記録 鈴木徳治

・日時 平成十一年十二月十一日(土)

・天候 晴

・参加者数 八十二名

・案内者 宮川進

第二七三回 浅草七福神めぐり

記録 古谷京子

日時 平成十二年一月三日(月)

天候 晴

参加者数 一一六人

案内者 山田政信

本年は、西暦二〇〇〇年という節目の佳き年に、新年恒例の七福神めぐりを企画していただきありがとうございます。

私もぜひ参加しようと去年の暮より指折り数えて待っておりました。日頃から心掛けのよい皆様の集まりですので、天気は日本晴れ、気温も早春の暖かさでまさに七福神めぐりの日和でした。

参加された会員のお顔は、新しい一年の出発点であり、いきいきと輝やき、希望に満ち溢れておりました。

正月の三日であり、浅草寺への初詣での人と重なり、仲見世など混雑を予想していました。時間の早いこともあり浅草寺はスムーズに参加することができました。

参拝する皆様の足取りはリズムに乗って軽く、それぞれ楽しそうにお話などしながら次々と神社を回りました。

私も、会員の皆様と一緒に縁起の良い七福神めぐりに参加することができて、本年もきっと素晴らしい年になるような気がします。

各神社で参拝する際には、先生から神社建立の由来などの説明を受け、日本歴史に対する興味がいっそうわいてまいりました。

これも史跡めぐりの計画にあたった各先生方の行き届いた事前調査などのおかげであると感謝しております。

義士の討ち入りの日を三日後に控え、大河ドラマの元禄縁乱最終回の前日というタイミングの良さもあって、集まった会員はうきうきとしていました。案内役の宮川幹事さんの、元禄縁乱を見ていますか？との問いに、ほぼ全員が見ていると答えたのを見ても、今回の企画の人気のほどがうかがわれました。

初めに訪ねた浅野内匠頭邸跡は、築地聖路加病院でした。

この病院には、以前、何回か来たことがありました。まさか浅野家の屋敷跡とは今回初めて知りました。東京駅の近くにあって伝奏屋敷の説明を聞いた後、江戸城松の廊下跡を見るべく、大手門から皇居東御苑へと歩みを進めました。皇居へ入るのは初めてのことなので、何もかも珍しく感動的でした。台地状の道を暫く歩いた所に松の廊下跡の標識があり、目の前の広場に、白書院・黒書院の建物、彼方の天守閣の石垣との間に大奥の建物群があったとのこと、この辺りが江戸城の中心部であったことがうかがわれました。

内匠頭終焉の地を見てから本所吉良屋敷跡へ、現在はビルの林立する一隅にその跡を留めているに過ぎない、宮川幹事さんの説明で、目前のビルを消し、テレビで見た吉良屋敷の建物群をイメージすることができました。

泉岳寺を後にする頃、冬の日は暮れなずんでいました。

最後に水野監物屋敷跡へ。水野屋敷の一部といわれる路地の角に、義士九名切腹の地の標識がありました。

翌日、テレビで放映された元禄縁乱最終回の最後の場面に、ここが映し出されたのを見たとき、参加して良かったと感じたと同時に、歴史に残る出来事の現場に立って見るこの意義を改めて感じた次第です。

今戸神社は、縁結びの神様と聞き、私にも娘がおりますので、良きご縁に恵まれますよう、合わせる手に力が入りました。

石浜神社は、隅田川名勝八景の一つと言われ素晴らしい眺めでした。橋場不動院は、江戸時代の建築様式を保った簡素なたたずまいでした。のどが乾いていましたが、暖かいお茶を頂き、一息入れることができました。

鷲神社は、暮のテレビなどで酉の市として紹介しているのを見たことがあります。熊手などを売る華やかな風景でした。

参拝して思ったことは、テレビのイメージと異なっていることです。会員の皆様も休憩をとられ、この神社で頂いた甘酒がとてもおいしく、足の疲れがいったのではないかと思います。

帰路、ふたたび浅草の街へ戻りました。午後は初詣での人で大変な賑わいで、活気に満ちておりました。

今回の七福神めぐりは、多数の参加者にもかかわらず、一人の落伍者もなく無事終了しました。ありがとうございました。



台東区・待乳山聖天

第二七四回 源休公台・清満徳心寺（バス）

記録 鈴木タカネ

日 時 平成十二年二月二十七日

天 候 晴

参加者数 六十九人

案内者 平川陽三

何より晴天に恵まれ、風もなく、それだけでも明るい気分の見学旅行となった。まずは満徳寺。幕府公認の縁切寺は、ここ満徳寺と鎌倉東慶寺の二つだけ。今のお寺は平成四年十月に資料館とともに八億二千万円かけて復元、「昔は何人位の方が駆け込まれたのかな」と話し合いながら裏門を出ようとしたところに「駆け込むのにも三両のお金が必要」なことが書かれてあった。

「誰でも三両必要となればお金持はどこまでも助かるが、貧しい者は泣寝入りとなってしまふ、今も昔も変わらないね」

「本当にそうだったろうか」

「やっぱりお金がなくても、庶民はみな駆け込みできたのよ」

とお互いに善意な方へ解釈してしまう。今は嫌な事との縁切りで訪れる方が多い。資料館で菱紋の多くあるのに驚く。拝見したことのない菱紋。時代と共に形状も変化し、美しく図案化されたご紋、「わああ素敵、あの紋イヤリングに良いわね」。

と早速声が飛び出してくる。女ならではの発想だ。

次は洪沢栄一記念館。二階建、一階も二階もよく似ている。

中央は多目的室、両側は小室となって、幼児室もある。先のことを考えて造られたなあ。

昼食の「さしみ定食」を落着いて味わって美味しく頂きました。

洪沢栄一の生家、午後一時十分～一時五十分、お庭には若き日の栄一像が刀を左手で左腰より立て、右手は笠を下げ、足は少し開いて立っている像は、お家を守っているかのようにも見える。

厚みのある屋根、何となく丸味も感じ、家全体が穏やかに見える。家の裏にある大きな木々とともに屋敷全体が落着いている。

日本煉瓦製造(株)資料館。この丸い窓が活動している時に見たかった。火が消えないと人間の方も休みなし。

人間が窯に使われていると同じ、配合より出荷までの製造工程も見なかった。

最後は東京駅と同じスタイルの深谷の駅舎を窓より眺めた。人が動いている姿が見えた。土地の人がやっと思えた。



群馬県尾島町・満徳寺

第二七五回 旧増林村の石仏

記録 高橋正澄

・日 時 平成十二年三月二十六日(日)

・天 候 晴

・参加者数 六十七人

・案内者 加藤幸一

九時半、一行は旧大吉村の鎮守香取社跡を出発、増林河岸跡から前波の水神社へと歩を進めた。当社には菅門品供養塔に刻まれている道標「東・子安観音道」がある。この子安観音は林泉寺に安置されている。

途中、往時、河岸を差配されていた平野家の墓所から、ナズナ、ホトケノザなどの咲く古利根川堤の早春を愉しみつつ、林泉寺へと向う。まるで、北への帰りを忘れたかのように、川面に跡を残して遊ぶ夫婦鴨が、妙に愛らしかった。こんなのかな風景が、越谷にもまだ残っていた。

林泉寺では、関根家始祖の五輪の塔が印象的であった。主君朝倉氏とともに生きた祖先の栄光と悲哀が伝わり、無情な時の流れを痛感した。帰路、私の恩師の墓前にて合掌、寺裏の地藏尊から透閑山跡に参り、昼食の目的地、天神社に着いた。

昼食時、はからずも、地元自治会のご厚意による豚汁のご馳走に、舌鼓を打ったのも、忘れがたい出来事である。

このたびの史跡めぐりの圧巻は、なんといっても、小川家秘蔵の円空仏、不動明王座像の拝観であった。一m余の不動明王の発する視線「天眼地目」は、円空の心の叫びが伝わってくるようで、その

迫力に圧倒された。

また、増林の山本泰秀氏が発掘された弥生式土器の破片、九百余点を、ご厚意により参加者に公開していただいた。破片、一片一片にひそむ先人の生活の温もりが感じられ、心に潤いを授けられたような気がした。

その後、勝林寺の十三仏板碑や明覚禪師の文字庚申などを拝観、白山社を経て、新方川堤下の土器採集地を見学、花田のスマツカラ地蔵尊などの拝観を最後に、三時すぎに解散した。

このたびも、また、加藤幸一先生の明解なご案内で、古利根川沿いの増林の自然や石仏を通した先人の心に触れることができたことに感謝している。



越谷市・増林河岸跡

第二七六回 花の千鳥ヶ淵を歩く

記録 鈴木秀俊

・日時 平成十二年四月二日(日)

・天候 曇

・参加者数 七十八人

・案内者 山田政信

越谷駅を出発して約一時間、地下鉄九段下駅で地上に出る。

まず近くの蕃所調所跡の碑と、愛国婦人会発祥の地の碑を見学して九段坂を上る。前方の金色に輝く常燈明台、左に牛ヶ淵堀の美しい景色を眺めながら桜並木の下を田安門に向う。

今日は、四月としては少々寒さを覚える花曇り、桜の花は二分咲きぐらいであるが花見の人数は多い。お花見も目的である史跡めぐりには、ちよつと残念であるが参加の皆さんは、いつもと同様、結構楽しそうである。

田安門は徳川御三家の威光を今に残す、古色蒼然とした大きな門で見学者を圧倒する。門の左脇の高台に上ったが、林立するビルに遮られて昔の眺望も今はなく、いちよつうの老樹が歴史を物語るように立っていた。

北の丸公園は広大で清水門が遠望された。広場に立ち山田先生から徳川忠長の悲運な生涯について説明を聞く。

近くの武道館は、東京電機大学の入学式で賑わっていた。都心では珍らしい静かな林の中を暫く行くと、国立近代美術館工芸館がある。この建物は元近衛師団司令部で、明治の香りを残す今は少ないレンガ造りである。

千鳥ヶ淵公園は花見客で賑やか。ここで花見気分の日食。

午後は内堀通りを半蔵門前まで散策、周辺の美しい風景や国立劇場を眺めて引返し、桜の下を千鳥ヶ淵戦没者墓苑に向う。

笙・ひちりきやかな音色に導かれて御門を入ると、広場では盛装した御婦人達が茶の湯を奉納されていた。墓苑をあとに最後は増田神社。護国の英霊を祀る神社には、人それぞれ深い思いがあるう。

私は桜の花に「同期の桜」を歌った若い唄が思い出された。

平和な時代の楽しい花見に幸せを感じる。参拝を済まし参道に出て解散。九段下駅より帰途につく。

第二七七回 山石樹楓

記録 古田美雄

・日時 平成十二年四月二十三日(日)

・天候 晴

・参加者数 七十五人

・案内者 大村 進

岩槻駅前で岩槻にくわしい本日の案内役の大村氏が紹介される。駅ちかくの大櫓(おほやぐら)に着く。途中五箇角、高さ一・五mほどの石柱に丹後町と刻まれている石柱について説明がある。これは旧町名で、住居表示変更により、旧町名がほとんど変わった。

旧町名の多くは生活に密着した名であった。それを忘れぬために建てたという。澁江町、市宿等々がある由。

大櫓とは岩槻城防衛のため延々八軒に及ぶ高さ六mほどの土塁で、城と町を取り巻いている。戦国時代末期に造られたといわれている。

現在は大部分が取りくずされているが、ここ愛宕神社周辺にわずかに残っているのみという。

駅前の東玉会館で人形の町の話を聞き、木目込人形の製作を見学。ついで芳林寺に至る。永禄十年八月、上総・三舟台合戦で討死にした岩槻城主太田氏資の供養塔、洋画家(裸婦の田中)田中保(一八八六〜一九四一)について説明を受ける。

次の市宿に向う。ここでは「市」が慶長の頃には開かれていて、木綿など取引があった記録があるという。

市神様の前にある市内で初めての鉄筋コンクリート造(昭和五年)旧警察署を改修した郷土資料館を見学する。

やがて遷番館につく。茅葺き平家建四〇坪ほど、「岩槻に過ぎたるものが二つある、児玉南柯と時の鐘」といわれた南柯の私塾で後



岩槻市・龍門寺

に藩校となった。藩校で現存するのは、ここだけといわれている。「時の鐘」に行く。前回、来た時に較べよく整備されている。現在も朝夕二回、人力により、市民に時を知らせている。

岩槻公園旧新曲輪の生涯学習センターに至り昼食となる。午後は城跡公園内の、空堀の「堀障子」「折れ」などを見学する。

これは、大橋と共に北条氏特有の築城技術とのこと、続いて城門と裏門の変遷について説明を聞く。

東武線々路を越え、長い参道の市の総鎮守の久伊豆神社につく。本殿の手前右に神楽殿あり、いろいろな扁額が奉納されていた。

御成街道を経て玉峰山龍門寺に至る。岩槻城主大岡忠光の墓がある。その墓碑の銘文は、兵学者山県大貳による。

大貳は幕府の忌諱に触れのちに刑死した。幕府を恐れて、その名はけずられているなどを見聞して、一日の行程が終る。

第二七八回 葛飾区郷土と天文の博物館

日時 平成十二年五月五日(金)

天候 晴

参加者数 三十八人

案内者 高崎 力

越谷駅九時集合。ゴールデンウィークの中日、絶好の行楽日和。

越谷出身の江戸力持「三ノ宮卯之助」を含む特別展「怪力伝説」の団体観賞に参加する。今回は事前申込不要。参加者が少ないかと思いきや、大勢の方が集まっていた。特に男性の方が多かった。

記録 竹谷フミ子

久し振りの参加でちょっと不安だったが会長さんはじめ、馴染みの役員の方々の笑顔に接しほっとする。

東武牛田駅下車、京成線に乗換え、お花茶屋駅で下車徒歩十分弱で目的の葛飾区郷土と天文の博物館に到着する。

環境の良い所にあるりっぱな施設という印象。五月五日は入館無料。入館料は自己負担の積りでいたが何か得をした気分であれしかった。

この博物館はりっぱなプラネタリウムがあり、最初に七〇ミリ全天周映画「煌めきのなかで水と光の島根路」を観せて頂く。

星座のなかったのが残念。すごい迫力でちよっと眼まいをおぼえた。その後、特別展と葛飾区郷土の展示を観る。

三ノ宮卯之助の銘がある「力石」は越谷だけでなく、県外にもあちこち実在する。学芸員の方の説明は熱心で適切。三ノ宮卯之助に関して、展示が少ないように思われた。

我が越谷にもかつて、このような有名な人がいたことを、ちよっと誇らしく感じた。

普段はできない学習体験をさせていただき、有意義な半日だった。現地解散となり、それぞれ帰途についた。

第二七九回 田園調布・上野野毛

日時 平成十二年五月二十八日(日)

天候 曇のち晴

参加者数 八十八人

案内者 宮川 進

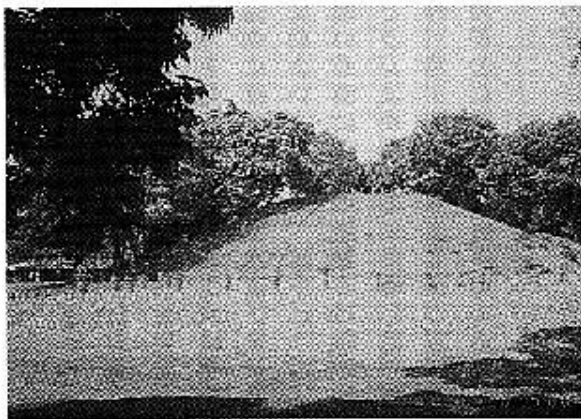
記録 堤竹安吉

就寝前から明日実施当日の天候が心配でした。テレビの気象情報によれば、当日は、関東一円一日中大雨予報であり、実施の是非について不安が付き纏い天候事由の欠席電話が何件かあったほどです。当日午前三〜四時頃は、屋内に響く大雨が降りしきり、心配は高まるばかり……。ところが、幸運にも自然の恩恵のお蔭で午前七時頃は雨は止み、駅前参集場所に参加申込者の殆んどの方々が集合し、参加者の熱意が如実に感ぜられました。東急東横線多摩川園駅近くの浅間神社古墳・亀甲山古墳・宝来山古墳を散策し、多摩川の遠景や緑の樹木にも恵まれ、自然林を堪能できたことは、心底感銘せずにおられませんでした。等々力溪谷や近隣の澄んだ自然環境は、私の数十年前からの渴望の場所で、実現できたことは本当に有難かったです。都心にあつて、あの様な自然景観観賞を成就し得たことは此の上なく、越谷市内で規模的にも味わい難い自然情景と存じます。

時折、新聞・テレビでもおすすすめコースとしてPRしており、何れ又、個人的に探訪させ頂こうと思えます。

今回の道程は、約十km内外でしょうか。

石段や登り下りの道も多く高齢者の方々の安全無事を祈念しており



世田谷区・野毛大塚古墳

ました。各位のご尽力で全員無事帰宅できたことを心から喜び合いたいと存じます。

高級住宅街で有名な大田区田園調布界隈でこの様な立派な古墳群や溪谷の自然景観の観賞散策をさせて頂き非常に勉強となりました。ご指導引率者の宮川進先生に対し、ご熱心な参加者を代表して感謝申しあげたいと存じます。

第二八〇回 E.A.遊園 ライン下りとSL

記録 山梨隆司

・日時 平成十二年七月二十三日(日)

・天候 晴

・参加者数 八十一人

・案内者 宮川 進

沖繩の慰霊の旅で疲れた七月廿日、会員限定の懐かしのSLと、長瀬ライン下りと粋な趣向にまけて参加。見渡す限りの、まぶしいほどの稲の波、秩父の山肌よりの緑を眺めながらの舟下りと、今は懐かしいSLの旅、会員もその魅力に引かれ、私同様参加したことと思う。

浦和で乗り換え時、駅の温度計の針が三十二度、湿度六十度を指していた、いやな予感がする。

秩父鉄道、武川の付近は、広大なる緑なす水田、まず暑氣払いの期待にそい、皆にこにこ顔。樋口駅で下車、炎天の中の登り下り、日本最大の青石塔婆の偉大さと、先人の努力に畏敬の念を覚える、クレーンなどないのによくぞここまで運び建てたと！

次に金崎古墳群に向う。秩父盆地の暑さは生半可ではない。皆の表情が険悪になる。シャツはしぼれるほど濡れる。

瘦身な鈴木先生も、一年の汗を今日一日でかいてしまったと！

親鼻橋よりライン下り。暑さのためか六名未到着、先の船は廿名ずつ三杯で先に下る。まわりを見渡すと、S.L.が鉄橋を真っ黒な煙を吐きながら通過する。諸々には、カヌーや水遊びをしている。やっと到着した四名と共にいよいよ舟下り、途中三ヶ所で、水がぶりがあり納涼の気分を味わい長瀬に着く。岩畳で日蔭を探し昼食。

熊谷では三十七度四分とラジオが報じていた暑い訳だ。昼食後、宝登山神社に参拝。宮川先生から宝登山の説明あり、名前の由来は湧水池にあるとのことだが、私は古事記のホトを想い出す。不良老人。

長瀬駅より今は懐かしのS.L.に乘車。途中、一天俄かにかき曇り、篠突く雨と雪。舟下りの時でなくて良かったと！

十八時、この炎天に一名の落伍者もなく無事越谷着。これも宝登山神社のお蔭か？

案内の宮川先生、ご苦勞様、暑かった暑氣払いだった。

第二八一回 日日光（バス）

・日時 平成十二年九月二十日（水）

・天候 晴

・参加者数 六十六人

・案内者 野村勝八

記録 青山栄吉



今日は史跡めぐりで日光へ行く日だ。まだ秋の気配ではないが天気もよく行楽日和だった。参加者は南越谷駅前まで観光バス二台に分乗して南越を出発。日光へ向った。車内は静かで、窓の外を流れる風景を見ながら寛いだ時間を楽しんでいる雰囲気だった。

ご夫婦の参加者も結構いたが、全員の男女比率はやや女性が多いという構成。道路は空いていた。バスは快走を続け十時には日光に到着した。全員、輪王寺の前で記念撮影をした後、東照宮、陽明門など廻る見学コースについて説明があり行動に移った。

説明の中にクイズがあった。配布資料の表紙に掲載された二枚の写真の彫刻は何という王かを当てるものだ。このアイデアには「最後まで興味を失わずにコースを廻りましょう」という案内者の配慮が感じられた。

私は日光は初めてだが、建物や各建物に施された彫刻、天井に描かれた絵画などを目のあたりにしたとき、人間の力のすぐれた技を感じた。これらは幕府が大勢の人員を動員して進めたものであるが、幕府の要請に応えた職人の技は立派だったと実感した。

家康が自分を祀る場所として日光山を選んだ理由は説明資料で初めて知った。死後も大名支配に役立つ内容が感じられ、やはり偉大な人物であったという思いを深めた。

大谷寺博物館で縄文時代の人骨を見ていたとき、女性が「この人の歯は一本も欠けていない」といった言葉が耳に入った。

あらためて見るとそのとおりであり、人の着眼の多様を実感した。見学コースは山の中のため上り下りの階段が多く結構疲れた。

満たされた気分の伴なう疲れであり、有意義な一日だった気持ちで家のドアを開けた。

第二八二回 北条時宗の 備前合戦

日時 平成十二年十月十四日(日)

天候 曇

参加者数 二十五人

案内者 宮川 進

第二八三回 市川を歩く

日時 平成十二年十一月十九日(日)

天候 晴

参加者数 五十九人

案内者 小原勘三郎

本八幡駅より不動院へむかう道すがら、この辺の地理に詳しい鈴木種雄さんに、八幡の「蕨知らず」ほどの辺かと思われた。

交差点を歩きながら右の方を指し、向こうに見える市役所付近にある森がその跡で、わずかに百坪くらいのみ……。

裏道へはいり、閑静なところに不動院がある。本堂は小規模ながら、寺内はきれいに掃き清められ、気持ちが良い。

案内者小原氏の説明があり、暫時休憩。いまだ道をもどり途中を裏道へ。やがて広い木立ちの中に葛飾八幡宮の社がある。

七五三の親子連れが幾組かお参りしており、記念撮影に余念がない。この地方は梨栽培農家の多いことで知られている。

この八幡宮境内で梨園を開いたのがはじまりとは知らなかった。

記録 西田 茂

随神門を出て休憩。

京成中山駅をでると法華経寺参道への門前町入り口。なだらかな上り坂を経て山門を通り、祖师堂周辺で昼食をとる。

午後、境内の由緒ある建築物を一巡。裏山頂上にある聖經殿（国宝と文化財の保管庫）の前で小原氏の説明がある。

法華経・日蓮の主張・竜の口の法難を交え、話は尽きない。陽がかけり、いくらか風も出た。風を避けて後方へ移動した人も多数いた。話は爆弾三勇士まで飛び出しやがて終わった。

山を下り、本院を参観、休憩し、山門をあとにした。

今回の史跡めぐりは、穏やかな気候に恵まれ、南越谷駅へ全員無事帰着。有意義な一日を楽しく過ごせた。



市川市・法華経寺

第二八四回 蒲生土

記録 小原勘三郎

・日時 平成十二年十二月三日（日）

・天候 曇

・参加者数 八十一人

・案内者 高橋正澄

「むかし、木のほりをすれば、千住のお化け煙突がみえました」
皆さんからおどろきの声があがる。

ここ蒲生一里塚は、けやき・銀杏の大き木がしげり、愛宕社がまつられている。地元では、一里山とか愛宕様とよんできた。

今日はくもり空のなか、おおせいの方が参加した。市内めぐりには、皆さんの関心が高い。女性が半数をしめる。

藤助河岸は綾瀬川にのぞみ、大正期には年間の回漕高四万駄という。物流センターの役割を担ってきた。

鉄道の発達により、その地位をゆずった。
いまは母屋・石垣・倉庫にむかしの繁栄をしのぼせる。

蒲生うまれの高橋氏の説明には、生活の実感がある。
中尾医院の裏には、中尾宗庵の筆子塚がある。幕末ごろ、医業のかたわら寺子屋をひらき、門弟五百人余をだした。

村びとから「宗庵さま」と尊敬された。

「私どもでは、幕末から芝居の小道具の調達をしています。
いまはすべての劇場・テレビ局に提供しています。本社は浅草です」

藤浪小道具の専務さんの話は歯切れがいい。
五棟の倉庫には、時代劇・現代劇に区別され、歌舞伎は外題ごとに

箱におさめられている。

日ごろ、目にできない楽屋裏に、皆さんは感嘆する。

茶屋通りに、蛙のような石塔がある。地元の人「ぎょうだい様」とよんでいる。砂利供養、宝暦七年（一七五七）と刻まれている。日光道修復の記念碑である。

清蔵院山門は、寛永十五年（一六三八）、東照宮造営に動員された工匠が、世話になった札として建立した。

綾瀬川ぞいに久伊豆神社が鎮座している。この社の分布は武蔵七

元の野与氏の支配地とかさなる。同氏の氏神とみられている。

元禄十三年（一七〇〇）の庚申塔、大正八年の力石が境内にある。

このほか虚空蔵堂・油屋・大熊家・中野家をめぐると、数kmほどの間に、土地にまつわる由緒が今に伝えられている。



越谷市・綾瀬川土手

第二八五回 隅田川七福神めぐり

記録 水上 清

・日 時 平成十三年一月三日（水）

・天 候 晴

・参加者数 一二一人

・案内者 山田政信

新春恒例の「七福神めぐり」も今年で十二回目を迎えた。

穏やかな小春日和に恵まれ、絶好の巡拝日和である。

午前九時、越谷駅前集合、谷岡会長のご挨拶の後、すぐ鐘ヶ淵へ

向かう。鐘ヶ淵駅前では山田理事から七福神に関連して初夢・夢枕

・夢折願のお話を伺い、巡拝のスタートを切る。

狭い住宅商店街を北へ進むと十分ならずで、墨田区最古で茅葺き

の山門をもつ毘沙門天の「多聞寺」に着く。境内の「狸塚」「映画

人の墓」にも詣でる。

都営白鬚高層住宅群や榎本武揚像を右に見つつ墨堤通りを下るこ

と約一、五kmで寿老神の「白鬚神社」に到着。汗ばんでコートを脱

ぐ人も見える。本殿前の狛犬に奉納者の吉原「松葉屋」や「八百善」

の文字を探す。嘉永元年製の重量三百貫の豪華な大神輿と江戸末期

の獅子頭二体が展示されている。

道を左へ少々進むと「向島百花園」、福祿寿詣でに長い列。

冬桜の「こふくざくら」が白花をつけて見頃で、早咲きの白梅一本

も小春日をあびてちらほら開花していた。墨堤通りに戻り、約一、

五km下った隅田川沿いの一面。「言問団子」前の「墨堤桜榎之碑」

を見て、弁財天の「長命寺」に至る。

文人墨客の残した碑が目立つ。土産に「桜餅」を買う。

隣は布袋尊の「弘福寺」、東京では珍しい黄檗宗の寺、禅寺らしい山門をくぐる。脇に石の翁媪尊の祠、咳の爺婆だそうで、よく効くとの誘いに「せき止め飴」を買う。

二百mほど進んだ隅田川ぞいに「三囲神社」がある。恵比須と大黒の二神をまつる。参詣の長い列、ここにも句碑・歌碑の何と多いこと。天気にも恵まれた散策気分はここで終り、山田理事の締めくくりのお話と会長のご挨拶があつて、午後一時半、解散となる。二十一世紀を迎えた初の正月、「今年こそは良い年でありませう」と祈願する善男善女で、どこの寺社も賑わっていた。

第二八六回 北条時宗の鎌倉倉

記録 高橋 清

・日時 平成十三年二月二十五日(日)

・天候 晴のち曇

・参加者数 五十三人

・案内者 宮川進

北条時宗の舞台、鎌倉の史跡めぐり。予定にしたがい、まずは、円覚寺へ。時宗の建立。地形をうまく利用した階段状の境内。元軍来襲のとき、時宗二十三歳、再度来襲のときは三十歳、三四歳で没。その廟所が仏日庵である。鎌倉北条氏が時宗の家系で、後年、越谷市域にでてくる小田原北条氏は別の家系である。

つぎに東慶寺。時宗夫人の開山。男子禁制の尼寺。いまは男僧寺。

豊臣秀頼の遺児国松八歳は、家康の命により京都六条河原で斬られる。息女七歳はこの寺に入れられた。修行をおえて天秀尼となり、二十世

の住持となった。小道をのぼると墓があり、西田幾太郎・和辻哲郎・高見順・安倍能成・田村俊子などの有名人が眠る。墓石は小さく質素である。昨今、越谷の諸寺に建立した大墓石はない。

浄智寺へ向かう。開基は時頼の子宗政・子の師時とつたえる。

江戸時代にはいると、鎌倉は農漁村となつてさびれ、寺院のおおくは繁栄をうしなつた。大正十二年の関東大震災で浄智寺・東慶寺は倒壊した。その後、現在の姿に修築された。

名月院に登る。第五代執権時頼の墓所あり。四季おりおりに咲く階段状の庭園がある。曇天の寒いなか、ここで昼食をとる。

休む間もなく出発。

建長寺へいそぐ。小雪降り、またやむ。時頼の坐像あり。

境内には柏楨(びやくしん)の太木七本あり。高さ十三m、樹齢七三〇年という。この地は創建まえば地獄谷といい、処刑場があつたそうだ。

平成十年十二月、本会はここで参禅・食事の作法をうけた。ケンチン汁は建長汁のことだという。

円覚寺へ向かう。境内の古梅の花は見事なり。本尊は閻魔大王と十王が祀られている。恐ろしい顔をした閻魔様、こどものころ、嘘をつくとき舌を抜かれるという話を思い出す。

最後は鎌倉八幡宮、すでに何回もきているところだ。鎌倉宮の創建は前九年の役におもむいた源頼義の時代で、奥州を平定の際鎌倉へ帰り、源氏の氏神とした。その後、頼朝は関東の総鎮守として帰依した。

帰りは三ノ宮卯之助の力石をみて、小町通りを鎌倉駅へすすむ。

点呼をとり、東京行きの電車に乗った。東京駅で京葉線ホームへいそぐ。大深度ホームに着くまで大エスカレーターで三回降りる。初めての道程。武蔵野線で全員無事、南越谷駅で下車、解散した。

アンケート

会員の皆様から、子どものころの「あそび」についてアンケートをいただきました。(順不同)

①子どものころの「あそび」

②あそびのよび名「めんこ」「鬼ごっこ」「かくれんぼ」「おてだま」

③じゃんけんの「よび名」と「かけ声」

氏名	子どものころのあそび	めんこ	鬼ごっこ	かくれんぼ	おてだま	よび名	かけ声	地方・地域
小島 誠	けだし(石けり)・悪口のけんか	パー	鬼ごっこ	かくれんぼ	おてだま	あいきんち		地方・地域
池田 仁	水あび・魚とり・虫とり・ばあ びー玉・こま・凧あげ・竹馬	ばあ	おせ鬼	あおと鬼	なっこ	あいきん	あいきんちー	越谷・平方 大相模
田島 絹代	なわとび・石けり・おはじき・ あやとり	とぶすけ				じゃんけん	ぼん	大沢
鈴木 政子	おはじき・おてだま・鬼ごっこ・ 人とり・石けり・縄とび	パー	鬼ごっこ	かくれっこ	なっこ	じゃんけん	あいきんちー	増林
原田 康蔵	巡査ごっこ	ぶっすけ	鬼ごっこ	かくれんぼ	おてだま	あいきん	あいきんちー	瓦曾根
名倉三津枝	なっこ・おはじき・なわとび・ ぶっつけ	ぶっつけ		かくれっこ	なっこ	あいこん、えっ		新川町
高橋 清	兵隊ごっこ・巡査ごっこ・竹とんぼ こままわし	ぶっつけ	鬼ごっこ	かくれんぼ	おてだま	あいこ	あいこでしょ	出羽
高崎 力	パー・ニツキ・竹馬・軍事ごっこ・ 凧あげ・縄とび・かくれんぼ	ばー	鬼ごっこ	かくれんぼ	なっこ	あいきん	あいきんちー	大泊
鈴木 進志	竹馬・びー玉・こままわし・凧あげ 水泳・魚とり・チヨロツケ・バタリ 木のぼり・クンチ太鼓・川舟のり	パース	鬼ごっこ	かくれっこ	なっこ	あいきん	……チ、……チ	増林
染谷 高行	竹馬・木のぼり・魚つり・ざりがに 取り	ばあー	鬼ごっこ	かくれんぼ	なっこ	じゃんけんぼん	あいこでしょ	桜井
井上 富雄	竹馬(高さを競う)	ぶっけ		かくれんぼ				増林花田
高橋 正澄	兵隊ごっこ・ぼうけん・殿様ごっこ かいほり・巡査ごっこ・びー玉	とぶすけ	おせおに	かくねっこ		あいきん	あいきんち	蒲生

龜田 すみ子	おてだま・国とり・石けり・ままご と・ゴムとび・ボール投げ おはじき	ぶっけ	鬼ごっこ	かくれんぼ	なっこ	じゃんけん	じゃんけんぼい	〃	越ヶ谷
渡辺 富美	めんこ・びー玉・ペーゴマ・竹馬・ けんけん・ぬりえ・ゴムとび	めんこ	鬼ごっこ	かくれんぼ	おてだま	じゃんけん	じゃんけんぼん	〃	〃
関根 綾子	ぶらんこ・おはじき・おてだま いしけり	パー	鬼ごっこ	かくれんぼ	なっこ	合拳(あいけん)	あいけんち	〃	大相模
田村 穂之	陣取り・水雷ごっこ・石合戦・メン ゴ・ペーゴマ・カルタ・ねっさん棒	とぶすけ	鬼ごっこ	かくれんぼ	なっこ	じゃんけん	じゃんけんぼん	〃	萩島
岩瀬 静江	羽根つき・馬とび・馬とび・おはじ き・おてだま・縄とび・マリつき きせかえ・家族あわせ・双六	とぶすけ	鬼ごっこ	かくれんぼ	なっこ	あいけん	あいけんち	〃	大沢
山本 泰秀	かきかくし・につきん棒・けり出し 兵隊ごっこ・ぶっつけ・かくねんぼ よろつり	ばあす ぶっつけ	鬼ごっこ おにっこ	かくねごっこ かくねんぼ	なっこ なっこ	あいけんち あいけんち	あいけんち あいけんち	〃	増林 出羽
鈴木 徳治	兵隊ごっこ・泥棒ごっこ・なわとび かくれんぼ・めんこ・こま	とびつけ		かくれっこ	なっこ	あいけん	あいけん	〃	大沢
石塚 陳正	ぶっつけ・びー玉・かくれんぼ 河原あそび	ぶっつけ	鬼ごっこ	かくれんぼ	おてだま	あいけん	あいけんちちきち	〃	越ヶ谷
古谷 京子	なわとび・かくれんぼ・おはじき めんこ・鬼ごっこ・戦争ごっこ・た けなんご・びー玉・まりつき	めんこ	鬼ごっこ	かくれんぼ	おてだま	じゃんけんぼんよ	あいこでしょ	久喜市	
台 実		ばあ	鬼ごっこ	かくねごっこ	なんこ	やんか	やんかっせ	大利根町	
斉藤 博道	兵隊ごっこ・学校ごっこ・探検ごっ こ・めんこ・びー玉・かくれんぼ	パース	鬼ごっこ	かくれんぼ	おてだま	じゃんけん	じゃんけんぼい	北埼玉	羽生
高橋 保美	石けり・ゴムタン・まりつき・まま ごと・高とび・馬のり・竹馬・ペー ゴマ・メンゴ・かくれんぼ	めんちよ			なっこ			八潮鶴ヶ曾根	
中村 律子	まりつき	ぶっつけ				あいこんや		草加	新田

石渡 ミチ	なっこ・足けり・おはじき・竹馬・ ぶらんこ・木のほり	ぼす	鬼ごっこ	かくれんぼ	なっこ	あいけん	ほー	松伏 大川戸
鈴木 種雄	とんぼとり・ヤンマスツバライ	パース	鬼ごっこ	かくれんぼ	おてだま	チッチ	チッチイコ	吉川
高山 はつ	おはじき・羽根つき・きせかえ おてだま・石けり	めんこ	鬼ごっこ	かくれんぼ	おてだま	じゃんけん	じゃんけんぼん	東京 下町
酒井 達男	ベীগマ・メンコ・かくれんぼ 軍旗あそび	マルメン	鬼ごっこ	かくれんぼ	おてだま	じゃんけん	チークッタ	東京 向島
椎橋 昭三	鬼ごっこ・面子・ベীগマ	めんこ	鬼ごっこ	かくれんぼ	おてだま	じゃんけん	あいこでしよ	東京と川口
村上 昌宏	将棋の山くずし・ゴムとび・馬とび 家族あわせ・トランプ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	東京 北区
岩沢 明	べいごま・かくれんぼ・風あげ メンコ	〃	〃	〃	〃	〃	〃	足立区
高橋 正輝	陣取りゲーム・野球・バスケット	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
林 和江	ままごと・おはじき・縄とび・人形 かくれんぼ・陣とり	〃	〃	〃	〃	〃	ぼん	〃
竹谷フミ子	まりつき・おはじき・お手玉	〃	〃	〃	〃	〃	あいこでしよ	足立区
鈴木 和子	お手玉・鬼ごっこ・かくれんぼ まりつき・石けり	〃	〃	〃	〃	〃	じゃんけんぼん	〃
増岡 武司	石けり・缶けり・馬とび・トンボと り・べいごま・軍人将棋・めんこ	〃	〃	〃	〃	〃	ぼい	〃
星川 泰子	ままごと・おいしゃさんごっこ	〃	〃	〃	〃	〃	じゃんけんぼん	〃
西村 功	鬼ごっこ・めんこ・魚とり	〃	〃	〃	〃	〃	じゃんけんぼん	葛飾
木島 明子	かくれんぼ・鬼ごっこ・ボールなげ おてだま・おはじき・まりつき	〃	〃	〃	〃	〃	あいこでしよ	足立区
平井 五六	トランプ・石けり 兵隊ごっこ	〃	〃	〃	〃	〃	じゃんけんぼん	上野
青山 栄吉	ベীগマ・めんこ・かくれんぼ・兵 隊ごっこ・チャンバラ	〃	〃	〃	〃	〃	じゃんけんぼん	向島
		〃	〃	〃	〃	〃	保木間	保木間

千葉富久子	あや取り・石けり・ゴムとび コリントゲーム・おはじき				おじやみ	じゃんけん	じゃんけん	大阪
谷岡 隆夫	ボール遊び(自作の布製)・缶けり なわとび・ゴムとび	べった	鬼ごっこ	かくれんぼ	おじやみ	じゃんけん	ぼん(ほい)	大阪
金岡由紀子	リカちゃん着せかえ	めんこ	鬼ごっこ	かくれんぼ	おじやみ	じゃんけん	じゃんけんぼん	四国 香川県
新居 佳雄	めんこ・バイ・コマ・缶けり・相撲	めんこ	鬼ごっこ	かくれんぼ	おじやみ	じゃんけん	あいこでしょ	〃 徳島
殿山 悦三	ガイセン・ドンガメ	バッチン	鬼ごっこ	カクレンボ	オテダマ	ジャンケン	チャッケイシヤ	広島県
吉見美津恵	お客様ごっこ(紙人形)・陣とり 石けり・おい羽根		鬼ごっこ	かくれんぼ	おじやみ	じゃんけん	じゃんけんぼ あいこでしょ	九州 熊本



「古利根川のせい魚伝説」

昔、増森川の東側を流れていた古利根川には「せい魚伝説」
が残っている。

この川の「せい魚」に「せい魚」と呼ばれる巨大な魚が住んでい
たが、土砂の堆積で住みにくくなつた。

それで故郷を捨てて江戸の鐘ヶ淵に移り住むようになった。

ところが、この「せい魚」が通る船を転覆させるようになった。

そこで鐘ヶ淵を通る船は必ず「増森船だよ」と言つてにした。
すると「せい魚」は自分の故郷から来た船と思ひ込み転覆させ
ることはなくなつたといふ。

鐘ヶ淵は、綾瀬川が隅田川に注ぐ地点のやや下流にあった。

(加藤記)

役員紹介

趣味・モットー・信条・日常考えていることなど、役員に書いていただきました。

(原文のまま)

役職	氏名	趣味・モットー・信条・日常考えていること
会長	谷岡 隆夫	若い時は、登山で休日を費やし、その時折の、登山道の石仏に感動していました。大自然と接するよろこびが、私の現在の史跡めぐりの活動に通じています。一人でも多くの方が「会員になってよかった」とよろこんでくださるのを楽しみに今後も活動を続けたいと思っています。
副会長	加藤 幸一	趣味は、中学校の頃から始めた切手。本会との出会いは、越谷の中学校に赴任した年の史跡巡り。これがきっかけで越谷の歴史に興味をもつ。日ごろ思っていることは、自分なりに生徒や社会のために何か尽くすこと。
幹事長	宮川 進	私の趣味は日本・古代史の本を読むこと。古代遺跡を歩くこと。古楽(ビバルディ、モーツァルトなどの曲を当時の楽器で演奏)を聞くこと。安くておいしいものを食べることに。
常任幹事	堤竹 宏吉	私の女神さまは北原三枝・藤純子
幹事	西村 功	昔から各地の路傍の石塔、神社仏閣等は、私達の明るい市民生活を密かに支えておられると理解しています。諸先生方の解説や参考書による史跡等の学習を通じ、地域住民の親交の高揚に努めて参り度いと念じております。
常任理事	西田 茂	読書(特に歴史小説) 古文書 寧ろ鶏口と為るとも牛後と為る勿れ、小学校六年の時担任の先生に教わった、以来時々思いついて出している。近年好きな言葉に日日是好日、常にこうありたいと思う様になった。
〃	池田 仁	趣味 クラシック音楽全般 但しカラオケは嫌い 近世古文書 ポケない為 モットー信条 有無相通 遊行尊光書(善光寺住職) 「程」人間萬事此一字 趣味は屋敷内の狭畑で、作物と対話しながらの菜園・果樹づくり。 美しい自然景観・文化遺産・心のやすらぎを求めて、もう一度、西国観音巡礼の旅をした

<p>高崎 力</p>	<p>原島 明 小原勘三郎</p>	<p>理事 本間 清利</p>	<p>高橋 正澄</p>	<p>高山 はつ</p>	<p>林 和江</p>
<p>い。「日日好日」を心がけ、一日一日を大切に過ごしていきたい。 盆栽とはいえない程度の鉢植経験五〇年。先輩に勧められて始め途中迷いもあったが現在二五〇鉢と暮らしています。何事もやってみると奥が深いものです。 もう一つ道楽としてカメラ。これも自己満足だけですが後になって貴重な風景写真となる ことがあります。他人から見ればつまらないことでも長くやることにしています。</p>	<p>趣味 ゴルフ 誠実である事</p>	<p>バードウォッチング。三十年をこえた。明治神宮・都立野鳥公園・東大植物園・三室が主な探鳥地である。定例日は双眼鏡を片手にでかける。とすと共に度忘れがひどくなった。鳥名がでてこない。覚えた鳥はすぐ忘れる。困ったものだ。 鳥好きの仲間がおおぜいいる。鳥仲間は大切な財産である。 どんな小さな村や町でも、郷土を顕彰する郷土史料館などが設置されているが、三十万都市越谷には今だに設置されていない。これは残念なことでもあり、はずかしいことでもある。早急に史料館を設け、人材の確保にあたるよう切望する。</p>	<p>トルストイの寓話に登場する、ある賢者の言葉「人生にとって最高の幸せは、当面する人に最善を尽くせること」私は、この言葉を、ことのはか気に入り、いつも、心の隅に留め置くことにしている。</p>	<p>家庭の和を大切にすること、留守を預かることが多いので、自分の思うようにならないこともある。其の間を利用して、好きな仏閣巡りの旅に出てストレスの解消をする。 私の立場上の理屈として留守にすることも家庭の和に繋がると考慮しての行動である。</p>	<p>趣味 読書・音楽観賞・旅行・史跡めぐり モットー プラス志向 信条 書を読めば万倍の利あり 日常の考え 思いやりをもって人に接したいと心がけております。</p>

水上 清

好きな言葉……夢・希望

モットー……好奇心と積極性を失わず、明るく元気で日々を楽しむ。

趣味……登山（最少月一回）、旅（史跡めぐりを含む）。

「古文書読み」を早く趣味の域にまで高めたい。

森田 三郎

私儀の事でお話しを申し上げます。昨年は怪我をしました。犬の散歩中、坂から落下し、左足の骨折をして八ヶ月位、足の治療の為、休みました。仕事の方も定年をむかえさしつかいのないためによかったのですが、病院に入院をしていますと、交通事故、その他の事故で怪我人が多く、入れ替わりたえず出入がはげしく、病院が忙しいのでびっくりしました。今年足と相談し、会の活動を一生懸命はげみたいと思います。

佐藤 光夫

定年退職して退色しない様にと、いろいろ模索し手先のためにと始めたのが木彫で七年目の史跡めぐり入会して七年、目印の旗持ちちとして頑張っています。

実行委員

磯谷 知子

趣味 哥沢・端唄・三味線

モットー 明日は明日の風が吹く（くよくよしないで程々努力して）

信条 驕り高ぶらず出すぎず（少しミーハーで）明るく楽しく人と接していきたい。

岩瀬 静江

趣味 読書・旅行・編み物

今なにかと話題になっているクローン もし出来たら私のクローン娘を育ててみたい。

不自由な時代を生きて来た自分との違いを見比べてみたい。

弱虫、泣き虫なところは変わらないでしょうけどね。

高橋 正輝

趣味 読書 モットー（吉田知子先生の）継続は力なり

信条 先ずやってみる ダメでもともと

古沢 孝

（一）郷土研究会の研修会参加

（二）壮年野球クラブでの体力の維持

監 事	”	”	”	”
古田 美雄	増岡 武司	菅波 昌夫	青山 栄吉	鈴木 徳治
<p>趣味の万華鏡 小学生の頃、これと言ってなかった。 中学生の頃は海と空に興味があり、動く模型に夢中であった。</p>	<p>趣味 ちぎり絵 日常の考え 六十歳の歳月は、人生の半ばなり。 七十歳にしてかくしゃくたり、壮者を凌ぐ。 八十歳の道は静かな風月を楽しみ、 百歳にして初めて天寿の花と開く。 この長寿吟をもとに常に心豊かな生活を送りたいと考えております。</p>	<p>趣味 各種の展示会（歴史・郷土・古墳・美術）観賞と、各地域の博物館めぐり モットー 前進 信条 努力・工夫・知恵 日常の考え 越谷に博物館（資料館）の一日も早くできることを願って、郷土研究会の皆様と共に、今年は先ず第一歩から前進させたい。</p>	<p>私の趣味は囲碁とたまに水彩画を書くことです。碁は碁会所で週一〜二回（水・土）、絵を書くのは、その気になったときだけです。この二つとも取組んでいる時は楽しく、日頃の雑念（業績・費用など現実的思考）は頭から消え、精神浄化の時でもあります。</p>	<p>（三）写真クラブで毎月の撮影会の参加、例会の作品作り （四）市の余暇活動指導者資格の研修中 地元の皆様様との交流を深め、人との出会いを大切にしたいと考えて居ります。 趣味 ドライブ 旅行 スキー 山歩き 寺社めぐり 桜の追かけ等 立正の地理ですので、若い時耳で聞いたことを 目で確かめる義務があるという理屈をつくり、退職してから十年間で 北海道 本州 四国 九州の海岸線をほぼ走りました。 これからは 海岸線に拘らず 方々にタイヤの跡を印したいと願っています。</p>

宇田川正治

戦後食料確保もあって釣。

病氣療養中は、俳句、川柳。仕事に復帰してからカメラ、釣。

定年後、越谷に移住、終の栖の歴史が知りたく、郷土研の史跡めぐり、写真、古文書、釣
絵手紙等いろいろ留まっているが、今一番が頭の体操の川柳

「趣味いくつ息災という終電車」

日常使用している姓名は、出生した時、名前が親や近親者の方に付けられます。

名前の持つて居る意味には、それなりの成長に、社会の不可分の深まるに、呼び答えるだけ
でなく、色々とその人の功罪や人徳が含まれて居ます。

先祖の隔世遺伝と、親の直接遺伝が伝わり、其の人の運命に影響します。

人の為、世の為に尽くす事は、必ず子孫に良い結果が出ます。

「古志賀谷」と故山崎善司氏

会 報「古志賀谷」の題名について、いろいろの方から質問を受ける。
文字とおり「コシガヤ」と読む。

越谷の原名は古志賀谷ではないか？という。

故山崎善司氏の十年にわたる調査研究の論文から会報の表題とした旨を、昭和五五年刊行の第三号で、前会長、小島誠氏が巻頭言で述べられている。

山崎先生は、越谷生まれの方で、郷土史の研究に家業を承れて、各地を足で調査される真の郷土史家であった。

「千葉氏大系図」から、当地在住の古志賀谷氏を推察し、

近世越谷の開拓者会田氏のルーツ研究でも有名な方である。

(高橋正輝記)

越谷市郷土研究会 史跡めぐり

回数	実施年月日	行 先	案内者
264	平成11年4月4日	石仏めぐり・旧向畑村・大吉村・弥十郎村	加藤幸一
265	4月25日	秩父神社 西光寺 慈眼寺他	野村勝八
266	5月4日	さいたまの鉄道展 県立博物館 氷川神社	宮川 進
267	5月23日	御岳溪谷と玉堂美術館	平川陽三
268	7月25日	称名寺 八景島シーパラダイス	宮川 進
269	9月26日	瓦曾根溜井 大聖寺	高崎 力
270	10月31日	第一班 鎌倉 頼朝墓 瑞泉寺	宮川 進
	11月7日	第二班 鎌倉 頼朝墓 瑞泉寺	宮川 進
271	11月28日	湯島聖堂 湯島天神 東大 根津神社	野村勝八
272	12月11日	忠臣蔵めぐり 東御苑 吉良邸 泉岳寺	宮川 進
273	平成12年1月3日	浅草七福神めぐり	山田政信
274	2月27日	深谷(バス)満徳寺 渋沢記念館 煉瓦館	平川陽三
275	3月26日	石仏めぐり・旧増林村	加藤幸一
276	4月2日	千鳥が淵	山田政信
277	4月23日	岩槻・芳林寺 遷喬館 時の鐘 龍門寺	大村 進
278	5月5日	葛飾区郷土と天文の博物館・怪物伝説	高崎 力
279	5月28日	田園調布・上野毛の古墳めぐり	宮川 進
280	7月23日	長滞ライン下りとSL	宮川 進
281	9月20日	日光(バス) 大猷院 大谷観音	野村勝八
282	10月14日	鎌倉・円覚寺 東慶寺 建長寺 八幡宮	宮川 進
283	11月19日	市川・葛飾八幡宮 中山法華経寺	小原勘三郎
284	12月3日	蒲生・茶屋通りとその周辺	高橋正澄
285	平成13年1月3日	隅田川七福神めぐり	山田政信
286	2月25日	鎌倉・円覚寺 東慶寺 建長寺 八幡宮	宮川 進

越谷市郷土研究会 研究発表会

回数	実施年月日	テ ー マ	発表者
125	平成11年6月27日	わが街・蒲生の歴史こぼれ話	高橋正澄
126	8月22日	江戸中期・俳諧師・師竹庵越谷吾山	杉本つとむ
127	平成12年1月30日	非運の戦国武将・太田資正	大村 進
128	6月25日	越谷生まれの江戸町人の活躍	高崎 力
129	9月2日	第一回歴史講座 秩父原人の時代	石岡憲雄
130	10月21日	第二回歴史講座 三内丸山人の時代	石岡憲雄
131	11月11日	第三回歴史講座 吉野ヶ里人の時代	橋本充史
132	平成13年1月21日	第四回歴史講座 古墳時代を見通す	高橋一夫
133	2月10日	第五回歴史講座 石と水の都・飛鳥	高崎光司

越谷市郷土研究会 展示出品リスト

回数	出品年月	出品作品名	出品者
第25回 (市民祭)	平成11年10月	1) 釈迦堂再建無尽連名帳	加藤幸一
		2) 大沢小学校の「青い目の人形」	水上 清
第31回 (文化祭)	平成11年11月	1) 旧増林村の石仏	加藤幸一
		2) 日光道中分間延絵図	菅波昌夫
		3) 増林河岸の跡	鈴木進志
		4) 越巻村出身の力士「荒井山大蔵」	高橋 清
		5) 廣徳君行状に見る蒲生の幕末	高橋正澄
		6) 「迅速測図原図」とその原図に見る 弥十郎村	原田民自
		7) 大沢小学校の「青い目の人形」	水上 清
		8) 越谷の古いお風呂屋さん	宮川 進
(芸術祭)	平成12年3月	1) 市内・元荒川北部流域の古代遺跡	宮川 進
		2) 古利根川の「ばば渡し」	加藤幸一
		3) 増林の草創期とその後の歴史	山本泰秀
第26回 (市民祭)	平成12年10月	1) 越谷八景	加藤幸一
		2) 増林地区の江戸時代の寺社	山本泰秀
第32回 (文化祭)	平成12年11月	1) 旧増森・中島・小林村の石仏	加藤幸一
		2) 越谷吾山とその時代	金岡由紀子
		3) 越谷市内寺院の見所	菅波昌夫
		4) 越谷出身・日本橋千疋屋総本店	高崎 力
		5) 昭和三十年代の農事風景	高橋 清
		6) 越谷歌人の歌会始め	高山はつ
		7) 越谷と御猟場の印象	平井五六
		8) 武蔵国増林村の変遷	山本泰秀
(芸術祭)	平成13年3月	1) 増林の円空仏	加藤幸一

会 員 名 簿

昭和13. 2. 28現在

氏名	氏名	氏名	氏名	氏名	氏名
会田 俊	大竹秀夫	小林秀男	染谷勇蔵	名倉 功	宮内和代
会田栄子	太田つる	小林まつ	染谷高行	名倉さわ	宮川ユミ子
青木祥子	大塚節子	近藤ユキ子	染谷政之助	名倉三津枝	宮川 進
青木泰英	岡田和子	後藤千代子	染谷雷子	南雲ハルエ	向佐清子
青木豊子	岡山エミ子	斉藤友子	高崎 力	並木栄子	武藤すみ子
青山栄吉	小川勝海	斎藤博道	高橋 清	成瀬 潔	村上かつ子
秋元ふく	小川隆雄	斎藤弘義	高橋正輝	新野トモ子	村上月江
芦川文字	小口久美	堺 友子	高橋正澄	新居佳雄	村上フサ子
新井登英栄	小倉富久枝	酒井運男	高橋とき	西川信徹	最上みち子
荒瀬富美子	小原勤三郎	坂本弘子	高橋知子	西沢許女	本山三智子
有瀬龍雄	折原烈子	佐久間朝子	高橋保美	西田 丞	森田三郎
安藤トモ子	鏡 澄子	佐久間サワ	高橋良輔	西田 茂	森中重樹
一色英子	片岡和子	佐々木一塵	高山はつ	西村 功	森屋英龍
飯塚英志	片桐 薫	佐々木東助	武井福三郎	沼倉セツ	柳田明雄
池田 仁	加藤きよ	佐藤滋子	武田和枝	野口康子	山口美津江
伊沢 茂	加藤幸一	佐藤光夫	竹谷フミ子	野口祐許	山崎孝二
石井ふさ	加藤サイ子	椎橋昭三	田島絹代	野沢陽子	山崎洋子
石川辰三郎	加藤富士代	重田さと子	田所義朗	野村勝八	山田 稔
石崎一宏	金岡由紀子	権原陸郎	田中きく江	橋本和雄	山田順子
石沢正美	金子久美子	渋谷正芳	田中悠紀男	長谷川久一	山田政信
石塚陳正	上郷以満子	島田ユキ子	谷岡隆夫	林 和江	山梨隆司
石鍋隆子	上村 透	清水初枝	台 実	林 知子	山本鉄也
石渡ミ子	龜田すみ子	新戸婦美	千葉富久子	林 佳子	山本泰秀
泉 雅彦	川添ハルミ	須賀慶子	塚本礼子	原島 明	横川静江
磯谷知子	川田佐一郎	須賀幸子	土田愛子	原田熊蔵	吉川輝男
井田康雄	川原 実	須賀徳雄	堤竹宏吉	原田民自	吉田正代
市川巳隆	菅野トミ江	菅波昌夫	堤原保貞	東京寿男	吉見美津江
一安タミ子	菊池松枝	須賀美代子	津山正幹	松山克子	米川徹子
伊藤きよ子	木崎キン	菅原秀逸	寺本敏子	平井五六	若泉和子
伊藤靖二	木島明子	杉島ヨウ子	照井春吉	平川陽三	若狭いま子
稲垣和子	木曾庵義	杉田サトミ	戸田嘉昭	平田博子	若松清一
井上富雄	北原広美	鈴木英武	殿山悦三	福谷洋一	渡辺富美
井上文字	木原徹也	鈴木和雄	豊岡雅範	藤井忠徳	渡部義男
井上陽子	木村恵美子	鈴木和子	豊田 重	古沢 孝	渡部勝代
岩井 茂	木村信次	鈴木作之助	豊田 裕	古田英雄	渡部テフ
岩沢 明	楠田美枝子	鈴木進志	内藤録次	古谷京子	渡部フミ
岩瀬静江	工藤さだ子	鈴木千也子	中川雄一郎	星川泰子	和田敏道
岩根富子	工藤松四郎	鈴木タカ木	中沢正夫	星野昭江	
上野和子	倉科律子	鈴木種雄	中島栄子	堀井和由	
宇佐美加代子	黒田田男	鈴木千代	中島キヨ子	堀井博之	
宇佐見武雄	黒田ツルヨ	鈴木徳治	中地婦志江	堀川静二	
薄井 衛	黒田陽一	鈴木秀俊	中村和代	本間清利	
宇田川正治	小泉シデ	鈴木政子	中村孝次郎	前田時子	
大川邦子	小出美代子	須藤清人	中村修平	牧野 満	
大河原初男	小島 誠	関根綾子	中村哲士	正岡実子	
大久保宏一	小杉勝義	関根正直	中村 貢	増岡武司	
大熊秋雄	小林克規	瀬下さつき	中村律子	松沢開作	
大熊弥平	小林重蔵	仙波好江	長瀬由木夫	松沢長次郎	
大滝耐子	小林 登	染谷耕司	長野いつ	水上 清	

計 282名

越谷市郷土研究会 会則

第一章 総則

第一条 本会は越谷市郷土研究会と称する。

第二条 本会の事務所は幹事宅に置く。

第三条 本会は市内の郷土研究者の連絡をはかり、郷土史料の調査研究を目的とする。

第二章 事業

第四条 本会は第三条の目的を達成するため左の事業を行なう。

一、郷土史研究の連絡とその啓発。

二、郷土文化財保存の協力。

三、機関誌の発行。

四、その他、本会の目的達成上、必要な事項。

第三章 会員および会友

第五条 会員は本会の趣旨に賛同するものを以てする。

会友は本会に三十年以上在籍する会員の中より会長が指名し、理事会の承認を得る。

ただし、役員は会友とならない。

会友が役員となった場合、役員在任期間は会友たる身分を停止する。

会友は第六条に定める会費納入の義務を免れるが、会員と同じ権利及び義務を有するものとする。

第六条 会員は会費として、毎年度初めに金二千円を納入する。

第七条 本会に左の役員を置く。

第四章 役員及び職員

会長 一名

副会長 二名

常任理事 若干名

理事 若干名

幹事長 一名

常任幹事 若干名

幹事 一名

監事 二名

常任顧問 若干名

顧問 若干名

会長、副会長は理事会の推薦とする。

常任理事は理事会に於いて、理事の中から選任する。

理事は総会に於いて、会員の中から選任する。

幹事長、常任幹事及び幹事は会長が委嘱し、理事会の承認を得る。

監事は理事会で推薦し、会長が委嘱する。

常任顧問は本会に対し、特に功績があった会員の中から理事会が推薦し、会長が委嘱する。

顧問は理事会で推薦し、会長が委嘱する。

第八条 会長は会務を総理し、本会を代表する。

副会長は会長を補佐し、会長事故あるときこれに代わる。

常任理事は常任理事会を組織し、会務を審議する。

理事は理事会を組織し、会務の執行に当たる。

幹事長は庶務会計に従事し、これを統括する。

常任幹事は庶務会計に従事し、これを管理する。

幹事は庶務会計に従事する。

監事は会計を監査する。

常任顧問は理事会に出席し、その諮問に応じる。

顧問は重要な会務につき会長の諮問に応じる。

第九条 役員任期は二ヶ年として再任を妨げない。

第五章 会議

第十条 会議を分かつて総会、理事会、常任理事会とする。

第十一条 理事会、常任理事会は必要の都度、会長が招集する。

第十二条 総会は毎年一回、会長が招集する。

第十三条 本会の会議は出席者の過半数をもって議決する。

第六章 会計

第十四条 本会の経費は会費、寄付金及び雑収入をこれに充てる。

第十五条 本会の会計年度は、毎年四月一日から始まり三月三十一日に終わる。

附則

1. 本会の会則の変更は、総会の議決によるものとする。

2. 本会施行のため必要な規定は、会長が別に定める。

3. 本会則の施行は、昭和四十年二月二十七日とする。

改訂 昭和五二・五・二二 平成三・六・三〇

平成六・六・二六 平成一二・六・二五

⊗年会費納入のお願い⊗

一、金額 二〇〇〇円(平成十三年度)

二、納入方法 左記の①・②のいずれかで

四月～六月までにお問い合わせします。

①郵便振替 振替口座番号

〇〇一二〇一四一六四〇八三

(00120141164083)

越谷市郷土研究会

郵便局に備え付けの振替用紙をお

使ってください。

②史跡めぐりなどのさい、現金でお願いします。

越谷市郷土研究会 役員

平成13年度～14年度
(平成13年5月20日理事会承認)

常任顧問 小島 誠

会 長 谷岡 隆夫

副 会 長 加藤 幸一

常任理事	小原勘三郎	佐藤 光夫	鈴木 種雄
	高崎 力	野村 勝八	林 和江
	原島 明	山口美津江	
理 事	池田 仁	磯谷 知子	一色 英子
	岩瀬 静江	菅波 昌夫	鈴木 徳治
	鈴木 秀俊	高橋 正澄	西田 茂
	古沢 孝	増岡 武司	水上 清
	森田 三郎		

幹事長 宮川 進

常任幹事 堤竹 宏吉

幹 事 西村 功

監 事 高橋 清 山梨 隆司

実行委員	青山 栄吉	伊藤 靖二	小林 重蔵
	原田 民自	古谷 京子	牧野 満

会 友	会田 俊	有瀧 龍雄	木原 徹也
	本間 清利		

越谷市文化連盟

常任理事 谷岡 隆夫

理 事 宮川 進

代議員 鈴木 種雄 堤竹 宏吉 山口美津江

市民まつり及び市民文化祭実行委員(展示)

小原勘三郎 加藤 幸一 鈴木 種雄

あとがき

小原勘三郎

おおくの方がたのご寄稿をいただき、会報「古志賀谷」十一号を発売することができました。

これもひとえに、会員のお力添えのたまものとお礼申し上げます。「旧日光街道書き書き」は、以前から旧道にお住まいの方がたに、むかしの旧道・旧道の展望などを語っていただきました。

「越谷のお正月と『とうかんやのわらでっぼう』」は、すたれつつあるお正月の行事に焦点をあてました。

各地の行事とくらべて、皆さまからの反響をお待ちしています。

「博物館のない越谷」「越谷市・資料館都市構想」は、文化都市を推進する要請からだされました。

「史跡めぐりの記録」は、毎号、掲載しています。

参加者のなかからお願いして書いていただいております。

各地の史跡や風物を紹介する企画です。

会報「古志賀谷」は、国会図書館をはじめ、各地の大学・図書館・交流のある史談会へ送付しています。

地域同人誌としては、他の史談会誌に遜色ないと考えています。

今後とも、向上をめざして刊行を続けてまいります。

ご支援をお願い申し上げます。

編集委員

谷岡 隆夫	鈴木 秀俊	加藤 幸一
宮川 進	堤竹 宏吉	西村 功
鈴木 種雄	西田 茂	池田 仁
山口美津江	高崎 力	野村 勝八
原島 明	小原勘三郎	水上 清
佐藤 光夫	一色 英子	高橋 正澄
原田 民自	増岡 武司	

訃報

木村信次様 当会元幹事長
平成十三年四月一〇日（九十五歳）ご他界
当会創設者のお一人です。ご冥福をお祈り
致します。
(事務局)

会報 十一号

発行日 平成十三年六月

発行所 越谷市郷土研究会

代表者 越谷市宮本町三の一七の八

印刷所 谷岡 隆夫

三光堂印刷所

越谷市大沢一の十五の十四